福岡市早良区

有田・小田部 14
原 遺 跡 5

――下水道工事に伴う調査――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集

1991

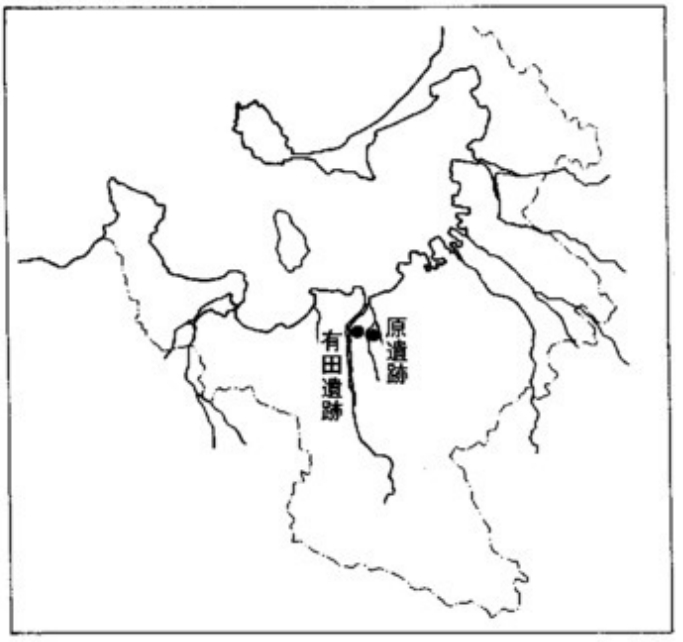
福岡市教育委員会

福岡市早良区

有田・小田部 14
原 遺 跡 5

―下水道工事に伴う調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集



1991

福岡市教育委員会

序

福岡市早良区は古くより多くの人々が暮らしており，数多くの遺産が残っていますが年々宅地化が進んでいます。このたび，生活環境の改善をはかるべく，有田・小田部地区，原地区において下水道整備事業が行われ，それにともなう発掘調査を行いました。

調査の結果，縄文時代から近代にわたる遺構・遺物が発見され，先人達の生活の一端をうかがうことができました。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深めることに役立てば幸いです。

発掘調査・報告に際しまして，関係の方々の御理解と御協力をいただいたことに深く感謝いたします。

平成３年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　井口雄哉

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が1986年から1990年にかけて実施した有田・小田部地区，原地区下水道工事に伴う発掘調査報告書である。
2．遺構番号はブロック別に通し番号としＳＢ－掘立柱建物、ＳＣ―住居跡，ＳＫ　土坑，ＳＤ―溝，ＳＥ　井戸，ＳＡ―柵，ＳＸ―その他と呼称を記号化した。
3．調査次数は，1986年度―有田118次（ART118），1987年度　有田123次（ART123），1988年度―有田139次（ART139）・原11次（HAA11），1989年度―有田155次（ART155）・原15次（HAA15），1990年度―有田161次（ART161）である。
4．遺構実測図は各調査担当者を中心に行った。遺物実測図は，宮井善朗・長家伸が行った。また製図は長家の他英豪之・黒田和生・松尾秋代が行った。遺構写真は各調査担当者が撮影し，遺物写真は長家が撮影した。
5．本書で用いる方位は座標北であり磁北はこれに6°2′西偏する。
6．本書に関する遺物・記録等は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵，管理されるので活用されたい。
7．本書の執筆・編集は山崎龍雄・宮井の協力を得て長家が行なった。

本 文 目 次

序
第1章　はじめに…… 1
1．調査に至る経過…… 1
2．調査体制…… 1
3．立地と環境…… 2
4．調査，整理概要…… 2
第2章　調査の記録…… 7
1．有田遺跡群…… 7
1）　F区の調査…… 7
2）　G区の調査…… 8
3）　H区の調査…… 13
4）　I区の調査…… 15
5）　J区の調査…… 27
6）　K区の調査…… 42
7）　L区の調査…… 52
8）　M区の調査…… 53
2．原遺跡群…… 64

挿 図 目 次

Fig 1　周辺の遺跡（1/50000）…… 3
Fig 2　有田遺跡群　F区～M区調査地点位置図（1/6000）…… 4
Fig 3　原遺跡群調査地点位置図（1/6000）…… 5
Fig 4　F区調査地点配置図（1/2500）…… 7
Fig 5　G区調査地点配置図（1/2000）…… 8
Fig 6　SC01・SC04・SA16（1/40・1/60）…… 11
Fig 7　G区出土遺物（1/2・1/3）…… 12
Fig 8　H区調査地点配置図（1/2500）…… 13

Fig 9　SC01（1/40）……14
Fig 10　Ⅰ区調査地点配置図（1/2000）……15
Fig 11　SK05・SE47・SD28.29・SE48（1/60）……17
Fig 12　SD30・SD31・SC01・SD32.33（1/60, 1/80）……19
Fig 13　SD34・SK14・SD38・SD40（1/60）……21
Fig 14　SC02・SK17・SK18・SC03・SD41・SD43・SD42・SC04（1/60）……23
Fig 15　Ⅰ区出土遺物(1)（1/4）……25
Fig 16　Ⅰ区出土遺物(2)（1/4）……26
Fig 17　J区調査地点配置図（1/2000）……折込
Fig 18　SK17・SK21・SK23・SK28・SC01・SD45（1/40, 1/60, 1/80）……29
Fig 19　SD51・SD53・SD56（1/60）……31
Fig 20　SD74・SD80（1/40, 1/60）……33
Fig 21　SD77・SD82・SD83・SD84・SD85（1/40）……35
Fig 22　SK35・SK36・SK37.38・SK39・SK41（1/40）……37
Fig 23　J区出土遺物(1)（1/3）……39
Fig 24　J区出土遺物(2)（1/3）……41
Fig 25　K区調査地点配置図（1/2000）……42
Fig 26　SD05・SD06・SD07・SD10・SD11・SK03（1/30, 1/40, 1/60）……45
Fig 27　SD12.13・SK04・SD15（1/40, 1/100）……47
Fig 28　SD16・SD17（1/40, 1/60）……48
Fig 29　K区出土遺物(1)（1/4）……50
Fig 30　K区出土遺物(2)（1/4）……51
Fig 31　L区調査地点配置図（1/2500）……52
Fig 32　M区調査地点配置図（1/2500）……53
Fig 33　全体図(1)（1/250）……54
Fig 34　全体図(2)（1/250）……55
Fig 35　全体図(3)（1/250）……56
Fig 36　全体図(4)（1/250）……57
Fig 37　全体図(5)（1/250）……58
Fig 38　全体図(6)（1/250）……59
Fig 39　全体図(7)（1/250）……60
Fig 40　全体図(8)（1/250）……61
Fig 41　全体図(9)（1/250）……62

Fig 42　全体図⑩（1/250）……63
Fig 43　原地区元年度調査分調査地点配置図（1/2500）……64
Fig 44　全体図及び出土遺物（1/150，1/3）……66

表　目　次

Ｔａｂ．1　調査地点一覧……6

図　版　目　次

PL．1　(1)　G10　全景（西より）
　　(2)　H05　東半（西より）
PL．2　(1)　H05　SC01（西より）
　　(2)　I35　SD41（西より）
PL．3　(1)　I36　SD42　東側土層（西より）
　　(2)　I36　SD43（北より）
PL．4　(1)　I41　全景（東より）
　　(2)　J29　SD82（北より）
PL．5　(1)　J30　SD83（東より）
　　(2)　J30　SD83　西側土層（東より）
PL．6　(1)　J30　SD84（北より）
　　(2)　J35　全景（西より）
PL．7　(1)　J43　全景（北より）
　　(2)　J46　全景（東より）
PL．8　(1)　J46　SK39（南より）
　　(2)　J46　SK41（東より）
PL．9　(1)　K10　SK04（北より）
　　(2)　K10　SK04　遺物出土状況（北より）
PL．10　(1)　K10　SD15（東より）
　　(2)　K10　SD15　南側土層（北より）

PL.11 (1) K11 SD16（東より）
(2) K13 全景（東より）
PL.12 (1) 原地区3区全景（東より）
(2) 原地区7区全景（西より）
PL.13 出土遺物(1)
PL.14 出土遺物(2)
PL.15 出土遺物(3)
PL.16 出土遺物(4)

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

下水道整備事業は市民生活の環境改善を計るため，福岡市における最重要施設の一つとして，年度計画を持って順次進められている。早良区有田・小田部地区においても，昭和59年度以来年次計画を持って整備が進められて来ている。当初は遺構の存在は少ないとして立会調査にとどめるものと考えてきたが，周辺地区の調査が進み，遺跡の実態が明らかになるにつれ，本格的調査が必要となって来た。昭和61年度，有田１丁目・２丁目地内に下水道が建設されることとなった。これを受けて埋蔵文化財課では，事業課の下水道局西部建設課と協議を行い，下水道局の令達事業として調査を行なうこととなった。事業自体公共事業担当の第１係の業務であったが，当時職員はそれぞれの業務に携わっており，当地区で民間開発の調査を担当していた，第２係の山崎龍雄・米倉秀紀が調査を担当する事となった。昭62年度は，第１係職員及び山崎・米倉で工区ごとに担当を決め調査を行った。63年度から平成２年度は担当職員により調査を行った。

また原地区においては昭和63年度～平成２年度にかけて，有田地区と併行して調査を行った。

2．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

庶務担当　岸田隆（昭和61年度～昭和63年度），安倍徹（平成元年度），中山昭則（平成２年度）

調査担当　**昭和61年度**　山崎龍雄・米倉秀紀

昭和62年度　二宮忠司・松村道博・山崎・米倉・田中寿夫・杉山富雄・大庭康時・小畑弘己・佐藤一郎

昭和63年度　宮井善朗・加藤良彦

平成元年度・２年度　長家伸

整理補助　平川敬治・英豪之・黒田和生

整理作業　池田礼子・井上マツミ・内尾トミ子・松下節子・吉田祝子・長橋厚子・中原尚美・太田頼子・太田次子・飯田千恵子・林由紀子・浜野年代・外村陽子・佐藤幸子・松尾秋代

なお調査作業については，調査日程が不規則であったため，有田地区の作業員の方々に随時協力をいただいた。また調査にあたっては，下水道局西部建設課及び建設業者の方々にも工事の日程等で協力をいただいた。

3．立地と環境

有田遺跡群・原遺跡群の立地する早良平野は，東側は油山山塊と鴻ノ巣山丘陵によって福岡平野と画され，西側は背振山系より派生した西山・飯盛山・高祖山・叶岳・長垂山により糸島平野と画されている。平野の中央部を室見川が北流しており，平野の殆どが室見川の扇状地平野及び三角州平野によって構成されている。有田台地は山麓より独立し，室見川下流に近い中央部に立地する。台地の西に室見川，東に金屑川が北流し台地縁辺を浸蝕したことがうかがえる。また北側には八手状に広がる谷部が存在している。風化礫層を基材としてその上に阿蘇起源の火山灰が堆積している。有田遺跡は旧石器時代から近世迄の複合遺跡であり，現在まで160次を越える調査が行われている。弥生時代では前期初頭の環溝が想定されている。その他にも２本の弥生時代環溝も考えられる。古代では大型掘立柱建物群，柵列に囲まれる倉庫群が検出された。規模・形態からみると官衙的様相の濃いものである。早良郡衙との推定もなされている。中世では文献資料により大内氏早良郡代大村興景の知行地，大友氏の被官小田部氏の里城としての小田部城が知られており，小田部城については郭を形成したと思われる濠が有田地区において検出されている。原遺跡群は有田台地の東，金屑川と稲塚川にはさまれた低位段丘上に立地する。現在までの調査で弥生～近世までの遺構，遺物が検出されている。北側では弥生時代集落が検出されている。また中世の遺構は全体に広がっており，特に９次調査・10次調査など従来よりも遺跡群の範囲が拡大された所での居館址・集落址の確認は今後の中世史像理解の一助となるであろう。

4．調査・整理概要

調査は下水道工事に先行して行った。工事の性格上調査不可能な地点及び夜間調査に至った地点もある。また従来の道路工事，水道，ガス管等により削平を受けている地点も少なくなかった。また５ケ年間にわたる調査のため調査地点の呼称等錯綜する部分もあるので，報告書をまとめるにあたり調査地点・遺構番号等の整理を行った。有田地区の整理にあたっては従来整理で利用されているＡ～Ｍの大ブロックを利用し，調査地点をブロック毎に分類した。そしてそれぞれのブロック毎に，調査地点に118次調査分から01・02……と番号をふり，Ａ01・Ａ02……のように調査地点を表記した。また遺構番号についてもブロック毎に，住居跡・土坑・溝・井戸・その他の順に通し番号をつけた。この際ピットについては調査時の番号を使用した。また原地区においては，63年度分については遺構・遺物は認められず一括して扱い，元年度分について調査時の区番号を１区から順次使用した。

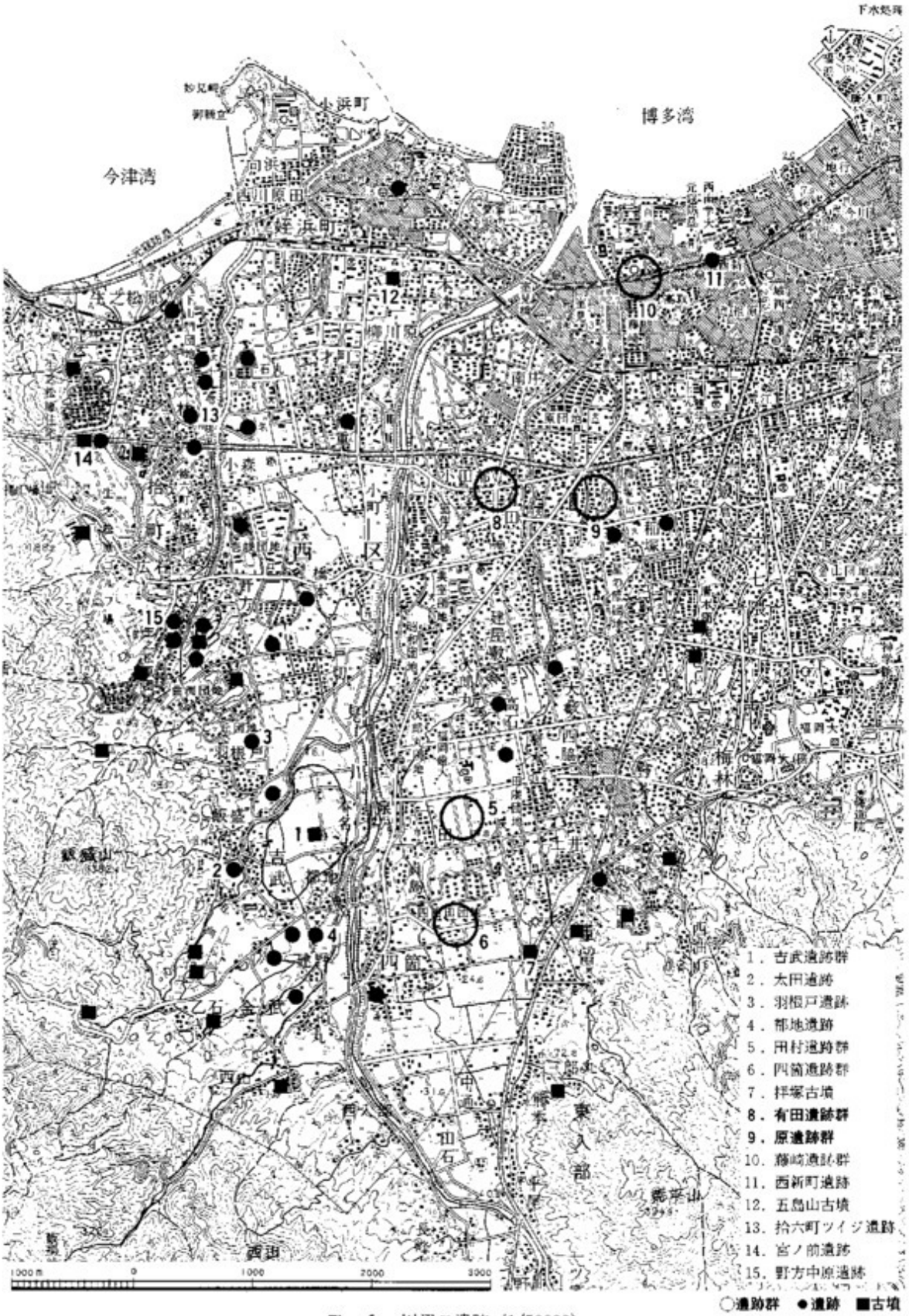


Fig. 1　周辺の遺跡（1/50000）

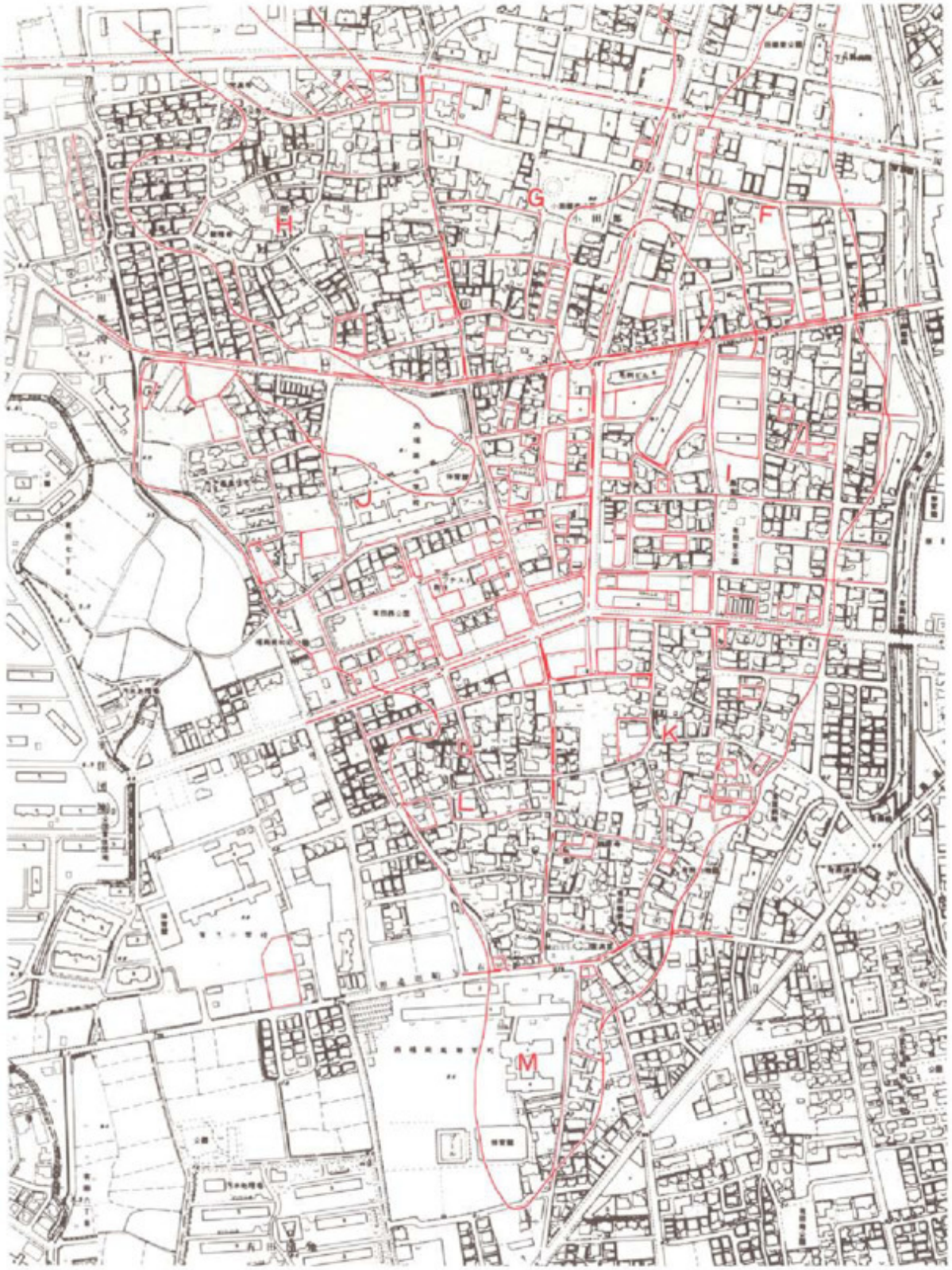


Fig. 2　有田遺跡群　F区～M区調査地点位置図（1/6000）

Fig. 3　原遺跡群調査地点位置図（1/6000）

有田遺跡

年度	次数	地点番号	延長(m)
61	118	I-01	20
61	118	I-02	82
61	118	I-03	67
61	118	I-04	74
61	118	I 05	110
61	118	I-06	66
61	118	I-07	42.5
61	118	I 08	72
61	118	I-09	19
61	118	I-10	69.5
61	118	I-11	31
61	118	I 12	39
61	118	I-13	69.5
61	118	I-14	35.5
61	118	I-15	83
61	118	I-16	62
61	118	I-17	39
61	118	I-18	36.5
61	118	I-19	44.35
61	118	I-20	97
61	118	I-21	30
61	118	I-22	54
61	118	I-23	55.5
61	118	J-01	10
61	118	J-02	91
61	118	J-03	41.5
61	118	J-04	42
61	118	J-05	34
61	118	J-06	35.5
61	118	J-07	40
61	118	J-08	89
61	118	J-09	97
61	118	J-10	93
61	118	J-11	38.5
61	118	L 01	22
61	118	L-02	36.5
61	118	L-03	96
61	118	L 04	30
61	118	L 05	139.5
61	118	L-06	38
61	118	L-07	152
61	118	L-08	75
61	118	L-09	119
62	123	F	402
62	123	G-01	34
62	123	G-02	36
62	123	H-01	35.8
62	123	H 02	23
62	123	H-03	20
62	123	I-24	76.5
62	123	I-25	62.5
62	123	I-26	54
62	123	I-27	30
62	123	I-28	31.5
62	123	I-29	17.5
62	123	I-30	139
62	123	I-31	91
62	123	I-32	33
62	123	I-33	69
62	123	I-34	56
62	123	J-12	27
62	123	J-13	56.5
62	123	J-14	72
62	123	J 15	36
62	123	J-16	117.5
62	123	J-17	45
62	123	J-18	58.5
62	123	J-19	40
62	123	J-20	64
62	123	J-21	54
62	123	J-22	38
62	123	J-23	16
62	123	J-24	120
62	123	J-25	332
62	123	J-26	
62	123	K 01	36
62	123	K-02	47
62	123	K-03	14
62	123	K-04	59
62	123	K-05	44
62	123	K-06	32
62	123	K-07	25
63	139	G-03	23
63	139	G-04	50
63	139	G-05	48
63	139	G-06	25
63	139	G-07	16
63	139	G-08	40
63	139	G-09	33
63	139	G-10	31
63	139	G-11	30
63	139	G 12	32
63	139	G-13	15.5
63	139	G-14	30
63	139	G-15	22
63	139	G-16	28
63	139	G-17	28
63	139	H-04	27
63	139	H-05	24
63	139	H-06	20
63	139	H-07	22
63	139	H-08	17
63	139	H 09	48
63	139	H-10	45
63	139	H-11	32
63	139	H-12	30
63	139	H-13	34
63	139	H-14	33.5
63	139	H-15	25
63	139	H-16	64
63	139	H 17	60
63	139	H-18	30.5
63	139	I-35	37
63	139	I-36	38
63	139	I-37	35
63	139	I-38	35
63	139	I-39	38
63	139	I-40	15
63	139	I 41	35
63	139	I-42	271
63	139	J-27	18
63	139	J-28	38.5
63	139	J-29	39.5
63	139	J 30	40.5
63	139	J-31	40
63	139	J-32	8
63	139	J-33	21
63	139	J 34	12.5
63	139	J-35	20
63	139	J-36	25.5
63	139	J-37	37.5
63	139	J-38	18
63	139	J-39	29
63	139	J-40	30
63	139	J-41	24
63	139	J-42	15
63	139	J-43	37.5
63	139	J-44	31.5
63	139	J-45	21.5
63	139	J-46	26.5
63	139	J-47	45
63	139	J-18	55.6
63	139	K-08	22
63	139	K-09	40
63	139	K-10	41.2
63	139	K-11	37
63	139	M-01	21
63	139	M-02	34
63	139	M-03	50
63	139	M-04	50
63	139	M-05	50
63	139	M 06	143
元	155	K-12	45.5
元	155	K-13	40
元	155	K-14	19
元	155	K-15	18
元	155	K-16	58
元	155	K-17	43.5
元	155	K-18	93
元	155	K-19	76
元	155	K-20	31
元	155	K-21	64
2	155	K-22	85.5

原遺跡

年度	次数	地点番号	延長(m)
63	14		656.2
元	15	1区	52.5
元	15	2区	23
元	15	3区	49.5
元	15	4区	96
元	15	5区	64
元	15	6区	33
元	15	7区	14
元	15	8区	30
元	15	9区	31
元	15	10区	94.5
元	15	11区	35
元	15	12区	281.5
元	15	13区	50
元	15	14区	31

Tab. 1　調査地点一覧

第２章　調査の記録

１．有田遺跡群

1)　Ｆ区の調査

概要　Ｆ区は有田遺跡群の北東側に設定された調査区であり，中央に谷が入り込む。この谷部は81次調査 SD07にあたるもので，縄文時代晩期～古墳時代までの多量の遺物が包含されている。当区は123次調査が行われた。台地部分は削平が著しく道路舗装部分直下に八女粘土層が確認された。遺構は検出されなかったが，谷部の落ち際が確認された。遺物はほとんど出土せず，わずかに縁辺部より時期不明の細片が出土したのみである。

Fig. 4　Ｆ区調査地点配置図（1/2500）

2)　G区の調査

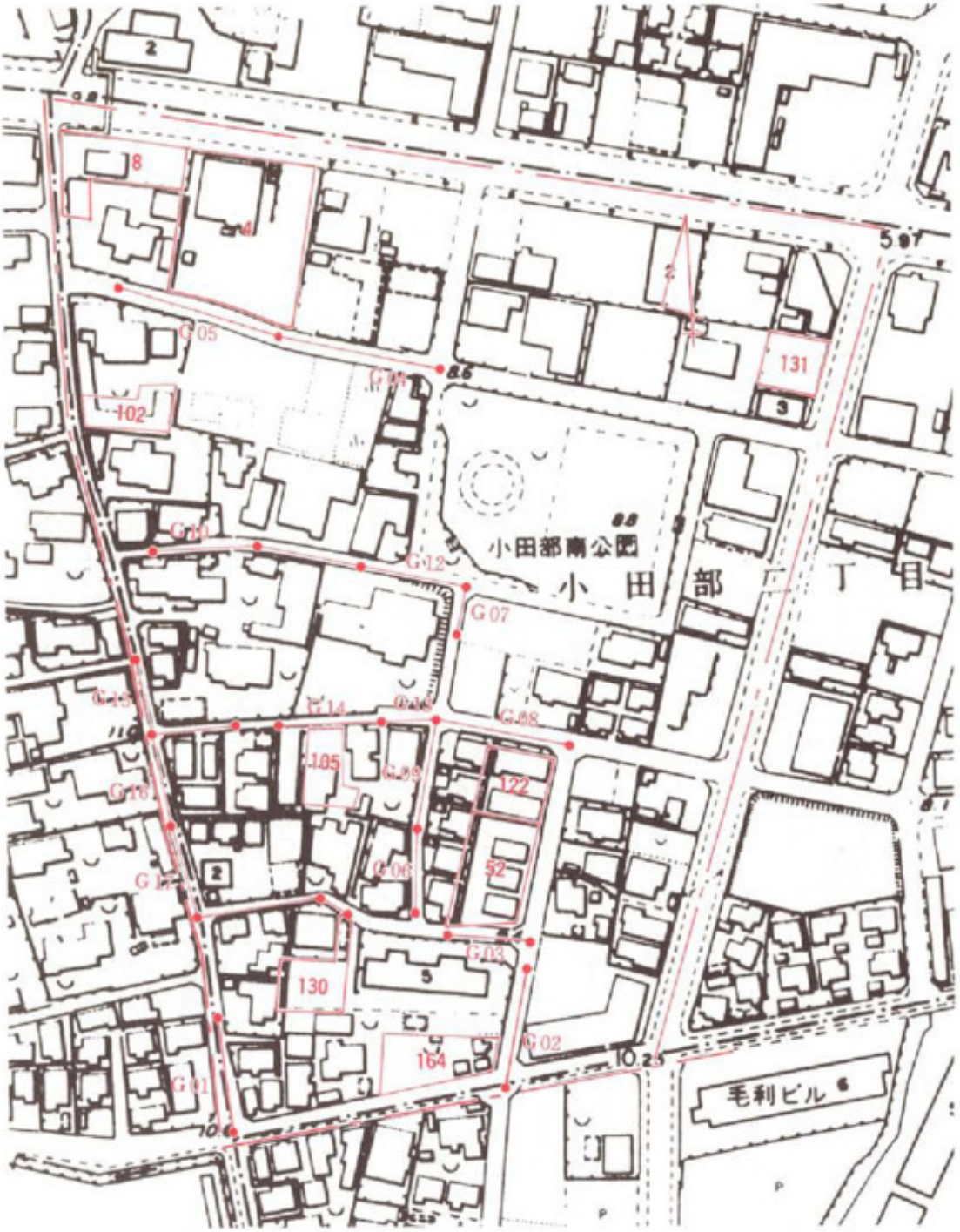


Fig. 5　G区調査地点配置図（1/2000）

概要　G区では現在まで8件の調査が行われている。当区は小田部地区の台地中央に位置し，台地中央部は特に削平をうけており，舗装下20～30cm程で遺構面に達する。当区では123次・139次調査が行われた。

検出遺構

G01（Fig.33）　南北にのびる調査区で，区内南側を中心に溝，ピットを検出した。また遺構検出面よりやや浮いたレベルで須恵器の蓋坏・紡錘車等が出土した。

G03（Fig.33）　52次調査地点の南側に位置する。住居跡・ピットを検出した。

SC01（Fig.6）　東側を掘りすぎたが，断面観察より，一辺2.5～3mの方形の竪穴住居跡と想定される。深さは15～20cmを測る。主柱穴と確認できるものは検出していない。また屋内施設の確認もない。出土遺物は床面よりやや浮いた状態で土師器甕片が出土した。また覆土より須恵器蓋坏の破片が出土した。

G04・05（Fig.33）　4次調査の南側に位置する。遺構は散漫であるが，住居跡・土坑・ピットが検出された。SC02はコーナー部分が検出されたため住居跡としたが不確実である。深さ5cmを測る。出土遺物はない。その他土坑2基も性格不明である。

G06（Fig.33）　G09からつながる南北の調査区である。住居跡・溝・ピットを検出する。

SC04（Fig.6）　調査区内では南側コーナー及び北壁を検出する。復原すると一辺5m程の方形住居跡になると思われる。深さ10cmを測る。調査区北端のピットを主柱穴と想定すると，柱間2.5mの4本柱から成る住居跡が想定できる。これに付随する屋内施設は確認されていない。出土遺物はほとんどなく細片のみであるが，覆土より須恵器片が出土しており，古墳時代後期に属するものと考えておきたい。

SD09　調査区北側に検出された。幅50cm深さ15cm程を測る。遺物は出土していない。

G08（Fig.33）　122次調査の北側に位置する。溝・土坑が検出された。調査区東側には北から入り込む谷があり段落ちが確認できる。調査区西側の標高は10.3mで東側では8.0mであり比高差2.3mを測る。SD12は122次調査より続くもので新しい時期のものである。その他溝・土坑からも若干の遺物は出土するが，時期は不明である。

G09（Fig.33）　G06の北側の調査区である。当区では105次調査で検出された，総柱建物と関連をうかがわせるピットが検出された。掘り方は一辺70cm，深さ50cm，柱痕径40cm程を測る。当区では一間分しか検出されていないが，105次調査の1号棚を延長すれば，その敷地内に位置し，主軸方位もおおよそ105次調査1号掘立柱建物と一致することより，これらに関連する建物の柱穴と考えられる。出土遺物は細片のみであるが，関連が明らかになれば古墳時代後期～古代の建物と考えられるであろう。

G10（Fig.33，Pl.1）　G区中央の台地部を東西に横切る調査区である。東にG10・G11

区とつながる。調査地点は現況ではほぼ水平であるが，遺構面は西が標高10.9m東が10.6mと東の谷に向かってわずかに傾斜している。検出遺構はピットのみであるが，割合密に検出されている。出土遺物はほとんどない。

G11・G12（Fig.34）　G10区より東側の谷部へのびる調査区である。G11区は西側人孔付近のみの調査である。標高10.55～10.6mを測る。現地表面（舗装面）からの比高差は70cm程である。ピットが数個検出されている。いずれも径20～30cm，深さ10～15cm程である。出土遺物はない。G12区は調査区中央より西側の調査である。標高は中央部で10.2m東側では9.8mを測る。地表面との比高差は30cm程である。ピットのみが検出されている。いずれも径20cmを測る円形のものである。遺物は出土していない。

G14（Fig.34）　105次調査北側に接する調査区である。遺構面は地表下60cmで検出した。標高は11m程で調査区内はほぼ平坦地である。溝2条・ピット・柵状遺構の一部を検出した。SD14は近世溝でその他は出土遺物はなく時期不明がほとんどである。

SA16（Fig.34）　近世溝SD14に切られて並ぶ3個の柱穴を確認した。いずれも径50cm，深さは20～30cmを測る。柱痕は確認していないが柱穴間の距離は1.4mを測る。遺物はいずれからも出土していない。105次調査1号柵との関連を考えたが，1号柵は柱間距離90cmであり，当区検出地点よりやや西側に延長する様である。また主軸が7°程ふれており，方位も若干異にする。これらのことより1号柵との直接の関連はないものと考えられる。現段階では掘立柱建物を構成する柱穴か異なる柵の一部と考えておきたい。

G15・16・17　H区との境，総延長80mの弱の調査区である。調査区西側では，103・117次調査が行われており，近世の集落遺構が検出されている。当調査区ではG16区のみで遺構が検出された。遺構面は標高9.7mを測り地表面との比高差30cm程である。検出遺構はピットのみである。遺構に伴う遺物はないが，旧水道管埋設に伴う撹乱部分よりわずかに時期不明の土器片が出土している。

出土遺物

G01（Fig.7　1～5，Pl.13）　遺構に伴うものではないが，検出面より須恵器蓋坏・紡錘車が出土した。1・2は須恵器蓋坏である。1は器高の低いもので端部を丸くおさめる。焼成が不良で生焼けである。2は1に比べ口径比の器高が高くなる。天井部から体部の3/4にヘラ削りが施される。その他は回転ナデである。3～4は坏身である。3は立ちあがりが欠失している。底部外面1/3にヘラ削りを施す。回転方向は右回りである。胎土は良好で色調は暗灰色を呈す。4は器高4.5cmを測る。立ちあがりはやや内傾しながら伸び，端部は丸くおさめる。外面1/2～2/3にヘラ削りを施す。体部上半～内面は回転ナデである。胎土には径1mm弱の石英細砂を混じえる。焼成は良好で灰白色を呈す。5は滑石製の紡錘車である。上径2.5cm，底径

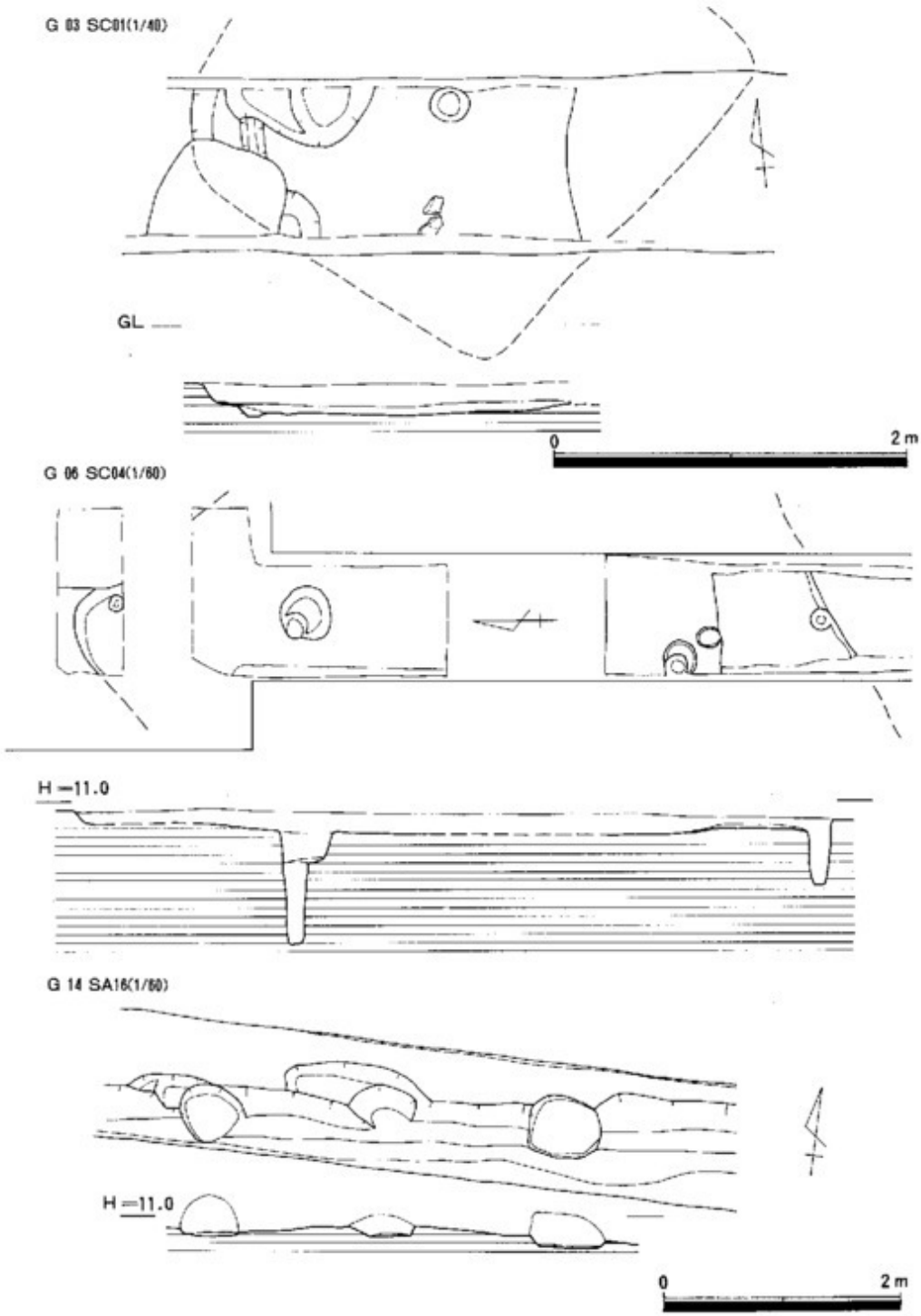


Fig. 6 SC01・SC04・SA16 (1/40・1/60)

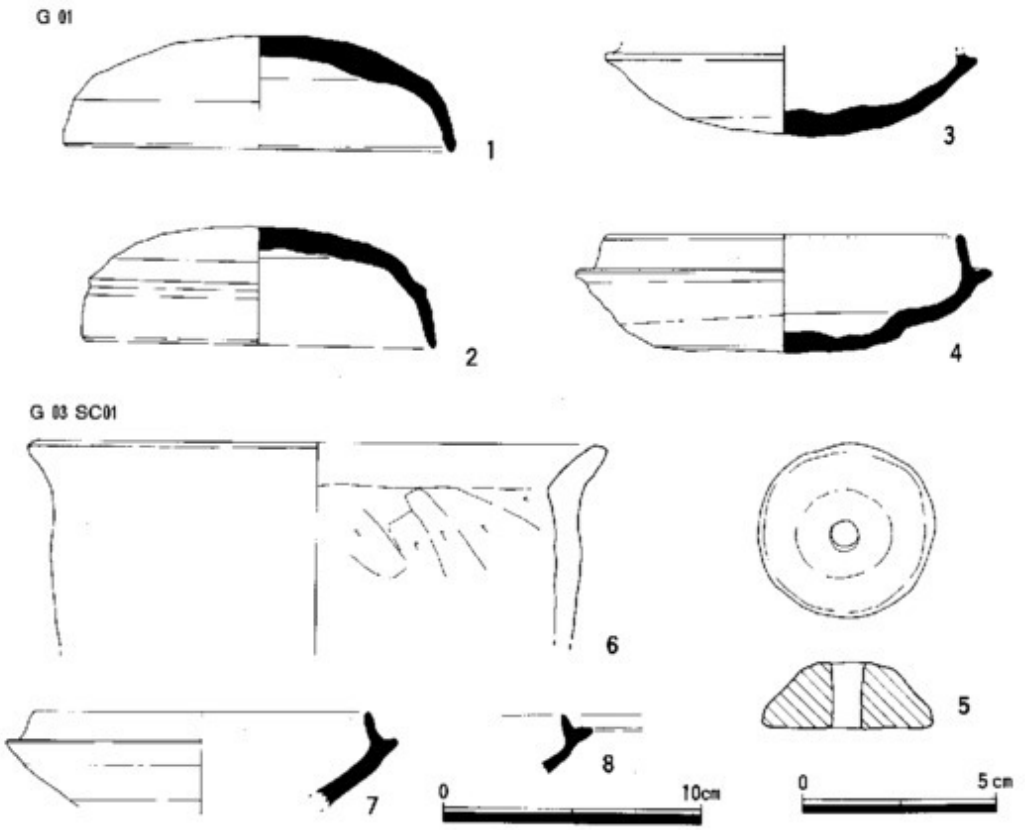


Fig. 7　G区出土遺物（1/2・1/3）

4.3cm，厚さ1.7cm，孔径7㎜を測る。

G03SC01（Fig. 7　6～8）　6は土師器甕の口縁部破片である。1/8程残存する。復原口径は11cmを測る。口縁内外面は横ナデ，体部内面はヘラ状工具で削りあげる。胎土には径1～3㎜の石英砂粒を多く含む。焼成は良好であるが，器面の磨耗が著しい。外面淡褐色，内面黒褐色を呈す。7～8は須恵器坏身破片である。7は復原口径12.8cmを測る。立ちあがりは内傾し，端部は丸くおさめる。外面4/5に回転ヘラ削りが施される。口縁部外面及び内面は回転ナデである。径1～2㎜の石英粗砂を多く含む。焼成は良好で，暗紫色を呈す。8は口縁部細片である。立ちあがりは短く内傾し端部を鈍くおさめる。残存部は回転ナデが行われている。石英粗砂を多く含む。焼成は良好で暗灰色を呈する。

3) H区の調査

Fig. 8　H区調査地点配置図（1/2500）

概要　H区は小田部地区台地西側に設定された区である。現在まで８次にわたって調査が行われている。当区においては123次及び139次調査が行われた。

検出遺構

H01（Fig.34）　遺構面は標高8.1m，地表面からの比高差30～40cmを測る。道路に伴う撹

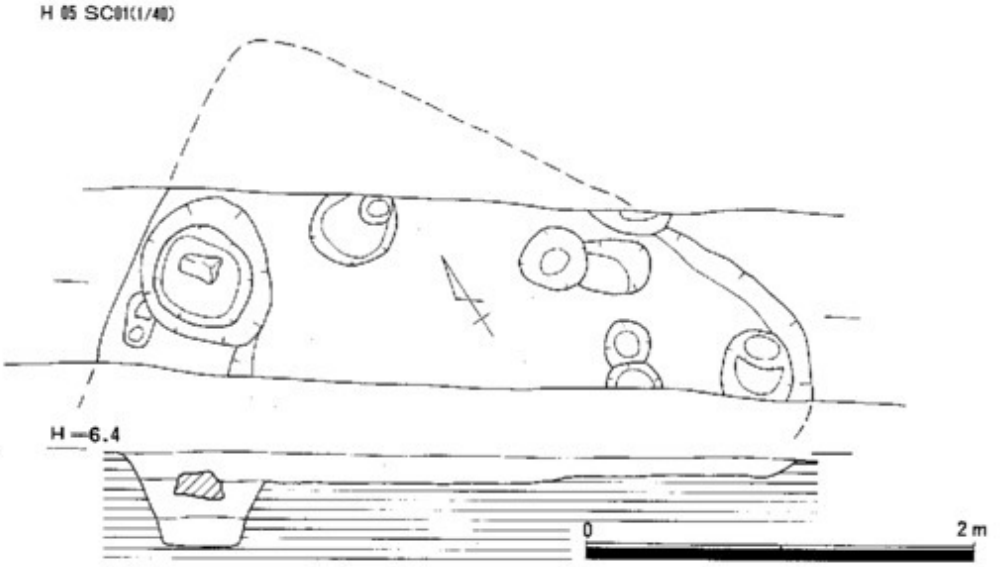


Fig. 9　SC01 (1/40)

乱を除去すると南側では鳥栖ローム，北側では八女粘土層が確認される。上面での削平が著しいと思われる。検出遺構はピットで出土遺物はない。

H02, 03 (Fig.34)　東西にのびる調査区で延長43mである。遺構面はH02区西側で9.6m，H03区中央で10.4mで全体に西に傾斜している。20cm程の道路面，10cmの旧表土の下の赤褐色ローム（鳥栖ローム）で遺構を検出した。検出遺構はピットのみで出土遺物はない。H02区西側より染付の細片が出土している。

H04 (Fig.34) 遺構面の標高5.3m，地表面との比高差30cmを測る。土壙・井戸・ピットを検出した。SE10は復原径1.5m，深さ0.75mを測る。断面形状は逆台形を呈す。遺物はほとんど出土していない。SD05は台地縁辺の落ちと思われる。

H05 (Fig.34, Pl. 1)　F04区の東側に続く調査区である。標高5.3mを測り調査区内はほぼ平坦である。住居跡・溝・ピットが検出されている。

SC01 (Fig. 9, Pl. 2)　調査区内では北東コーナー及び北西壁を検出した。復原径3.5mの方形の竪穴住居跡が想定できる。深さは10～13cmを測る。主柱穴として確認できる柱はなく，屋内施設も調査区内では確認できなかった。遺物は細片が若干出土したのみである。須恵器も含まれており，その形態から小田編年のⅢB期に属するものと思われる。住居跡の形態とも矛盾しないため該期のものと考えておきたい。

H06 (Fig.34)　H05区の東側に位置する。遺構面は標高7.3mを測り地表との比高差20cmである。溝，ピットを検出した。出土遺物はほとんどない。

4) I 区の調査

Fig. 10　I 区調査地点配置図（1/2000）

概要　Ⅰ区は有田台地中央東側に設定された調査区である。Ｔ区と共に遺構の密度も濃く下水道調査の多く行われた地点である。当区では118次・123次・139次と３年間に渡って調査が行われており様相の把握が割合進んでいる。

検出遺構

Ⅰ01（Fig.34）　東西にのびる長さ20ｍの短い調査区である。調査区は標高11.7ｍを測りほぼ平坦である。現地表面との比高差は35cm程である。土坑，ピットが検出された。

SK05（Fig.11）　調査区内で最大幅50cm深さ55cmを測る。平面は半卵形を呈し断面底部は平坦である。また北側がオーバーハングしている。

Ⅰ02（Fig.34）　Ⅰ01の東に続く調査区である。遺構面標高11.7～11.8ｍを測る。井戸・ピット等を検出した。

SE47（Fig.11）　調査区中央に検出された素掘りの井戸である。底は完掘していないが径2.5ｍ，深さⅠｍ以上を測る。西壁はやや抉りながら直に立ちあがるが，東壁はテラス状部分をつくり二段落ちしている。覆土は上層（④～⑦），下層（⑧～⑨）に分けられる。上層は黒褐色～褐色粘質土に灰色粘土を含むもので，下層は黒褐色粘土と桃色粘土のブロックにより構成されている。人為的な埋め立てが看取される。遺物はほとんどなく明確な時期比定は困難である。

Ⅰ04（Fig.35）　83次・148次調査地点に挟まれた東西にのびる調査区である。地表下40cm程，暗黄褐色ローム面でピット・溝を検出した。SD24は調査区中央で検出した。83次調査の道路状遺構の延長と考えられる。本調査区内では完掘していないが，断面観察より83次調査と同様の所見を得ることができる。遺物はほとんど出土していない。SD25は幅80cm・深さ15cmを測る浅い溝で148次地区の小溝につながる。

Ⅰ05（Fig.35）　東西に長くのびる調査区で，アスファルト，撹乱を除去した後地表下50～60cmで遺構を検出した。溝・井戸等が検出されている。調査区内は全体に平坦であり標高11.6～11.8ｍを測る。Ⅰ05区は南側部分の調査が進んでおり調査前より関連遺構の検出が予想された。19次調査検出の中世溝は検出されなかったが，96次調査・28次調査検出の溝延長部分については確認している。

SD28・29（Fig.11）　28次調査SD02の延長であり，前述Ⅰ04区SD24，83次調査検出の道路遺構につながるものであろう。中央の敷石面は幅２ｍを測り道路部分にあたるものであろう。土層観察から，掘り直しにより溝断面が逆台形→U字形に変容していく様子がうかがえ，既調査区の所見とも一致する。出土遺物は少ないが，SD28より瓦，糸切りの土師皿・坏・青磁・瓦質の摺鉢が出土している。またSD29からは瓦器片が出土している。いずれも現在までの調査結果と一致するものである。

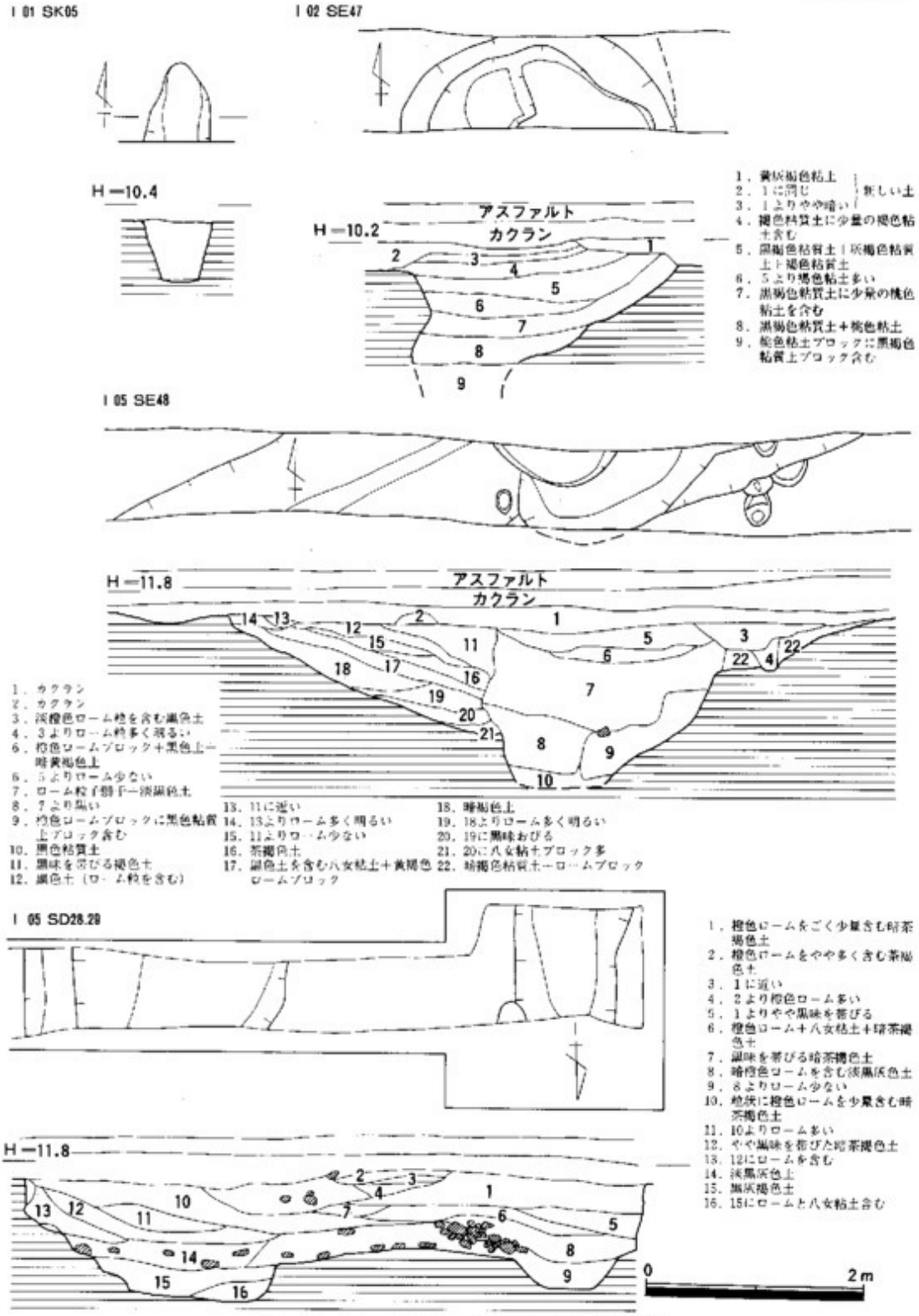


Fig. 11 SK05・SE47・SD28.29・SE48（1/60）

SE48（Fig.11）　調査区東側で検出された素掘りの井戸である。直径2.0m，深さ16mを測る。東側は緩やかに壁をつくるが西壁は直立している。遺物はほとんど出土していない。SE48はSD27を切って掘削されている。SD27は28次調査の弥生時代前期後半頃の溝SD01につながるものと思われ，覆土より弥生前期末頃に比定される壺の破片が出土している。SE48はこれ以降のものであろう。

I 06（Fig.35）　有田東公園西側に南北にのびる調査区である。北半部のみを調査した遺構検出面の標高は北側で10.4m，南側で10.6mを測り若干北に向かって傾斜している。溝・ピットが検出された。

SD30（Fig.12）　調査区中央で検出された。幅4.9m，深さ1.3mを測り断面V字形を呈す。断面観察によれば掘り直しの痕跡が見られる。弥生土器片が出土しているが，周囲に関連の溝も検出されていない。

I 08（Fig.35）　I 07より台地縁辺部に向かって伸びる。遺構は現地表下25cm程で確認した。溝1条を検出したのみである。

SD31（Fig.12）　調査区西側で確認された。幅80cm深さ60cmを測る。断面はU字形を呈す。覆土は上層（①～③層），下層（④～⑤層）に分けることができる。①～③層は暗赤褐色土にロームブロックを含んでいる。一度埋没した溝を掘削し直したことが考えられる。出土遺物は須恵器・土師器の小片のみである。

I 11（Fig.35）　有田東公園東側の調査区である。遺構面標高は北側で10.2m，南側で9.9mを測り，南側に傾斜している。住居跡・土坑・ピットが検出された。

SC01（Fig.12）　北東隅と南壁が確認されている。調査区内で幅3.8m，深さ30cmを測る。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が基本となっている。住居に伴う屋内施設は確認されていない。須恵器・土師器高坏が出土。

I 12（Fig.35）　有田東公園南側に位置する。遺構面の標高は10.2mを測り調査区内はほぼ平坦である。溝が検出されているが，現在までのところこれに接続すると思われる溝の確認はされていない。

SD32·33（Fig.13）　調査区中央に位置する。SD 32は幅4.0m深さ1.3mを測り緩く傾斜するテラスをもつ二段堀りになっている。SD33は断面浅皿状を呈する溝である。SD32より須恵器甕の胴部破片が出土しているが，その他まとまった遺物の出土はみない。

SD34（Fig.12）　調査区西側で検出された。幅5.4m深さ1.4mを測る。全体に黒色土～褐色土の覆土によって埋没している。下層はロームブロックを多く含む。遺物の出土量は少ないが，弥生時代中期に属する土器片が出土している。第7次から第28次調査区につながる弥生時代前期の環溝の可能性がある。

I 13（Fig.36）　東側縁辺部に向かって東西に伸びる調査区である。遺構面は八女粘土

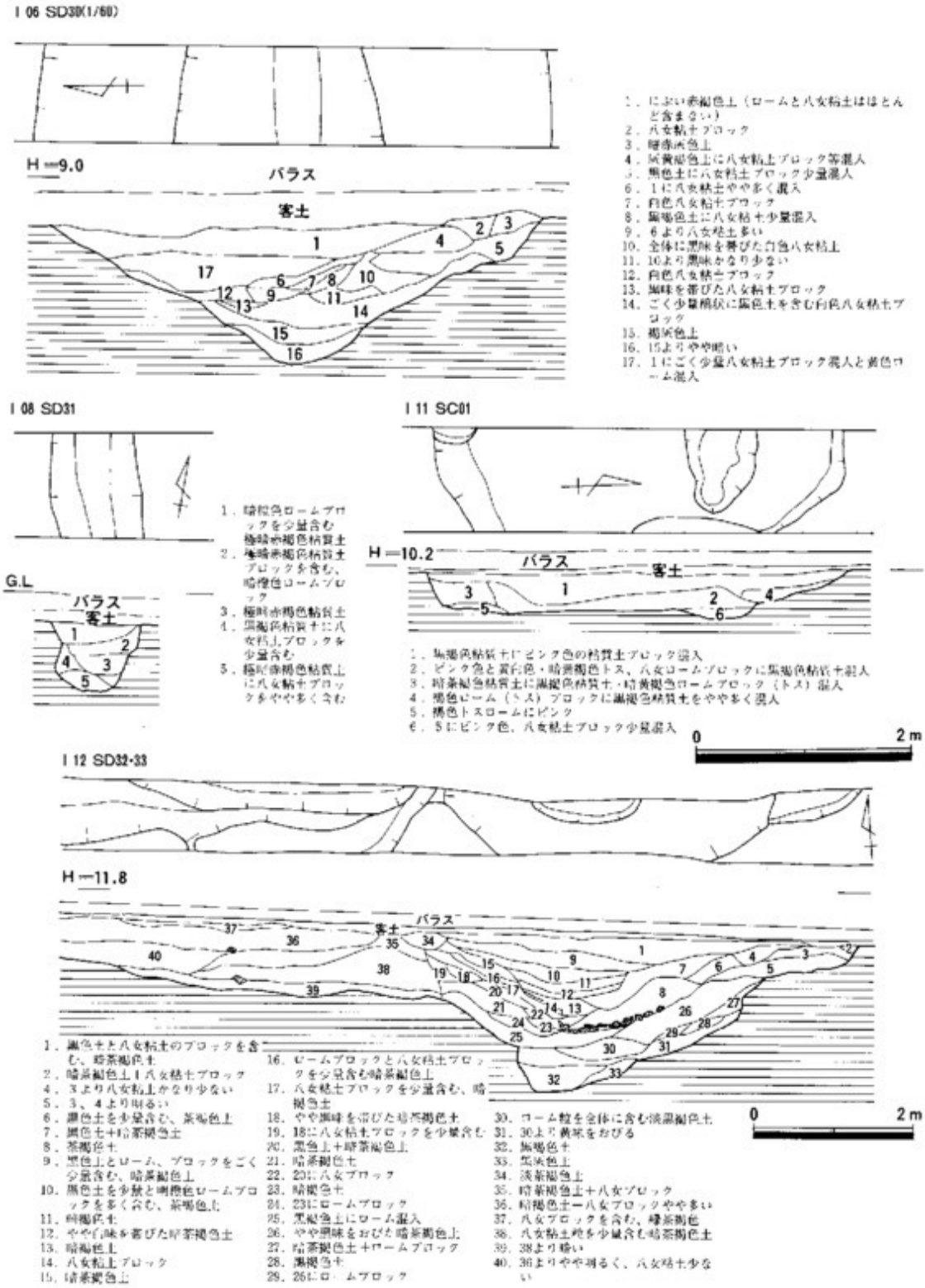


Fig. 12 SD30・SD31・SC01・SD32.33 (1/60, 1/80)

層で標高9.8～9.0mで東に傾斜している。検出遺構は溝・土坑・ピットである。SD35は幅1m深さ12cmを測る断面浅皿状の溝である。覆土は白色粘土を多く含む黒色粘土質である。SK07も覆土は同様である。その他ピットの覆土も黒色粘質土である。

I 24（Fig.36）　81次調査で対象外となった道路部分の調査区である。I 24区では調査区中央に既設管が埋設されていた。遺構面は現地表下1.1m程で確認され，ピットが検出された。全体に北の谷部に向かって傾斜している。出土遺物は細片のみである。

I 25（Fig.36）　I 24区の南側に延長する。調査区の状況はI 24区と変わらない。地表下より1m程で遺構を検出する。遺構面は八女粘土層である。遺構はピットを検出したのみであるが，調査区全体に密に分布している。出土遺物はほとんどない。

I 26（Fig.36）　81次調査I区南壁に添う調査区である。地表下1mで遺構面を確認する。層序は60cm程のアスファルト・埋土の下が20cm程の旧水田耕作土でその下に鉄分の沈着した青灰色粘土が堆積するものである。検出面は八女粘土層であり，標高は北側で8.6mを測り調査区内はほぼ平坦である。遺構はピット・土坑を確認した。隣接する81次調査地点の土坑と同様，遺物は少ない。SK09は中央で検出しており，幅2.4m，深さ0.8mを測る箱形の土坑である。埋土は大きく上下2層に分かれ，上層はロームブロックを含む褐色粘質土，下層は青黒色粘土により構成される。SK12は検出面で幅2.0m深さ20cm程の浅皿状土坑である。いずれも遺物はほとんどない。

SK14（Fig.13）　調査区北端で検出された。調査区内では幅2.0m深さ0.5mの土坑である。②層より多くの鉄滓が出土しており，81次調査検出の製鉄遺構からのものと思われるが，関連については確認できない。また同じく②層より青磁碗底部片が出土している。

I 29（Fig.36）　I 26の南側につながる。調査区南側は盛土のため地表下1m程で遺構面に達するが，北側は30～40cm程である。地山は八女粘土層で，北側標高6.6m，南側7.8mを測る。溝・ピットが検出されており，覆土は八女粘土ブロックの混ざる暗褐色粘土である。

I 31（Fig.36）　台地の東縁に南北にのびる調査区である。遺構面は黄色ロームで表土下60～70cmで検出される。層序は50cm程の表土の下に15cm程の黒褐色粘質土が堆積している。標高は南側で7.6mを測り中央部までは平坦である。それより北側にかけ標高5.4mになり北側の台地縁辺に向かって急に落ち込んでいく。遺構は調査区南半を中心に溝及びピットが検出された。SD38（Fig.13）は，北端で検出された。幅80cm深さ20cm程の断面漏斗状の溝である。覆土はロームブロックの混入した淡褐色シルトである。甕・器台等の遺物が出土している。

SD40（Fig.13）　調査区中央南寄りで検出された。幅2.5m深さ0.6m，断面皿状を呈す。⑤，⑦，⑨層は黒色粘質土にロームブロックが混入したもので，⑥，⑧層は淡黄色ロームブロックが堆積したものである。全体に土器を多く含んでおり，甕・高坏・坏などが出土している。布留期の溝で当地区では初めての検出である。

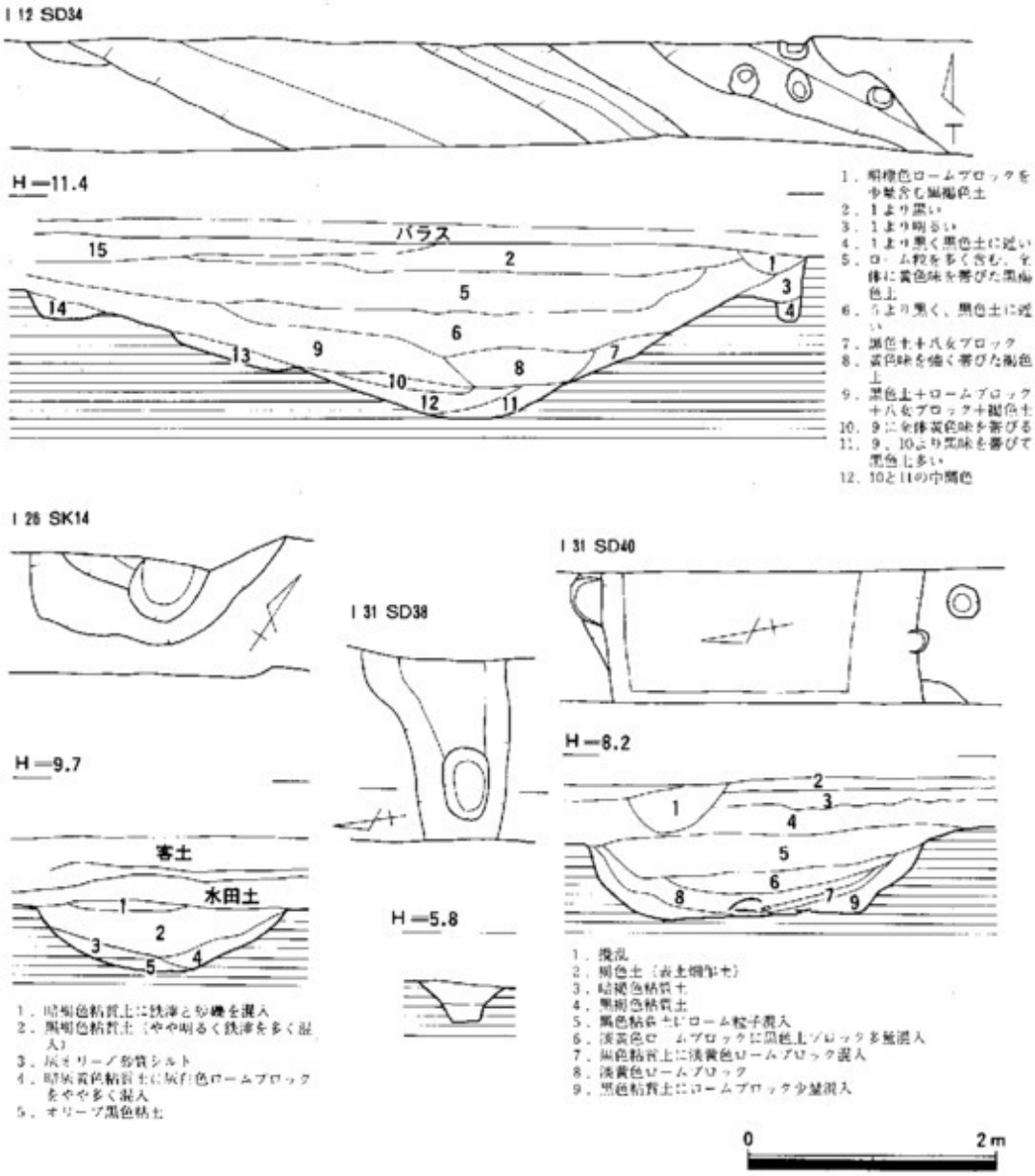


Fig. 13　SD34・SK14・SK38・SD40（1/60）

I 32（Fig.37）　台地縁辺に向かってのびる調査区である。遺構面は地表下20～30cmで検出される。標高は西側で7.6m，東側で6.2mを測る。東端から５m程度までは包含層が残っており東端部では厚さ40cmを測る。調査区東側に偏してピットが検出された。遺物は細片が出土しているのみである。

I 33（Fig.37）　I 31に南接する調査区である。69次調査地点の東に位置する。69次調査では，上・下２面の調査が行われ，古墳時代～中世の遺構を検出したが，当区では下層でのみ遺構を検出した。遺構は北半で表土下70cm，南半では30cm程で検出した。遺構面は灰白色ロームである。遺構は調査区北半に住居跡・溝・土坑・ピットが検出された。SD51は幅2.6m深さ25cmを測る浅皿状の土坑である。覆土は黒色粘質土である。その他の遺構も概ね浅く削平が著しいことをうかがわせる。

SC02（Fig.14）　断面観察より幅3.8m深さ0.5mを測る。床面はやや波うつ。断面より住居北壁にベット状の幅60cm程の高まりが看取される。また南壁に添って浅い掘り込みがみられ，中から甕が３個体出土している。覆土は上層が暗褐色土，下層が黒褐色土である。主柱穴等は確認されなかった。南側に出口を持ちベットがC又はコ字状に全周する住居址と考えられる。

SK17（Fig.14）　幅2.4m深さ10～20cmの断面浅皿状の土坑である。覆土は明褐色ロームブロックを含む黒褐色粘質土である。遺物は破片が若干出土している。

I 34（Fig.37）　８次・69次調査地点に南接する。地表下20～40cmで遺構面を確認する標高７m前後を測る。遺構は西端部を除いてほぼ全面に認められる。検出遺構は住居跡・土坑・ピットである。

SC03（Fig.14）　調査区中央で検出された。３面の壁が検出された。復原すると一辺３m程度の方形の住居跡になると思われる。覆土より遺物が若干出土した。

SK18（Fig.14）　幅1.9m深さ60cm程を測る。西側に緩く傾斜するテラスをもち，中央東寄りを一段掘りくぼめる二段掘りとなる。覆土は上層が黒褐色粘質土に褐色ロームブロックを含み，下層は橙色ロームブロックである。須恵器・土師器が出土する。

I 35（Fig.37）　J区との境に位置する。標高10.6m程で遺構を検出する。調査区内は平坦である。検出遺構は溝及び～ピットである。

SD41（Fig.14，Pl.２）　幅2.5m深さ40cmを測る，断面皿状の浅い溝である。北側に幅50cmの側溝をもつ。底面には拳大の礫が散慢に敷いてある。方向としては108次調査の１号溝又は１・２号土坑と合うものである。１号溝は畑の地割に伴うものとされており，深さも15cmと浅く異なるものであろうか。１・２号土坑は，40次調査の２号溝の続きと考えられ，中世末に位置づけられている。１・２号土坑とは深さが異なるものの礫の集積がみられること，出土遺物が類似していることから，一応接続するものと考えたい。遺物として須恵器・土師器・陶磁器・瓦類の細片が出土している。

I 36（Fig.37）　I 35に南接する。遺構面は標高10.7mを測り溝が２条検出されている。遺構は烏栖ロームで検出される。

SD43（Fig.14，Pl.３）　幅３m深さ1.2mを測る。断面は皿状を呈し南底部に浅い掘り込みがみられる。53次２号溝，71次２号溝を接続する溝である。近世初頭（17世紀）に埋没する

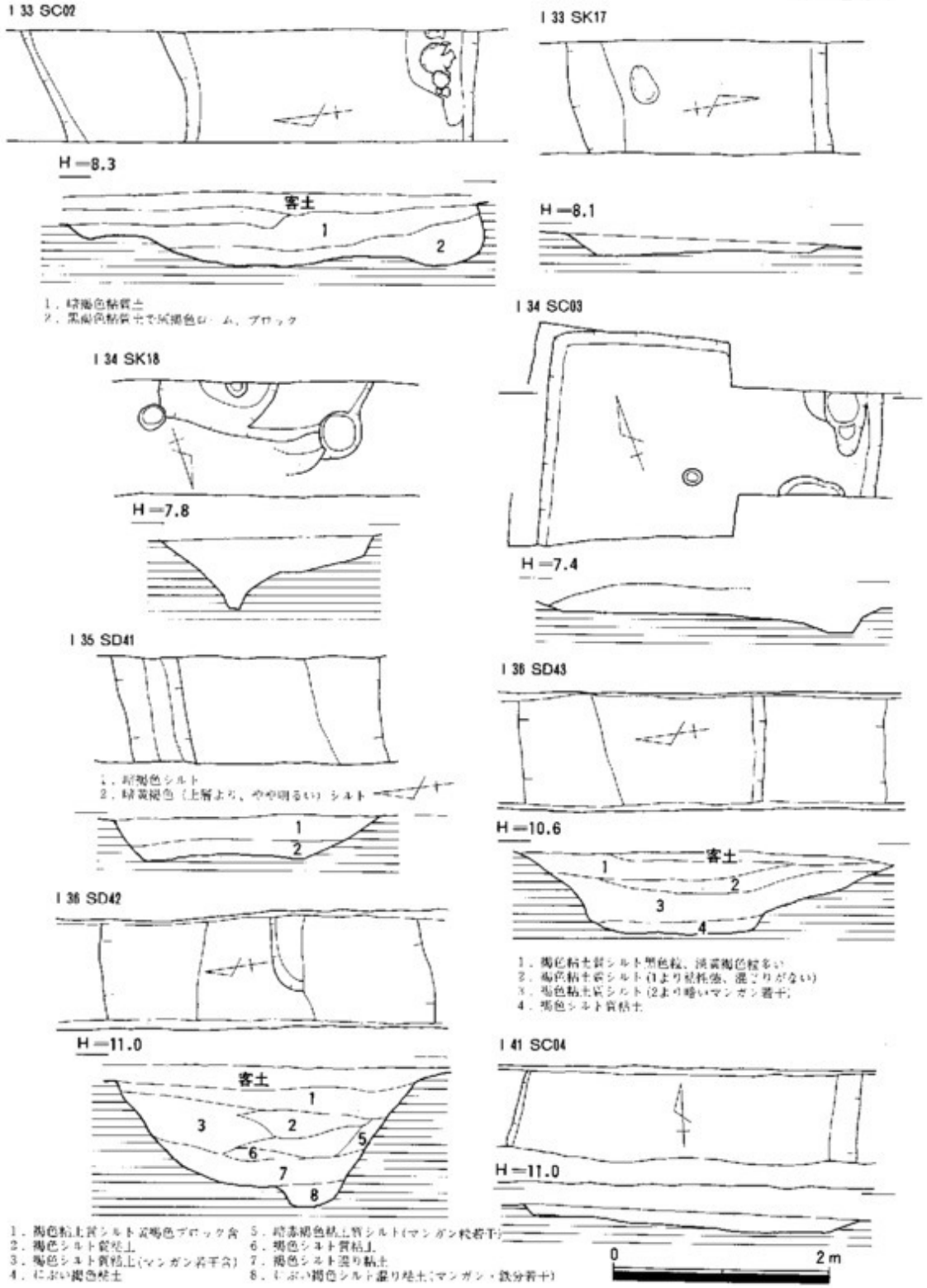


Fig. 14 SC02・SK17・SK18・SC03・SD41・SD43・SD42・SC04 (1/60)

中世後半期の溝（濠）である。この溝は更に47次1号溝，70次1号溝と接続すると考えられており，95m×75mの濠と考えられている。

I 41（Fig.37）　51次調査地点南側に位置する。遺構面標高9.9～10.3mを測り東側の谷部に向かって傾斜する。住居跡・土坑・ピットが検出された。

SC04（Fig.14）　調査区内で幅3.2m深さ10cm弱を測る。復原すると一辺3～3.2mの方形の住居跡とも考えられる。屋内施設等は検出されない。遺物は弥生時代後期に属する小片が出土する。

出土遺物

I 05SD28（Fig.15　10～12，Pl.13）　10・11は糸切の土師器坏である。10は口径13cm，器高2.1cmを測る。11は口径4.8cm，底径3.4cm，器高1.9cmを測る。12は瓦質の摺鉢である。口縁端部は平坦面をつくる。その他Ⅴ類の白磁も出土する。

I 05SD29（Fig.15　13，Pl.13）　瓦質の湯釜の口縁部。胴部外面は細かい縦ハケを施す。

I 11SD01（Fig.15　14～15，Pl.13）　14は須恵器坏身である。外反しながら直立する長いかえりをもつ。天井部～体部の2/3に回転ヘラケズリが施される。15は高坏脚部である。裾部が屈曲し外方に広がる。

I 12SD34（Fig.15　16，Pl.13）　壺の口縁部細片である。口頸の広がりは少ないものである。

I 26SK34（Fig.15　17，Pl.13）　釉は暗緑色を呈し，外面は貫入がみられる。畳付～底部外面は露胎である。胎土は密である。

I 31SD38（Fig.15　18～19，Pl.13）　18は甕形土器上半部。体部は肩がはらず，内湾する口縁部につづく。19は鼓形器台である。上径19.2cm，底径15.8cm，器高15.4cmを測る。

I 31SD40（Fig.15・16　20～26，Pl.14）　SD38からは古式土師器の良好な資料が出土した。20～22は甕形土器である。20はなで肩の体部から直線的にのびる口縁部につながる。肩部に波状文をもつ。21は頸部の屈曲が鈍く，内面ハケメ調整を施す。胴部外面肩部に横位のハケメがみられない。22は外面縦ハケ，内面ヘラ削りを行う。調整は在地的な様相を示す。23は短頸壺である。外反しながら開く口縁部をもつ。外面ハケメ，内面は横位の削りを施す。24・25は高坏である。坏部内外面にミガキによる暗文を施す。24は脚部が短脚化している。25は脚部から裾にかけてハケメを施し4ケ所の穿孔を有す。26は鼓形器台。

I 33SC02（Fig.16　27～28）　27は甕形土器。肩のはらない胴部から直線的に外方にのびる口縁部をもつ。28は丸底壺。内湾気味の口縁部をもつ。頸部には明瞭な稜線をもつ。

I 39SP96（Fig.16　31～34）　SD96より弥生土器片が出土した。31・32は壺形土器，33・34は壺形土器片である。

I 41SC04（Fig.16　29～30）　29は弥生土器の胴部破片である。壺形土器のものであろうか。30は細片であるが器台の脚部と思われる。

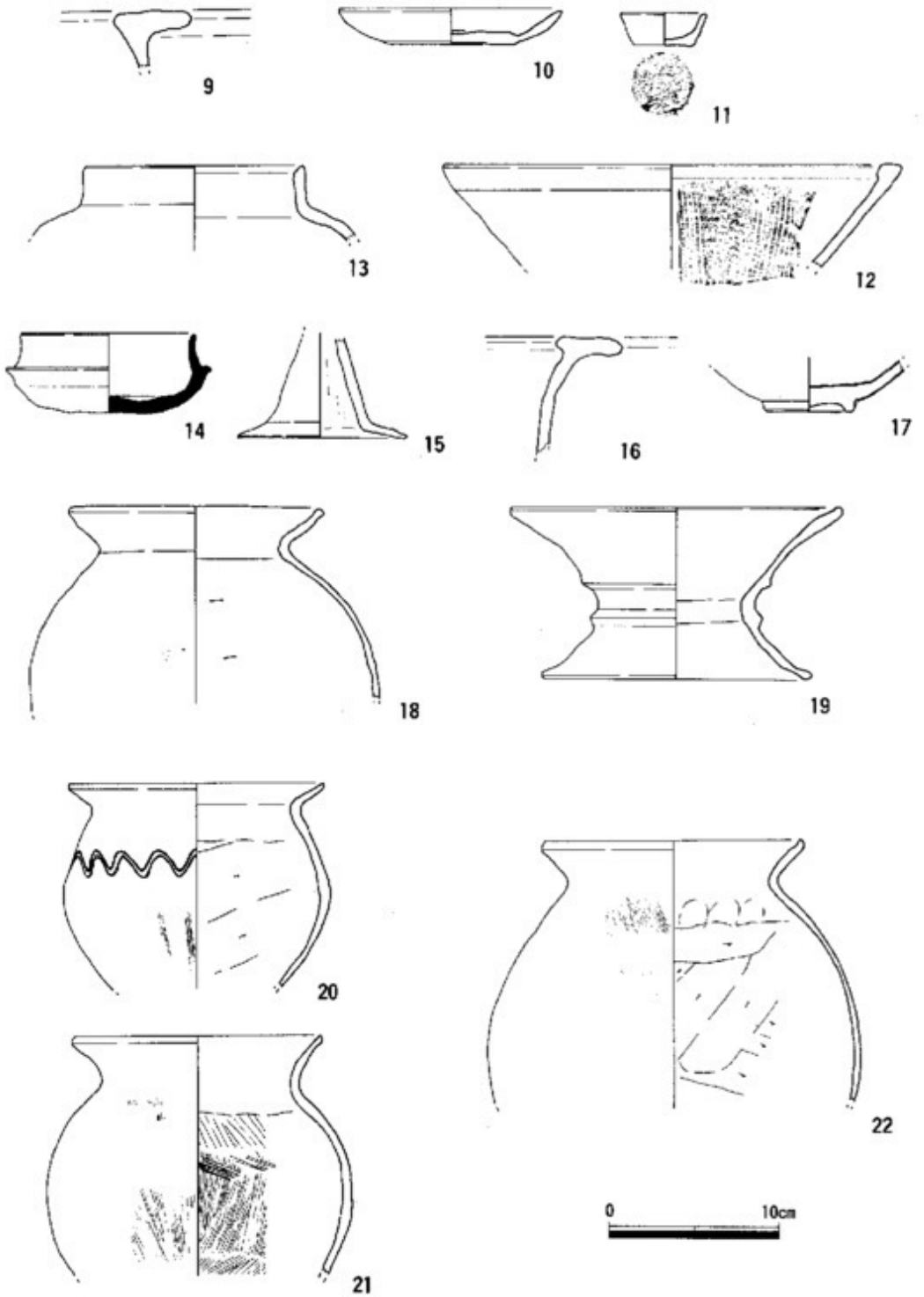


Fig. 15　I区出土遺物(1) (1/4)

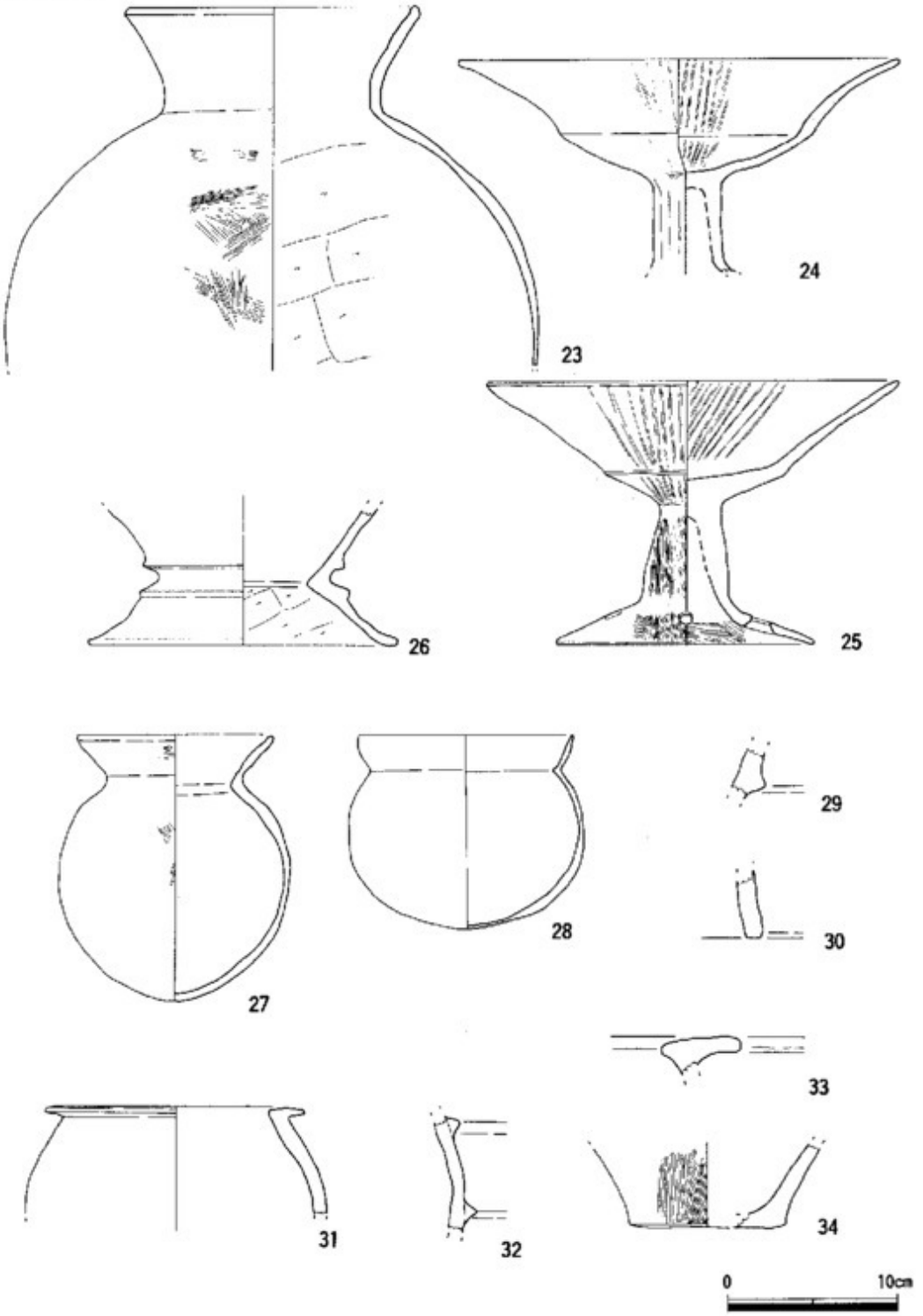


Fig. 16 I区出土遺物(2) (1/4)

5) J区の調査

Fig. 17　J区調査地点配置図（1/2000）

概要　有田台地中央に設定されている。東南隅を最高所とし標高約13mを測る。北側，現西福岡中学校校庭部分に谷が入り込む。現在まで41地点において調査が行われている。調査区東半を中心に成果を収めている区である。下水道に関る調査は118次，123次，139次の3ケ年間にわたって行われた。

検出遺構

J02（Fig.38）　有田西公園の南に位置する。遺構面は八女粘土層であり，その上層に20～30cmの暗褐色土が堆積する。遺構面標高は西側台地縁辺に向かって傾斜している。溝3条及びピットを検出する。SD42は幅30cm深さ10cmを測る浅い溝である。覆土は炭化物の混ざる暗茶褐色粘質土で溝の壁の一部が焼けている。瓦器塊が出土する。SD43はSD42に2.5m間隔をあけて並走する溝である。形状は類似するが覆土はローム混じりの褐色粘質土である。焼土は認められなかった。ピットは密に検出された。覆土は黒褐色～褐色土を基本とする。

J03（Fig.38）　J01の南側に位置する。遺構面は八女粘土層で上部に40～60cmの黒褐色粘質土が堆積する。遺構面標高は北側で9.0m南側で8.3mを測り南側に傾斜する。検出遺構は溝・土坑・ピットである。遺構の覆土は黒褐色粘質土を主体とする。

J04（Fig.38）　有田西公園北側に位置する。遺構面は地表下30～40cmで検出される。東西の比高差は約2mで台地縁辺に向かって急激に落ち込む。包含層は検出されず遺構面は西側で八女粘土，東側で島栖ロームへと変化する。当区では全体に密に近世墓が検出された。総数29基である。出土遺物の大半は近世陶器である。またいくつかの甕には人骨が残っていた。SK14は長さ1.4m程幅0.6mを測る長方形の土坑である。西側に近世甕を埋置しており二段掘りを呈す。錆化した銅銭が10枚程出土する。SK17（Fig.18）は長さ1.2m幅0.8m深さ20cmを測る。近世大甕の口縁部片が出土する。SK19は検出面で幅1.1m深さ0.4mを測る土坑である。覆土は暗黒褐色土にロームブロックを含むものである。錆化した銅銭が一枚出土する。SK21（Fig.18）は検出面で幅50cmを測る陶器大甕を埋置したものと思われ口縁部の1/2が出土する。SK23（Fig.18）はSK19・31に切られ全体の形状は不明であるが陶器壺口縁部片が出土している。SK28（Fig.18）は一部のみ検出し完掘していないが，検出面で幅80cm深さ1.0mを測る陶器大甕を検出する。その他当区では陶器大甕を埋置した遺構が多く，近世墓群の一部であろうと思われる。この地区一帯は昭和40年代の初めまで，有田地区の共同墓地であり，区画整理時に改葬され，北側の納骨堂に人骨は再埋葬された。今回出土した甕と人骨はその時の上げ残しである。また埋土中からいくつかの墓石が出土しており，紀年銘が残っている。一番古い時期は天明5年（1785年）で，最低江戸時代の中期末位から墓所が営まれていたと思われる。

J06（Fig.38）　有田西公園東側に位置する。調査区標高は12.3mを測る。土坑1基を検出した。SK32は幅1m深さ0.5mを測る。底部は平坦で断面箱形の土坑である。

J 08 (Fig.38)　周囲の調査が進んでいる調査区である。東側では表土下20cm，西側では60cmで遺構を検出する。西側は遺構面の上に30cm程の褐色粘質土が堆積する。遺構面は鳥栖ローム層である。標高12.2～12.4mを測り若干西に向かって傾向する。検出遺構は溝・土坑・ピットである。SD46は55次調査3号溝につながる。幅1m深さ0.5mを測り断面逆台形を呈する。土層堆積状況も3号溝と類似する。大型建物群を囲む溝であり8世紀中頃と考えられている。SD48は後述するSD45と一連の溝である。133次調査SD01，55次調査1号溝等に接続するものである。SD48は完掘していないが幅9m程を測る。上面より朝鮮系軟質土器が出土する。遺構の覆土はロームブロックを含む黒褐色粘質土を主体とする。

SD45 (Fig.18)　調査区東側で検出された。55次調査1号溝に接続する溝である。完掘されておらず幅7m程を測る。上層覆土は暗茶褐色土を主体とする。土師器・陶磁器・石鍋の破片が出土している。

J 09 (Fig.38)　西福岡中学校南側に位置する。地表下0.6～1.0mで遺構面を確認する。包含層は存在しない。遺構面は西側は鳥栖ローム，東側は新期ロームである。標高は11.8m～11.5mを測り若干西に傾斜する。住居跡・溝・ピットを検出する。当区では55次調査3号溝の延長部分が予想されたが，検出されなかった。恐らく手前で東へ曲がるものと考える。遺構の覆土はロームブロックの混入する暗茶褐色土～黒褐色土を主体とする。

SC01 (Fig.18)　調査区中央西寄りで検出した。調査区内では南西コーナーを確認する。長さ3m以上，深さ30cmを測る。覆土は地山ブロックを含む黒褐色～黒色土による。壁溝がめぐっており四周すると思われる。出土遺物は土器細片のみである。

J 10 (Fig.38)　J 02の東に続く調査区である。現地表下20～30cmで遺構を検出する。検出遺構は溝・ピットである。SD51は第95次調査の3号溝，133次調査1号溝に接続する。幅6m深さ1.4mを測る。2段掘りで東西に幅広のテラスを有する。そこからやや広がるV字状の溝を掘り込む。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし下層にいくに従ってロームブロックの混入が多くなる。堆積状況は133次調査分と同様である。本調査区では出土遺物はほとんどみられなかった。

SD51 (Fig.19)　幅70cm，深さ20～30cmの浅い溝である。また当区では133次調査3号溝の延長部分の検出が予想されたが，確認されなかった。この溝は弥生時代の環溝を為すものと考えられる。当区で検出されなかったことにより，この部分が陸橋部となる可能性が高いと思われる。東側で大型建物の柱穴を検出したが，規模は不明。ピットもいくつか検出したが，107次調査の構状遺構の延長部は確認されていない。

J 11 (Fig.39)　J 06南側に接続する。地表下20cm程で遺構を検出する。遺構面は暗黄褐色砂質ローム層である。標高10.9～12.5mを測り南に急傾斜する。検出遺構は溝1条である。

SD53 (Fig.19)　北端で検出された幅2.6m，深さ1.3mの溝である。断面V字形を呈す。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし下層に地山ブロックが多く認められる。これは95次調査2号

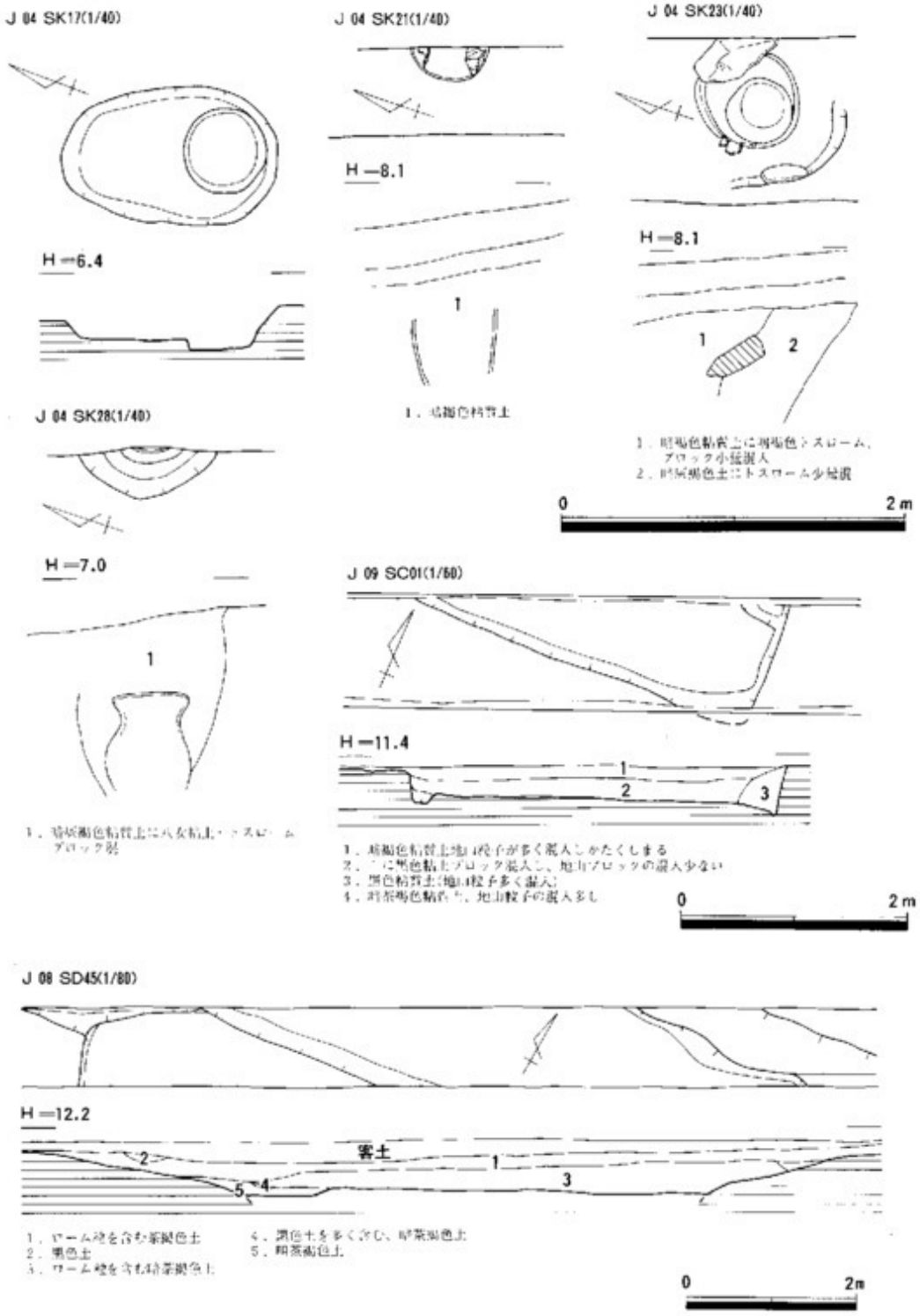


Fig. 18 SK17・SK21・SK23・SK28・SC01・SD45 (1/40, 1/60, 1/80)

溝につながる溝である。この溝は16世紀前半から中頃に比定され，57次調査検出の溝と共に郭を形成するものと考えられている。

J 13（Fig.39）　東西にのびる調査区である。調査区標高は東側で9.1m，西側で7.6mを測り，西側谷部に向かって急傾斜する。検出遺構はピットのみである。

J 14（Fig.39）　西福岡中学校東側に位置する。地表下50cm程で遺構を検出する。検出遺構は住居跡・溝・ピットである。SC87は南側コーナーと北壁を検出した。復元すると一辺5m程度の住居跡になると思われる。北壁は壁溝部のみ残存する。その他屋内施設は確認していない。SD54は幅80cm，深さ10cm弱を測る。SD55は幅1.8m，深さ30cmを測る。共に周囲につながると考えられる溝はない。

J 15（Fig.39）　72次・140次調査地点にはさまれた調査区である。地表下20～30cmで遺構検出する。遺構面は橙色ローム層である。標高10.1m～10.4mを測り西側に若干傾斜する。包含層は認められなかった。溝1条及びピットが検出された。

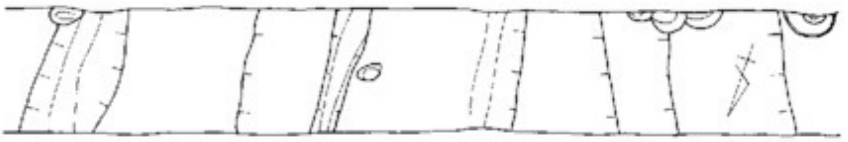
SD56（Fig.19）　調査区西側で検出された。32次・72次・140次調査中世溝につながるものである。幅3.8m，深さ1.2mを測る。両側に40～60cmのテラスをもち，そこからV字形に掘り込む。覆土はロームブロックの混入した暗褐色粘質土を主体とする。32次調査では陶磁器・土師質土器・瓦質土器が出土し16世紀代の年代が与えられている。郭を形成する一連の濠と考えられる。

J 16（Fig.39）　I 14に南接する調査区である。表土下20～30cmの烏栖ローム層において遺構を検出する。遺構面標高は11.7～12.7mを測り北に向かって傾斜している。検出遺構は溝及びピットである。SD57は107次調査の矩形に曲がる中世溝の延長部分である。SD57は幅4.8m，深さ1.4mを測る。断面V字形を呈す。土層は水平堆積を示しており，覆土は上層（ロームを含む暗赤褐色土）と下層（褐色粘質土を主体とする）に分けることができる。SD58は断面観察より幅2.5m，深さ1mを測り，断面V字形を呈す溝である。覆土は暗赤褐色土を主体とする。切り合いはSD57→SD58の順である。出土遺物はほとんどないが，互いに陶磁器の破片を出土している。また，調査区中央では18次調査の延長で環溝の一部も検出している。当区北側は撹乱が進んでおり遺構もほとんど検出されなかった。

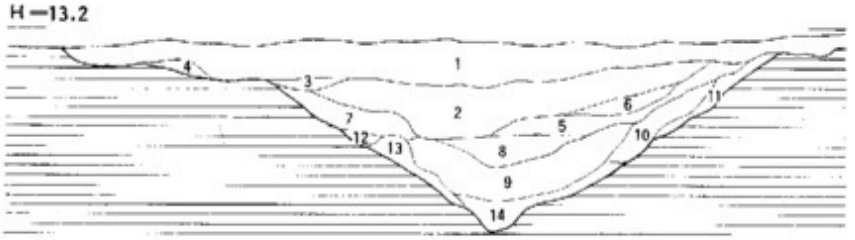
J 17（Fig.39）　J 13の東に位置する。54次，108次調査地点にはさまれている。地表下30cm程で遺構を検出する。調査区内は東端から西端へ40cm程傾斜している。溝・ピットを検出した。SD70は108次調査7号溝につながる。幅1.3m，深さ0.4mを測る。覆土は暗～黒褐色を主体としロームブロックを混入する。形状・覆土共に7号溝と同様である。その他溝・ピット共に覆土は黒褐色土にロームを混入するものを主体とする。

J 18（Fig.39）　I 20北側に位置する調査区である。現地表下20cmで遺構を検出した。遺構面は橙色ロームである。調査区内は北側に若干傾斜している。検出遺構は溝・ピットである。

J 10 SD51



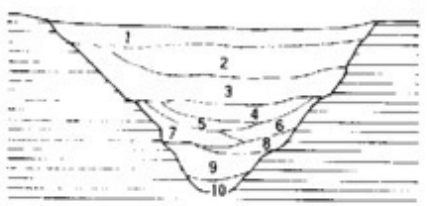
H—13.2



1．暗褐色土に明褐色ローム粒子混入
2．1よりローム粒子の混入少ない
3．明褐色ロームブロック
4．ややくらい黄褐色砂質ローム
5．暗黄褐色粘質土にロームブロック混入
6．5よりロームブロックの混入少ない
7．暗黄褐色土（3よりくらい）
8．2に黄褐色ローム（砂質）ブロック混入
9．暗茶褐色粘土
10．暗茶褐色・明褐色粘質土にローム粒子混入
11．10に明褐色ロームブロック混入
12．褐色ロームブロックに暗茶褐色粘質土混入
13．暗茶褐色土に黄褐色ロームブロック混入
14．黄褐色砂質ローム（地山）ブロック
15．9より暗く円礫を含む

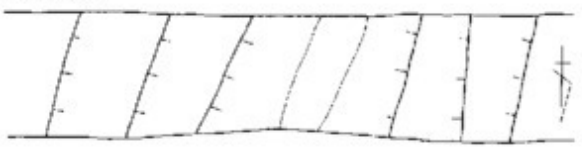
J 11 SD53

H—12.6

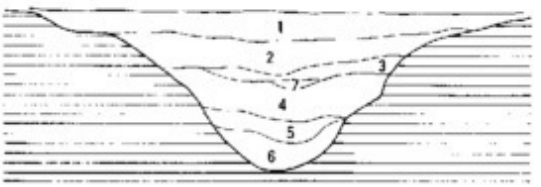


1．茶褐色粘質土（褐色地山粒子混入）
2．暗茶褐色粘質土（褐色地山ブロック混入、黒褐色粘質土ブロックも少し含む）
3．2より褐色地山ブロックの混入多く軟質
4．3より少し暗く地山ブロック混入少ない
5．暗茶褐色粘質土
6．5に少し褐色地山ブロック混入
7．5よりやしくらい
8．7に暗黄褐色砂質ローム粒子混入
9．暗灰褐色粘土
10．9に暗黄褐色地山ブロック混入

J 15 SD56



H—10.4



1．暗褐色土に黄褐色ローム粒子混入
2．暗褐色土に黄褐色ローム粒子ブロックを1より多く混入
3．2よりローム粒子の混入が少なく黒褐色ロームブロックを少し含む
4．暗褐色粘質土
5．にぶい黄褐色砂質土に黄褐色ローム粒子を少し含む
6．オリーブ褐色粘質土に黄褐色ローム粒子を多く含む
7．4に黒褐色粘質土を少量混入

0　2 m

Fig. 19　SD51・SD53・SD56（1/60）

SD74 (Fig.20)　調査区北隅で確認した。40次調査2号溝・108次調査1号土坑に接続する。幅7.8m，深さ2.1mを測る。南北の両方を三段に掘る。二段目に幅広いテラスをもうけ，中央やや北よりに40cm程掘り込んでいる。二段目テラスの幅は4.5mを測る。二段目の壁は一段目に比べて垂直に近く立ちあがる。覆土は褐色～暗褐色粘質土を主体とし，三段目には黒褐色粘土が堆積する。二段目以降はレンズ状に堆積する。出土遺物はほとんどない。既調査地点において16世紀前半代が考えられており当区もこれに準ずる。この溝は濠としての機能が考えられており郭を形成するものと思われる。

J 19 (Fig.40)　J 15の東に伸びる調査区である。北に53次調査地点が位置する。地表下20cm程で遺構検出をする。遺構面は橙色ローム面である。調査区標高は11.6～12.7mを測り東に傾斜する。溝3条，ピットを検出する。SD75は53次調査2号溝に接続する溝である。濠としての機能が考えられるものである。幅4.2m，深さ1.3mを測る。西側に幅60cmのテラスをもつ2段掘りとなる。底部は丸みをもち2段目の壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は暗褐色粘質土を主体としロームブロックが混入する。遺物は細片のみの出土である。郭を形成する濠の一部を構成するものと思われる。SD76は幅1.1m，深さ0.2mを測る浅皿状の断面を呈する溝である。覆土はロームブロックの混入した暗褐色土である。

SD77 (Fig.21)　調査区西端で検出する。接続する溝は現在まで確認されていない。幅1.2m，深さ0.5mを測る。覆土は黄褐色土を主体とする。土師器坏が出土する。

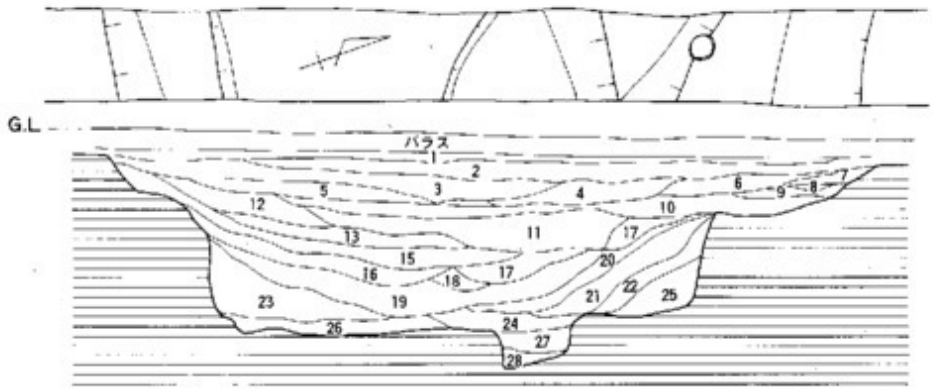
J 20 (Fig.40)　J 18に南接する。表土下20～30cmで遺構を検出する。遺構面は橙色ロームである。標高12.1～12.4mを測り北に若干傾斜する。遺構は散漫であり溝・土坑・ピットを検出する。SD78は幅80cm，深さ10cmを測り，断面浅皿状を呈す。第17次調査の1号溝につながる。覆土はロームブロックを混入した黒褐色粘質土である。SK33は調査区内で幅1.1m，深さ5cm程の浅い土坑である。覆土はSD78と同様である。

J 21 (Fig.40)　77次調査区に北接する。表土下20cm程で遺構を検出する。遺構面は橙色ロームである。標高10.5mを測り区内はほぼ平坦である。77次調査延長部分を含め溝・土坑・第77次調査の大型建物につながる柱穴が検出された。SD81は弥生時代環溝の一部と成すものである。幅2.3m，深さ0.8mを測る。SD79は47次調査2号溝延長部である。調査区内では西肩のみ検出する。深さ20cmを測る。SK34は調査区内で幅1.5m，深さ0.5mを測る。断面坏状を呈す。覆土は黒褐色土とロームの混合を主体とする。

SD80 (Fig.20)　調査区中央で検出された。幅3.0m，深さ1.1mを測る。底面はいまだ未掘である。覆土は褐色土～暗褐色土を主体とする。下層は全体的に暗く粘性が強くなる。SD80は17次・113次調査検出の溝につながるものと思われる。出土遺物には陶磁器等がある。中世後半期の郭を形成する濠の一部であろう。

J 22～J 26　夜間調査を行う。台地の落ちを検出し室見川に至る調査区である。溝・ピット

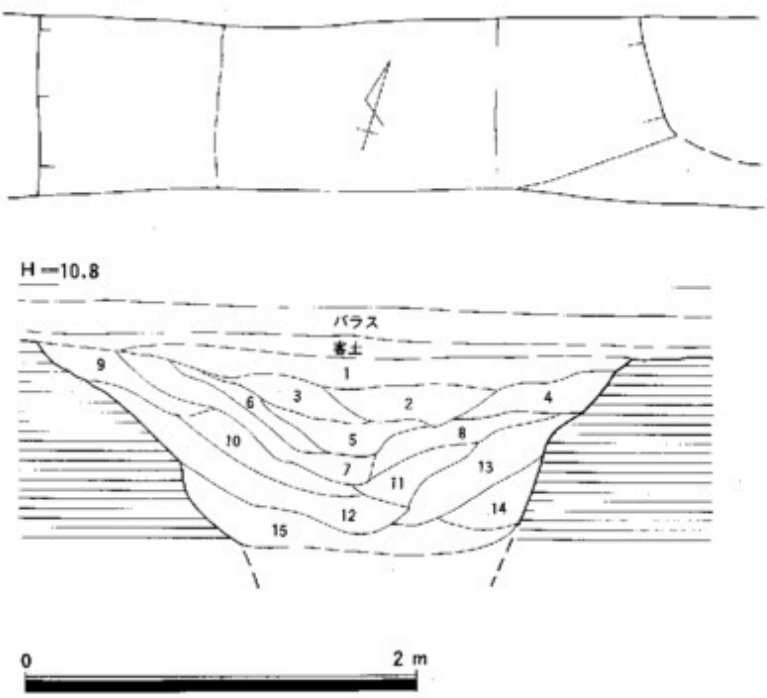
J 18 SD74(1/60)



1．明褐色ローム ムブロック
2．褐色粘質土
3．暗褐色粘質土
4．3よりやや明るい（ロームブロック混入）
5．3よりややくらい（ロームブロック混入）
6．4よりロームブロックの混入多い
7．6よりややくらい
8．7に明褐色ロームブロック多く混入
9．6よりややくらい
10．暗褐色粘質土
11．暗褐色粘質土
12．褐色土
13．11に褐色ロームブロック多量混入
14．暗褐色土
15．11よりややくらい
16．15に黄褐色ロームをわずかに混入粘性がつよく柔らかい
17．16と同じ
18．暗褐色粘土
19．18よりややくらい
20．黄褐色ロームブロックに褐色土混入
21．暗褐色土（粘性をもつ）
22．赤褐色土（ローム混入）
23．24と同じ
24．黒褐色粘土
25．黄褐色ロームブロックに褐色土混入
26．褐色粘質土
27．黒褐色粘土
28．黒灰褐色粘土

0 2 m

J 21 SD80(1/40)



1．褐色土に橙色ロームブロックを混入
2．褐色土に黒褐色粘質土小ブロックを少量混入
3．にぶい黄褐色粘質土、明黄褐色ロームブロック・黒褐色粘質土を混入
4．褐色土にロームブロック多量混入
5．褐色粘質土にロームブロックをわずかに混入
6．5でロームを混入しない
7．にぶい黄褐色粘土で明黄褐色ロームブロックをやや混入
8．褐色土（粘性がつよく柔らかい）
9．にぶい黄褐色粘質土で明黄褐色ロームブロック粒子を混入
10．7より柔らかく、暗褐色粘土でロームを混入しない
11．褐色粘質土でローム粒子をわずかに含み柔らかい
12．暗褐色粘質土
13．褐色土（粘性があり柔らかい）
14．暗褐色土（粘性があり柔らかい）
15．12に明黄褐色砂質ローム ムブロックを少量混入（柔らかく粘性がつよい）

0 2 m

Fig. 20 SD74・SD80 (1/40, 1/60)

を若干検出する。遺物はほとんどない。

J 29（Fig.40）　台地西側縁辺より東西にのびる調査区である。地表下40cmで遺構を検出する。遺構面標高は9.5mを測る。調査区西側に溝1条を検出する。

SD82（Fig.21, Pl. 4）　調査区西側で検出された濠状遺構である。幅2.8m，深さ0.8mを測る。断面V字形を呈す。覆土は褐色土を主体とする。この溝は57次調査検出の溝とつながるものと思われる。またその北側は，直角に東側へ曲がり，下水道調査J 11SD53から95次調査検出2号溝に伸びるものと思われる。この溝はこれまで再三述べている中世後半期の濠と考えられているものであり，城郭を形成するものであろう。SD82からの出土遺物はほとんどない。

J 30（Fig.40）　I 29の東に位置する。95次調査地点の南側である。地表下50cmで遺構を検出する。遺構の検出は散慢であり，95次調査地点から延長する。溝及び道路状遺構を検出している。

SD83（Fig.21, Pl. 5）　95次調査1号溝に接続する。弥生前期環濠の一部を構成するものである。幅1.6m，深さ0.9mを測る。断面V字形を呈す。覆土はレンズ状堆積を示す。暗赤褐色土～黄褐色を主体とする。最低部には黒色土を多く混入している。

SD84（Fig.21, Pl. 6）　95次調査1号道路状遺構につづく遺構の側溝部にあたる。道路部分は幅1.6m程を測り，礫が散慢に残存している。東側側溝部分は幅1.7m，深さ1.0mを測り，底部に20～40cmの平坦面をもつ。覆土は上層が暗褐色土，下層が灰褐色土で下層には鉄分・マンガンの沈着がみられる。陶磁器片等が出土する。この道路状遺構は中世溝の埋没途中に形成されている。既調査区では礫中より近世陶磁器も出土しており，最後埋没時代は18世紀代と考えられる。

J 35（Fig.40, Pl. 6）　J 09の西側に位置する。地表下70cm程で遺構を検出する。遺構面の上に15cm程の褐色シルトが堆積している。標高11.3mを測る。調査区内はほぼ平坦である。調査区内では溝が2条検出されている。

SD85（Fig.21）　調査区西側で検出された。幅2.8m，深さ0.8mを測る。西側に50cm程のテラスをもつ。覆土は暗褐色～褐色を主体とする。出土遺物は細片のみであるが，中世に属するものが出土する。既調査で検出される中世後半期の濠状遺構とは形状・覆土ともに異なる。また方位においても東に振れる様である。

J 39（Fig.40）　台地西側縁辺に接して東西にのびる調査区である。表土下50cmで遺構を検出する。標高11.4mを測る。溝1条を検出する。SD86は略東西にのびる溝である。幅60cm，深さ10cm程度の浅い溝である。接続すると思われる溝は確認されていない。須恵器坏・陶器・土師質土器等の細片が出土する。覆土等より近世に属するものかと思われる。

J 40（Fig.40）　116次調査地点の東隣に位置する。表土下30cmで遺構を検出する。遺構面

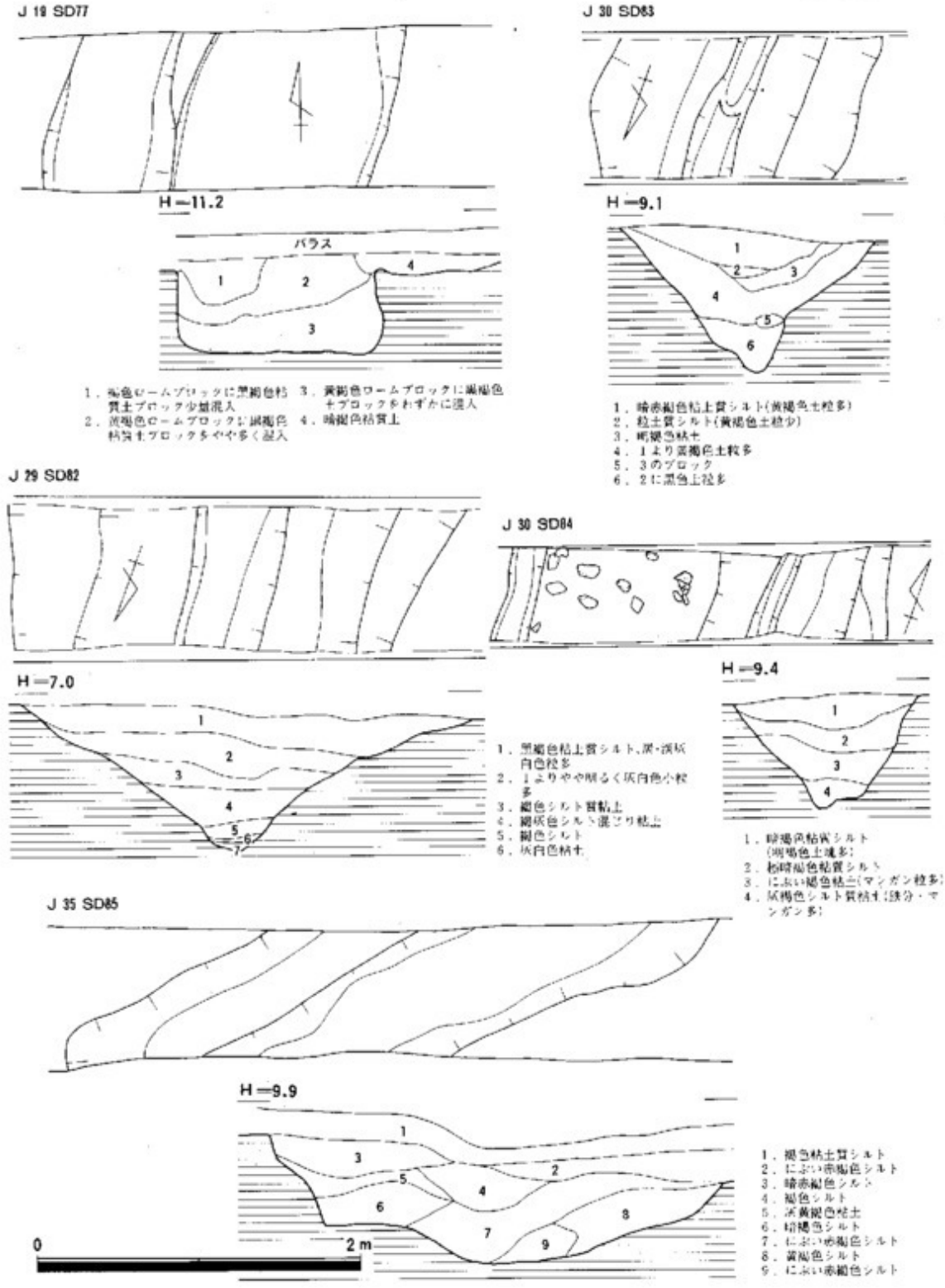


Fig. 21　SD77・SD82・SD83・SD84・SD85 (1/40)

は中央に水道管が埋設されており，撹乱が著しい。ピットのみが検出された。

J 41 (Fig.40)　59次調査地点の南端部より南北にのびる調査区である。現状は原西保育所より一段高くなっている。遺構面標高は9.3～9.0mを測り，北側の谷部に向かって傾斜していく。地表と遺構面の比高差は1.3m程である。検出遺構はピットのみであるが割合密に検出された。ここから市営住宅隣地にかけて遺構の密度は高い。ピットは径30cm，深さ20～30cm程の小さなものばかりである。覆土は黒褐色粘質土。遺物は細片が少量出土するのみである。

J 42 (Fig.40)　J 41南端より東に曲がる調査区である。地表下1.0m程で遺構検出をする。遺構面標高は西側で9.0m，東側で8.2mを測り，西に急傾斜する。遺構面は黄褐色ローム層である。検出遺構はピットのみである。出土遺物はほとんどない。

J 43 (Fig.41, Pl. 7)　市営住宅東側に位置する。遺構面は北側で地表下1.5m，南側で0.7mで検出する。南側では暗赤褐色粘質土の包含層が2～3cm残存している。遺構面標高は8.9～10.2mを測り北側に傾斜する。遺構は溝・ピットを検出した。全体に密度が濃い。覆土は暗～黒褐色粘質土である。遺構に伴う遺物はほとんどない。

J 44　J 42区に東接する。遺構面は地表下2.2mである。20～30cmの黒色包含層が堆積する。遺構面は黄褐色ローム層である。湧水のため調査は不能であった。

J 45　J 44に東接し東側の谷部に向かう。調査区西側は地表下1.3m，東側では1.0mで基盤の八女粘土層を確認する。アスファルトの下は全て盛土である。東側で谷部への落ちを検出する。

J 46 (Fig.41, Pl. 7)　第5次調査の北側に位置する。地表下15cm程で遺構検出をする。遺構面は烏栖ローム層である。遺構面標高は10.9mを測る。検出遺構は土壙7基である。SK35～SK39は5次調査地点より広がる縄文時代土壙である。これは調査区東半部には広がらず，分布の東限を示すものと考えられる。

SK35 (Fig.22)　径1.1m，深さ0.7mを測る。壁は垂直に立ちあがり，底面は平坦である。覆土は，①—黄褐色土，②—①に灰褐色土ブロックを含む，③—褐色土（灰褐色土ブロックを多量に含む，となっている。縄文土器片が出土している。

SK36 (Fig.22)　径1.3m，深さ0.9mを測る。南側にテラスをもつ2段掘りとなる。壁は西壁がややオーバーハングする。底面は平坦である。覆土は，①—灰褐色粘質土，②—褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む），③—灰褐色粘質土，④　灰色土，⑤—褐色粘質土（黄褐色粘質土との互層），⑥—灰褐色粘質土（炭化物を含む）となる。縄文土器片が出土する。

SK37・38 (Fig.22)　SK37は径1.2m，深さ1.1mを測る。SK38を切る。SK38は径1m程度，深さは0.7～0.8mと考えられる。SK37より縄文土器片，剥片が出土する。覆土は，①—褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを含む），②—黄褐色土（灰褐色土ブロックを含む）③—黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層となる。

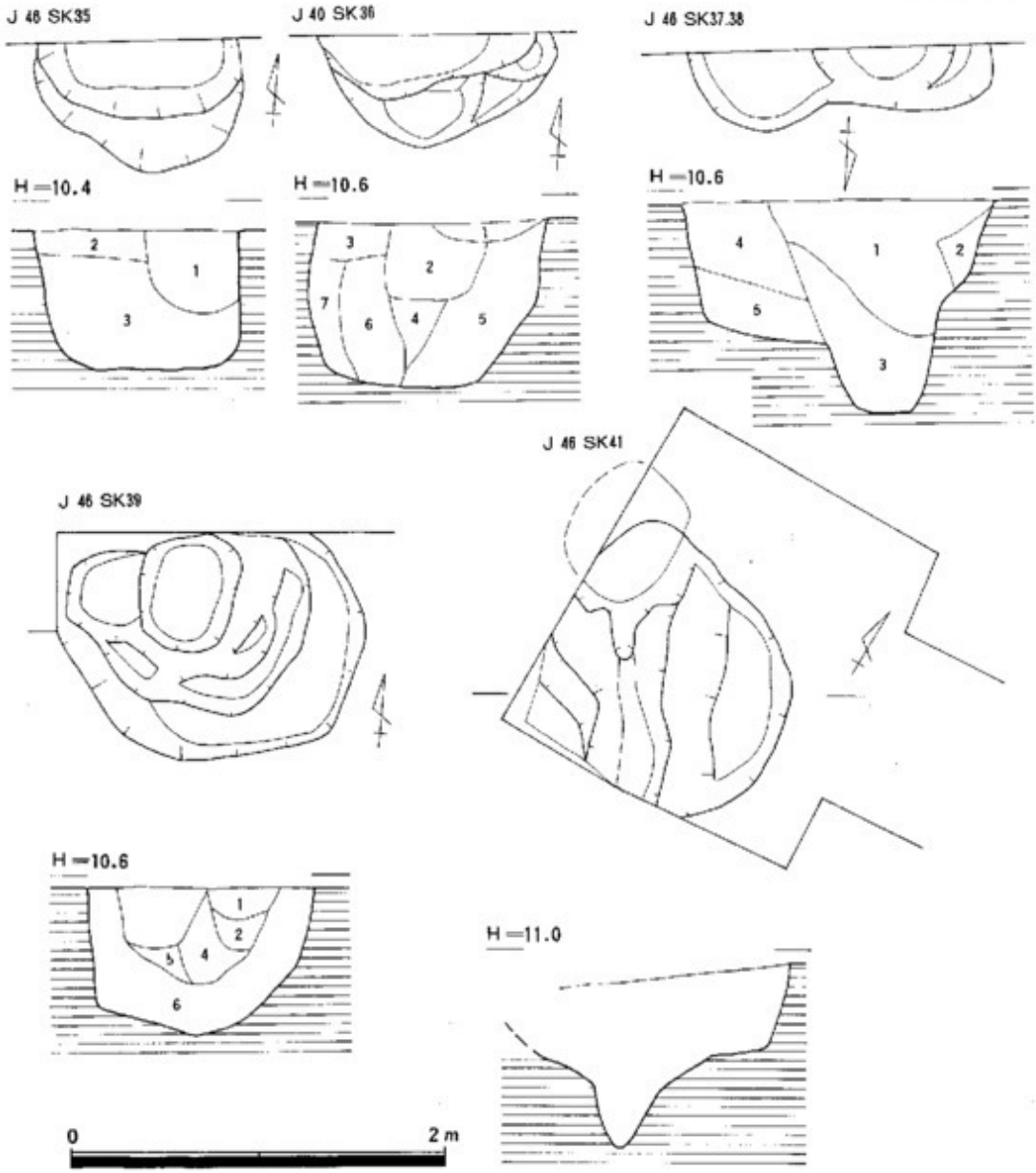


Fig. 22 SK35・SK36・SK37.38・SK39・SK41 (1/40)

SK39 (Fig.22, Pl.8) 径1.6m, 深さ0.8mを測る。南東部にテラスをもち, 中央に径40~60cmの掘込みをもつ。土層観察より, 柱穴状の掘込みが認められる。覆土は, ①・②—黒褐色・黄褐色・灰褐色粘質土の混合, ③—灰褐色粘質土 (黒褐色土・黄褐色土ブロックを含む), ④—黄褐色粘質土 (灰褐色土ブロックを含む), ⑤—淡黄色粘質土 (褐色粘質土ブロックを含む), ⑥—黄褐色粘質土 (灰褐色粘質土ブロックを含む) となる。なおSK40は, 深さ10cm程

の浅い土坑で，覆土は明褐色粘質土である。

SK41（Fig.22，Pl.8） 径1.4～1.5m，深さ，0.9mを測る。東西にテラスをもち，中央に深さ30cm程のV字形の掘込みをもつ。北壁はオーバーハングし，底面は平坦となる。埋土より青磁・白磁・明染付の破片が出土する。

J47（Fig.41） J43の南側に位置する。表土下40cm程で遺構検出をする。北側では遺構は確認されない。南側でピットが散漫に検出された。覆土は暗褐色土～黒褐色である。遺構に伴う遺物はない。

J48（Fig.41） 西福岡中学の西側に位置する。表土下70cmで遺構検出をする。標高は8.9～10.4mを測る。北側谷部に向かって傾斜していく。撹乱が多く，又遺構も散慢であるが南側で溝・ピットを検出した。覆土は暗褐色土である。溝より近世陶器片が出土する。

出土遺物

J02 SD42（Fig.23 35 Pl.15） 35はSD42出土の瓦器塊である。復原口径17cm，器高5.1cmを測る。焼成はあまく，器面の磨滅がすすむ。色調は暗黄褐色を呈し底部外面は淡黒色である。胎土には径1mm程の石英砂粒を多く含む。

J08 SD45（Fig.23 36～37，Pl.15） 36・37は青磁である。36は同安窯系の青磁であろう。明黄緑色を呈す。高台部～底部外面は露胎である。内底見込みと体部との境に段を有す。また高台部外面は斜めに削られて鋭くおさめる。体部外面にヘラ状工具による沈線，内面に櫛描文がそれぞれわずかに残存する。37は龍泉窯系の皿である。上げ底・露胎の底部より体部に開く，色調は濃緑色を呈す。内底見込みに櫛状工具による花文を施す。

J08 SD48（Fig.23 38～39，Pl.15） SD48はSD45と一連のものと考えられるが，その中より朝鮮系の軟質土器と思われるものが出土した。38・39共に甕形土器口縁部破片である。38はややふくらみをもつ長胴の体部から，ゆるやかに直線外方に開く口縁部につながる。端部は丸くおさめられ，口唇部には浅い凹線が施される。内面は丁寧にナデられ，タタキのあて具痕等は全く観察されない。体部外面は縦位の平行タタキが施される。タタキ目の凸部幅1.5mm，凹部幅2～2.5mm，条線の長さ1.5～2cmを測る。頸部はナデつけられている。復原口径23cm，残存高10cmを測る。39も同様の甕形土器である。38に比べ体部が直線的にのび，口縁部がやや屈曲するが，明確な稜はもたない。口縁端部は38よりも丸くおさめられ，口唇部には同様に浅い凹線が巡る。内面は丁寧にナデられる。外面は同様に縦位の平行タタキが施される。タタキ目の凹部，凸部の幅は共に2mm，条線の長さは2cm程度を測る。38に比べタタキ目間のスパンが広くなっている。復原口径26.6cm，残存高9cmを測る。共に明赤褐色を呈し，焼成良好，胎土は緻密である。これらの朝鮮系軟質土器はその後国内で変容をとげ，口縁形態・外面調整に痕跡を残しながら，玄海灘式製塩土器として残存する土器の祖型となるものであると考えられ

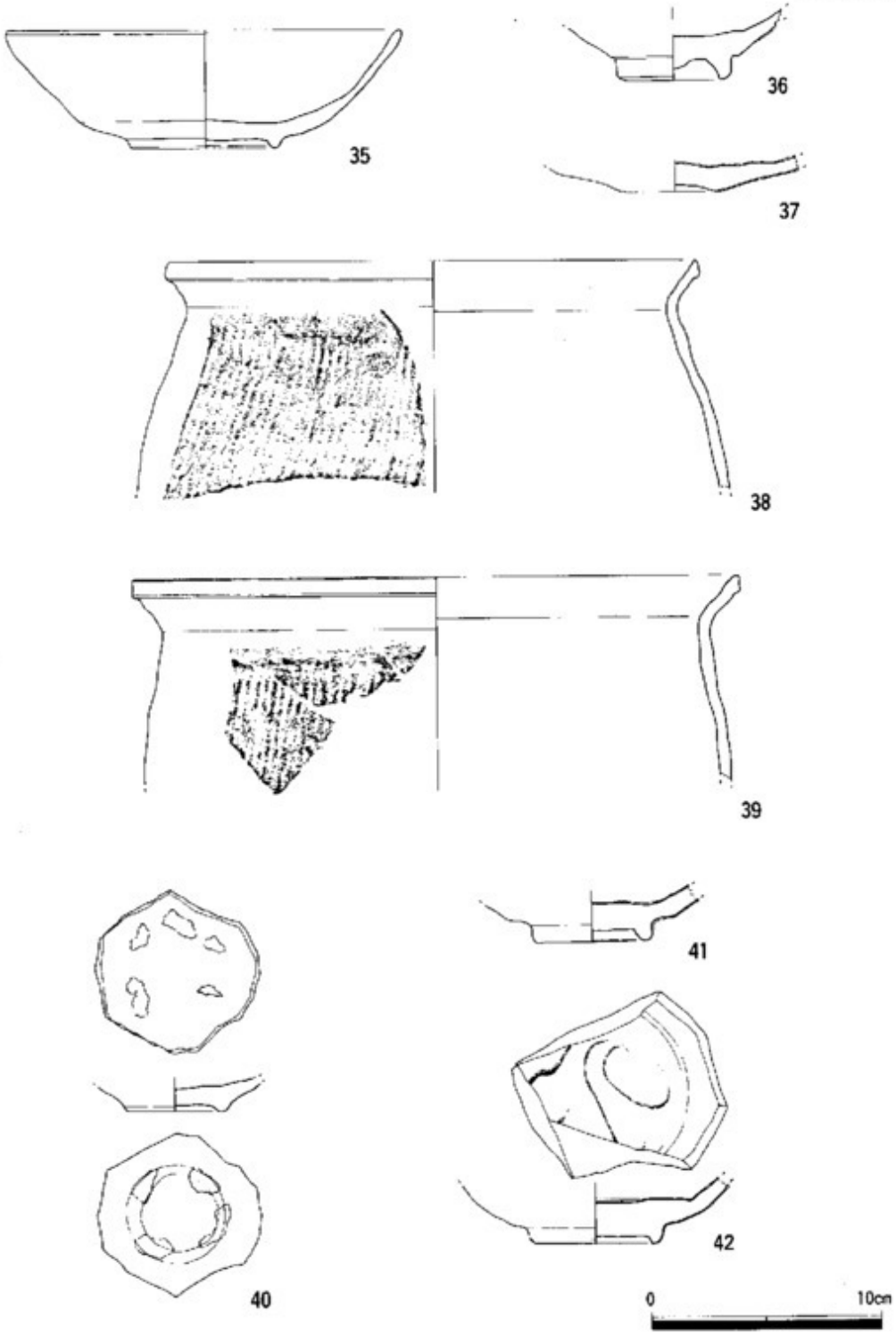


Fig. 23　J区出土遺物(1) (1/3)

る。

J16SD57（Fig.23　40，Pl.15）　40は唐津皿の底部破片である。全面に釉がかかり、明るい灰褐色を呈する。底部畳付は平坦で、体部中位の屈曲部に至る。内・外両面に砂目跡が残存している。

J16SD58（Fig.23　41～42，Pl.15）　41・42は青磁碗である。41は白濁した緑色を呈する青磁碗底部である。畳付及びその内部は露胎である。底部は厚く高台は丸みをもつ。胎土は緻密で焼成は良好である。底径5㎝を測る。42は龍泉窯系青磁碗の底部である。黄味をおびた緑色を示し、高台畳付及びその内部は露胎である。高台外面は内側に削られるが、畳付は平坦面をもつ。底部器肉は厚く1.5㎝程を測る。内底見込みと体部の境に鋭い段を有する。見込み部には花文を有す。底径5.2㎝を測る。

J17SD70（Fig.24　43,Pl.15）　須恵器長頸壺である。偏球形の体部に上げ底気味の底部がつく。口頸部のしまりは緩く外反して口縁部につながるものである。体部上半は回転ナデ。下半外面は回転ヘラ削り調整が行われる。底径7㎝、体部最大径11㎝、残存高11.5㎝を測る。胎土・焼成共に良好で、色調は灰白色を呈す。

J29SD82（Fig.24　44～45）　44は陶器の鍋の破片であろう。口縁部内・外面・体部外面には回転ナデ、体部内面はナデ調整が施される。口縁は稜をもたず、緩やかに外反直立する。細片のため法量は不明である。色調は暗灰色を呈し、胎土は径1～2㎜の石英粗砂を含む。45は土師器坏破片であろう。器面全体にナデ調整が行われる。直線的に外方に伸びる体部にややふくらみをもった底部がつながる。細片のため明確ではないが、復原底径9㎝、残存高3㎝を測る。胎土には径1㎜の石英粗砂を割合多く含む。また金雲母も含む。色調は明桃色を呈す。

J30SD83（Fig.24　46～47）　弥生時代環溝の一部から出土した。46は刻目突帯文の甕形土器底部破片である。底部はナデ調整が行われる。また外面には煤の付着がみられる。底径7.5㎝を測る。胎土は径1～2㎜の石英砂を極めて多く含み、また金雲母も多く含む。色調は外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。47は玄武岩製の石庖丁である基部は欠損する。孔径5㎜、孔間3.2㎜を測る。両面共に剝落が著しくかなり風化している。

J30SD84（Fig.24　48～49）　48は白磁碗の口縁部である。口縁端部に小さい玉縁をもつⅡ類の白磁碗である。残存部下位に薄い稜が認められ、削りの痕跡かとも思われる。胎土はやや灰味をもち、釉調はやや緑味を帯びている。細片のため復原は不可能である。49は磁器の底部破片である。甕の底部かと思われる。底はやや上げ底で器肉は3～4㎜と薄いものである。胎土はやや赤味をもつ灰白色を呈し、釉調は濃い緑色である。復原口径は16㎝、残存高は1㎝程を測る。

J35SD85（Fig.24　50～51）　50は糸切りの土師皿である。底部外面は糸切り，体部外面

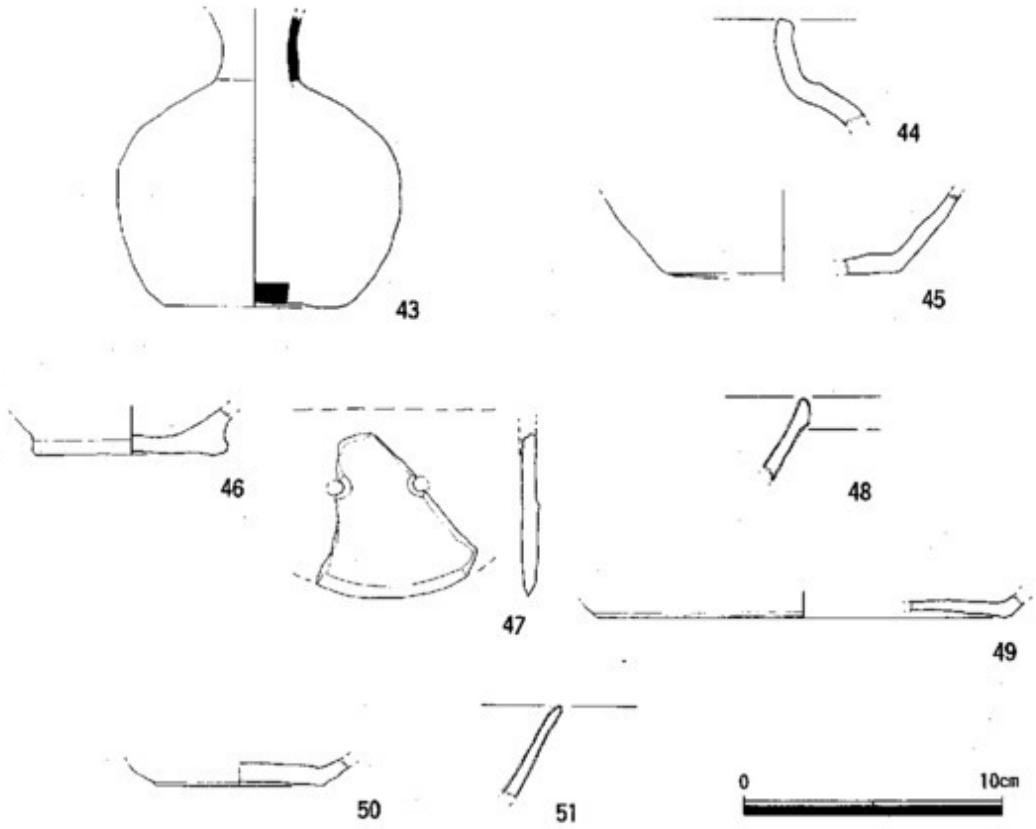


Fig. 24　J区出土遺物(2) (1/3)

～内面は回転ナデを行う。復原底径6.6cm,残存高1cmを測る。胎土には径1～3mmの石英粗砂・金雲母を含む。焼成は良好で，色調は淡褐色を呈する。51は青磁碗口縁部破片である。直線的に伸びる体部が口縁端でそのまま丸くおさまるものである。胎土は灰味が強い青灰色で，釉調はくすんだ緑色を呈する。小片で復原は不可能である。

6) K区の調査

Fig. 25　K区調査地点配置図（1/2000）

概要　K区は現地番有田２丁目に設定されている。有田台地中央部東側に位置する。K区では現在まで14件の調査が行われている。K区では今までに弥生時代の環溝が検出されており，本調査でもこの延長部分が確認されている。またK区南側は小田部城が存在しており，今までにも関連の遺構が検出されているところである。

検出遺構

K01（Fig.41）　100次調査南側での調査区である。溝・土坑・ピットが検出されている。100次調査の溝の延長部分は明確に検出されなかった。SK01が100次調査６号溝延長部ではないかと思われる。遺構検出面は標高13.9～13.0ｍを測り，調査区内は東に向かって若干傾斜している。遺構は全体に散慢である。

SD05（Fig.26）　調査区中央に検出されている。遺構全体は調査時の事情で未掘であるが，溝の深さは0.5ｍ以上を測る。溝の東側はなだらかに傾斜しており，調査時において明確な肩は検出されなかった。100次調査との関係から考えれば９号溝との関連も考えられるが未確認である。

K02（Fig.41）　100次・134次調査の間を南北に設定される。調査区中央と南側に溝が検出されたのみである。北側の溝は134次検出の環溝につながるものであるが，南側の溝は周囲に関連遺構が検出されていない。遺構検出面は北側13.3ｍ，南側12.8ｍを測り，調査区全体がゆるやかに南側に傾斜している。

SD06（Fig.26）　134次調査１号溝の延長部分であると考えられる。調査区内では幅2.0ｍ深さ0.5ｍを測り，断面は半円形を呈す。134次調査部分と比較して幅が広くなり，断面形態もシャープさを失っている様である。土層は水平に堆積しており，上層が暗茶褐色土～黒褐色土を呈し（①～⑤），下層は黄色～黄白色粘質土である（⑥～⑦）。上層中②・③層が遺物を含む層である。134次調査時の所見では，板付Ⅱ式期の溝であり，埋没時期は終末頃になる可能性があるとされている。

K03（Fig.41）　K01区東側に接する調査延長14ｍ程の短い調査区である。溝が１条検出された。遺構検出面は西側が標高12.5ｍ，東側が12.8ｍを測り，東側が若干高くなっている。

SD07（Fig.26）　調査区中央で検出した。134次調査４号溝に続く。幅５ｍ深さ1.2ｍを測る。遺構検出面下30～60㎝で一段テラスをつくり，やや西寄りに幅1.2ｍ深さ0.6ｍの溝を堀るという，二段掘りの形状を呈す。二段目の埋土は有機質等を含み滞水・沈殿のあったことがうかがえる。また一段目は層位的に分離が困難で，比較的短期間に埋没したしたことが想定できる。134次調査時には瓦質の足釜，土師質の鍋が出土しており，16世紀前半代があてられている。

K04（Fig.41）　K03区の東側の調査区である。遺構面の標高は西側が12.4ｍ東側で10.5ｍを測り東に向かってかなり傾斜している。現地表との比高差は0.3～1.0ｍである。溝が２条検

出された。SD08は東側で検出されている。西側の肩のみを検出し以下は未掘である。SD09は中央やや西寄りに検出されている。幅8.5m深さ1.3mを測る。西側に2段のテラスをもちその東側に半円形の最深部を掘り込んでいる。当区では134次調査及びK02区で検出された環溝の延長部の検出も想定されたが，明確な形では検出されなかった。

K05（Fig.41）　南北に伸びる調査区で調査延長44mである。遺構面は北側が標高13.5mで南側は11.9mを測り，北側は新期ローム，鳥栖ロームが残っているが中央から南は八女粘土層で遺構検出を行った。溝3条を検出した。

SD10（Fig.26）　調査区北寄りに検出された。幅2.7m深さ0.8mを測る。北側に一段テラスを持ち，テラス部からの深さは0.3mである。溝埋土は茶褐色の粘質土で，ブロック状に八女粘土が混じる。また径10～20cm程の礫を多量に含んでいる。遺物は細片のみである。この溝については周辺の調査が行われれば，つながりや時期的な問題も解決されるであろう。

K06（Fig.42）　南北にのびる調査区で，調査延長32mである。調査区北側は標高10.6m南側は8.6mである。現地表面との比高差は約1.0mである。遺構は調査区南側に寄って，溝と土坑が検出された。

SK02（Fig.26）　調査区南側，SD11の北側に検出された。最大幅2.05m，深さ0.7mを測る。中央部に一段掘りくぼめた平坦面をもちその幅は1m深さ0.1m程である。土坑埋土は上下の2層にわけることができる。上層は暗茶褐色粘質土で下層は暗茶褐色土にオレンジ色の粘土ブロックを含むものである。これと切り合う土坑も検出されている。埋土は上層暗青灰色粘土，また下層は暗青灰色土に白橙色ブロックの混ざるものである。SK02からは土師器・瓦器・滑石製石鍋等が細片を中心として出土している。

SD11（Fig.26）　SK02の南側に検出された溝である。調査区東側では幅1.0m，西側で2mを測る。深さは0.35m程の浅い溝である。南方向に蛇行していくことも考えられるが，現時点では延長部分も想定できない状況である。遺物は細片のみの出土である。

K07（Fig.42）　K06の南に接する調査区である。遺構検出面は標高8.5～8.3mを測り調査区内はほぼ平坦である。遺構は溝・土坑が検出されている。SD14は近代の暗渠であろうと思われる。

SK03（Fig.26）　円形と思われる土坑が2基切り合っている。北側の土坑は径1.1m深さ30cm程の土坑である。南側の土坑は径1.3m深さ20cm程を測り断面浅皿状を呈す。出土遺物は細片が多い。覆土等から考えて近代に属するものではないかと思われる。

SD12・13（Fig.27）　調査区のほぼ中央に位置する。SD12は幅5.9m深さ80cmを測る。北側部分が2段掘りになっている。1段目は深さ50cmを測り70～80cmのテラスをつくる。溝の南側は現代の溝に撹乱されているが，基底部はテラスより30cm程下がり幅4m程の平坦面をつくっている。埋土は上下2層に分かれ上層は暗灰色粘質土で下層は暗灰色粘質土と砂の互層に

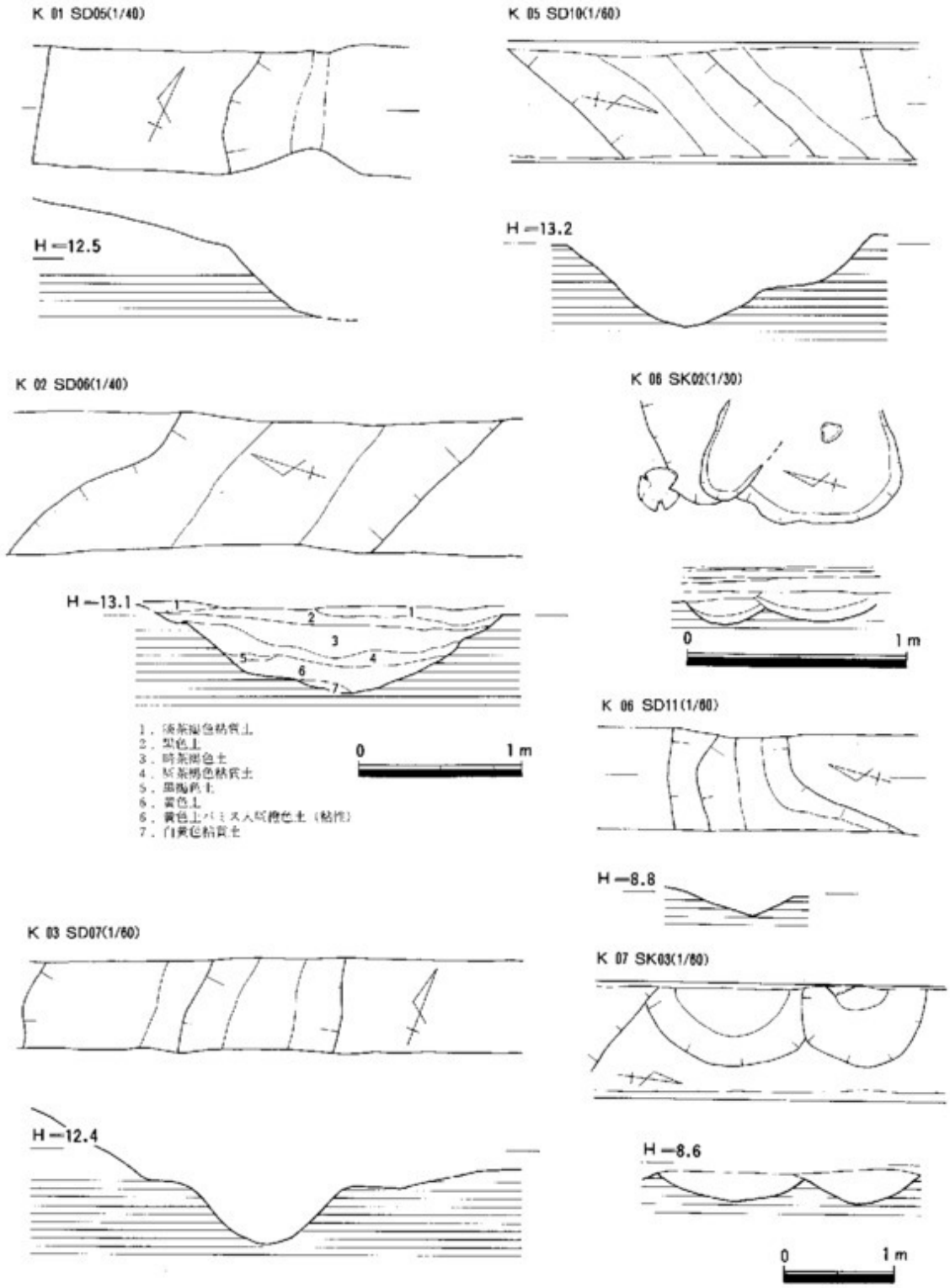


Fig. 26 SD05・SD06・SD07・SD10・SD11・SK03 (1/30, 1/40, 1/60)

なっている。古墳時代に属する甕・鉢・高坏等が出土している。SD13はSD12の北側で検出された。幅6.5m深さ70cmを測る。北側は割合急角度に立ちあがるが南側は緩やかに傾斜する。埋土は検出面より50cm程が暗茶褐色粘質土～暗茶色粘質であり遺物を包含している。また基底部は砂との互層となる。遺物は上層から出土し，弥生時代に属する遺物が出土している。

K10（Fig.42）　K区の北東部分に設定される。周囲には24次・112次調査地点が存在する。地表下30cm程の黄灰白色粘土層で遺構を検出した。遺構面の標高は8.0～8.5mを測り東に向かって傾斜している。検出遺構には溝・ピットがある。ピット埋土は暗赤褐色粘質土で柱痕跡は検出されなかった。

SK04（Fig.27，Pl.9）　幅3.2m深さ0.4mを測る。床面には礫が散漫に分布している。埋土は下層（⑥層）に粘土層が堆積し、上層（①～⑤層）には地山ブロックを多く含んだ褐色～灰褐色土が堆積し西側より投げ込まれたような状態を呈している。この土層堆積状況は7次調査のSD01に類似しており、当初は土坑として考えていたが、これに続く溝の可能性が強いと考えられる。遺物は陶磁器・板碑が出土した。出土板碑は小形のものであり、同類の板碑で紀年銘を有するものに永享五年（1433）、文明八年（1476）があり、15世紀代にこれらの小形のものが盛行することが指摘されている。また7次調査SD01からは土師器、白磁、青磁、陶器、瓦等が出土し15世紀後半代のものとされており、板碑の年代観とも整合する。

SD15（Fig.27，Pl.10）　調査区東寄りに検出される。幅2.9m深さ1.1mを測る。溝埋土は上層（①～⑦層）が暗オリーブ灰色土を基調とした土が堆積している。下層（⑧～⑫層）は黄褐色土が堆積する。この溝は方向的には7次調査SD02方向にのびる様であるが，断面形態・埋土・出土遺物等が異なり別の溝であろう。下層からは土師皿と思われる土器片が出土している。

K11（Fig.42）　K06の北側に位置する。南北にのびる調査区である。遺構面の標高は北側で10.2m，南側で9.3mを測る。当調査区においては烏栖ローム上に灰赤色粘土が堆積している。SD17はこれを切って掘り込まれている。またSD16はこの粘土層の下層に存在している。

SD16（Fig.28，Pl.11）　幅1.6m深さ0.3mを測る。断面形は浅皿状を呈する。SD16は烏栖ロームの面より切り込まれている。埋土は褐色シルトを主体としており自然堆積の状況が観察できる。出土遺物はない。中世後半期と思われるSD17の上面の灰赤色粘土層を切り込んで掘られており，切り合い関係より少なくとも中世以前の溝であると考えられる。

SD17（Fig.28）　調査区北側で検出された。幅5.0m深さ0.6mを測る。24次調査の濠状遺構に接続する。24次調査部分では土層観察より人為的な土砂の投機が窺われたが本調査区には，それらしい烏栖ロームブロックを含む層は観察されなかった。24次調査時には，褐色土層より青磁・白磁・土鍋・滑石製品・板碑等が出土している。室町時代に比定されており，中世城跡の空濠の可能性が考えられている。

K12（Fig.42）　147次調査地点の西側に位置する。遺構面は黄白色粘土で標高7.3～7.0m

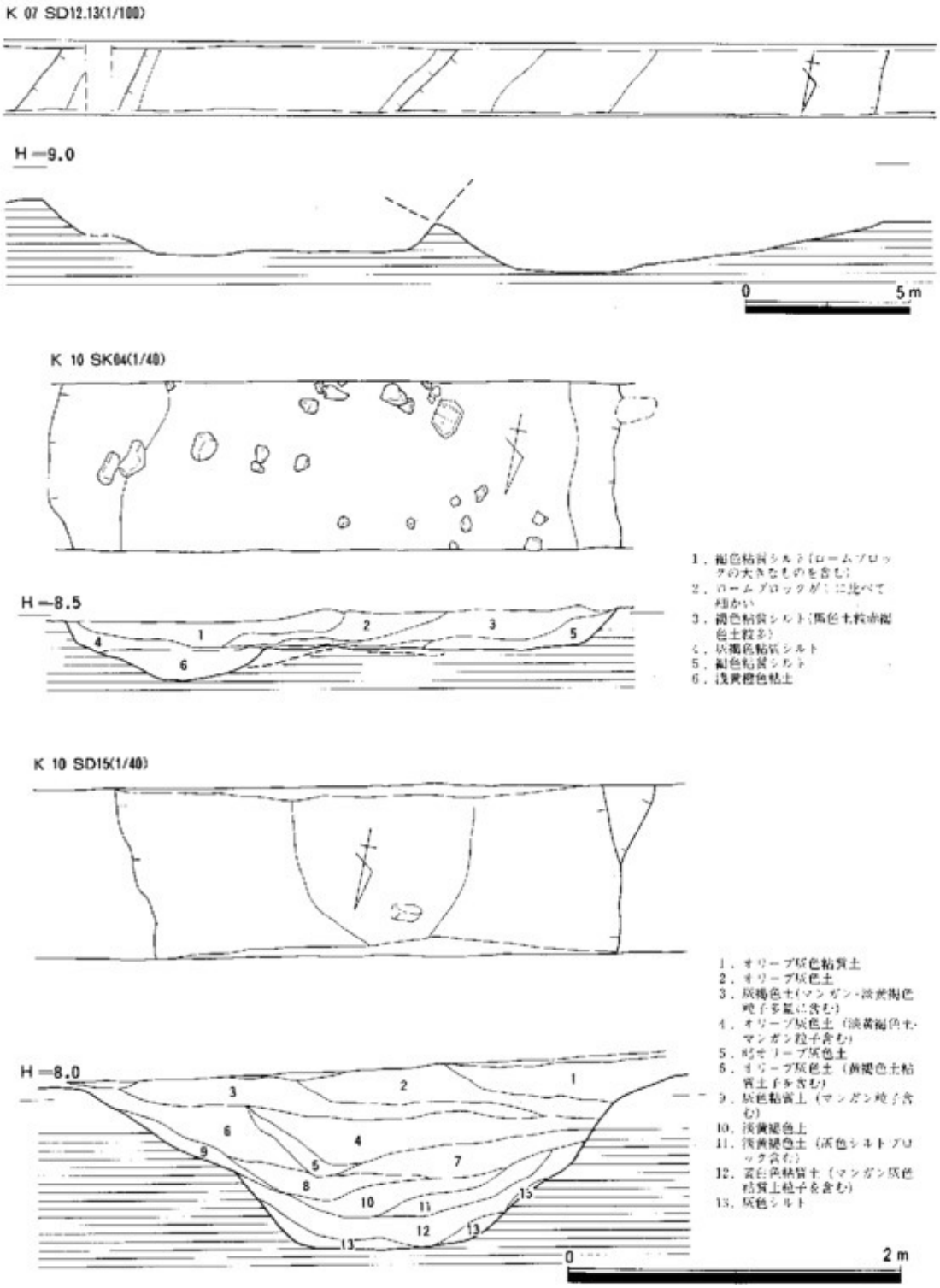


Fig. 27 SD12.13・SK04・SD15 (1/40, 1/100)

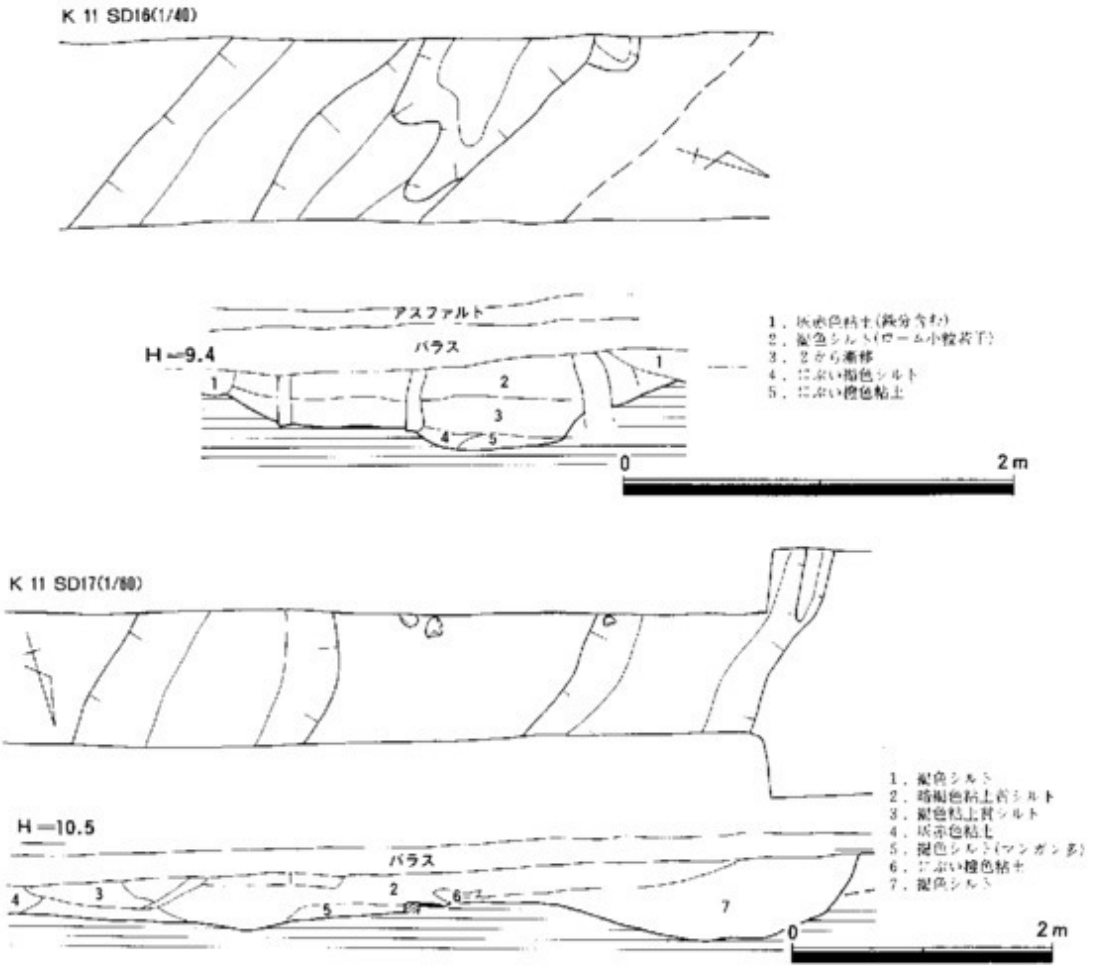


Fig. 28 SD16・SD17 (1/40, 1/60)

を測り北側に若干傾斜する。溝1条を検出した。溝の覆土は赤褐色粘質土で深さ10cm程の浅い溝である。出土遺物はほとんどなく時期は不明である。

K 13 (Fig.42, Pl.11)　調査区は現状で東に大きく傾斜している。遺構面の標高は西側で11.6m，東側で9.2mを測る。溝が検出された。東側では遺構面まで1.5mを超え，また溝を掘ると湧水し危険なため15m程検出したのみである。深さは東側で50cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。出土遺物はほとんどない。調査区に南接する土界との関係も考えられるであろう。

K 22　有田台地の東裾にあたる。調査区内に既設管が入っており土層観察にとどめる。現地表面下0.7m程で暗褐色粘質土になり厚みは20cmを測る。その下に5cm程の薄い明黄褐色粘土が堆積し，以下粗砂層から礫層になる。暗褐色粘質土は包含層であると思われるが当区では遺物の出土はみられなかった。

出土遺物

K03SD07 (Fig.29　52～53, Pl.15)　52は瓦質の火舎口縁部である。外面に二条の三角突帯をめぐらし，その間にU字形の文様を配するものである。口縁部端面はおよそ平坦であり幅約1㎝を測る。内面は横ハケである。53は瓦質足鍋の脚部である。脚部は指おさえ調整される。鍋部の体部内面は横ハケ，底部外面には格子タタキが施される。

K06SK02 (Fig.29　54～56, Pl.15)　54・55は瓦器椀である。54は口縁部内面が黒変する。また内面はヨコ方向のヘラミガキ調整が施される。55は底部を欠失するもので内面は上部が横，下部が縦方向のミガキを施す。内面黒灰色を呈す。56は土師皿である。底部外面はヘラ切りで板状圧痕が残る。体部は回転ナデによって成形・調整される。口縁部が肥厚する。

K07SD12 (Fig.29　59～63, Pl.16)　SD12からは土師器甕・鉢・埦・高坏が出土したした。59は口径14.5cm，残存高13cmを測る。体部内面はヘラケズリ，体部外面・口縁部内外面はハケメ調整が施される。口縁外面は他と原体が異なる様でハケが粗い。体部外面は縦ハケの後粗い横ハケを施す。体部中位以下には二次焼成の痕跡が残る。60は口径14.4cm，残存高24cmを測る。底部のみを欠失する。球形の胴部から外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。胴部外面は縦ハケ，内面は縦位のヘラケズリ調整を施す。口縁内面は横位のハケメ，外面は縦位のハケメ調整である。胎土には径1～2㎜の石英砂を含み，淡褐色を呈す。61は片口鉢である。丸みをもつ胴部から口縁部が“く”字状に緩やかに外反する。底部は若干上げ底気味の平底をなす。胴部外面下部は横ハケ，中位は斜方向のハケメ調整を行なう。胴部外面は横位のヘラケズリである。胎土に径1㎜程の石英砂粒を含み，やや白っぽい褐色を呈す。62は口径13.8cm，器高5.1cmを測る埦である。丸みをもった胴部よりやや内傾気味に立ちあがる。外面斜方向のハケメ，内面はナデ調整を行う。石英の微砂粒と雲母を含む。焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈する。64は高坏である。坏部上半を欠失する。裾部径12.4cm，残存高12cmを測る。筒部は下部が内側にくぼみ中ぶくらみするいわいるエンタシス状を呈す。坏部は屈曲部より斜上方へあまり開かず伸びるものである。坏部内面は横位のヘラミガキ，外面はヘラミガキの後のハケメが残る。筒部内面は横位のヘラケズリ，外面は横位のヘラミガキ，裾部は外面に縦位に暗文風に調整が行なわれる。胎土は精良で焼成も良好である。明橙色を呈す。

K07SD13 (Fig.29　57～58, Pl.16)　57は袋状口縁壺である。口縁部外側の稜は不明瞭である。外湾する頸部より丸みをもった胴部につながっていく。内面は指オサエ，外面は縦位のハケメ調整を行う。胎土に径1㎜程の石英砂粒を多く混じえる。焼成はややあまく，白っぽい淡赤褐色を呈す。58は器台である。上径10.4cm，底径12.1cm，器高18.4cmを測る。全体に厚みをもつ。外面は縦位のハケメを行い下半はナデ消している。内面は縦位のナデによって器形を整えている。石英砂粒を多く含む。焼成は良好で暗褐色を呈する。

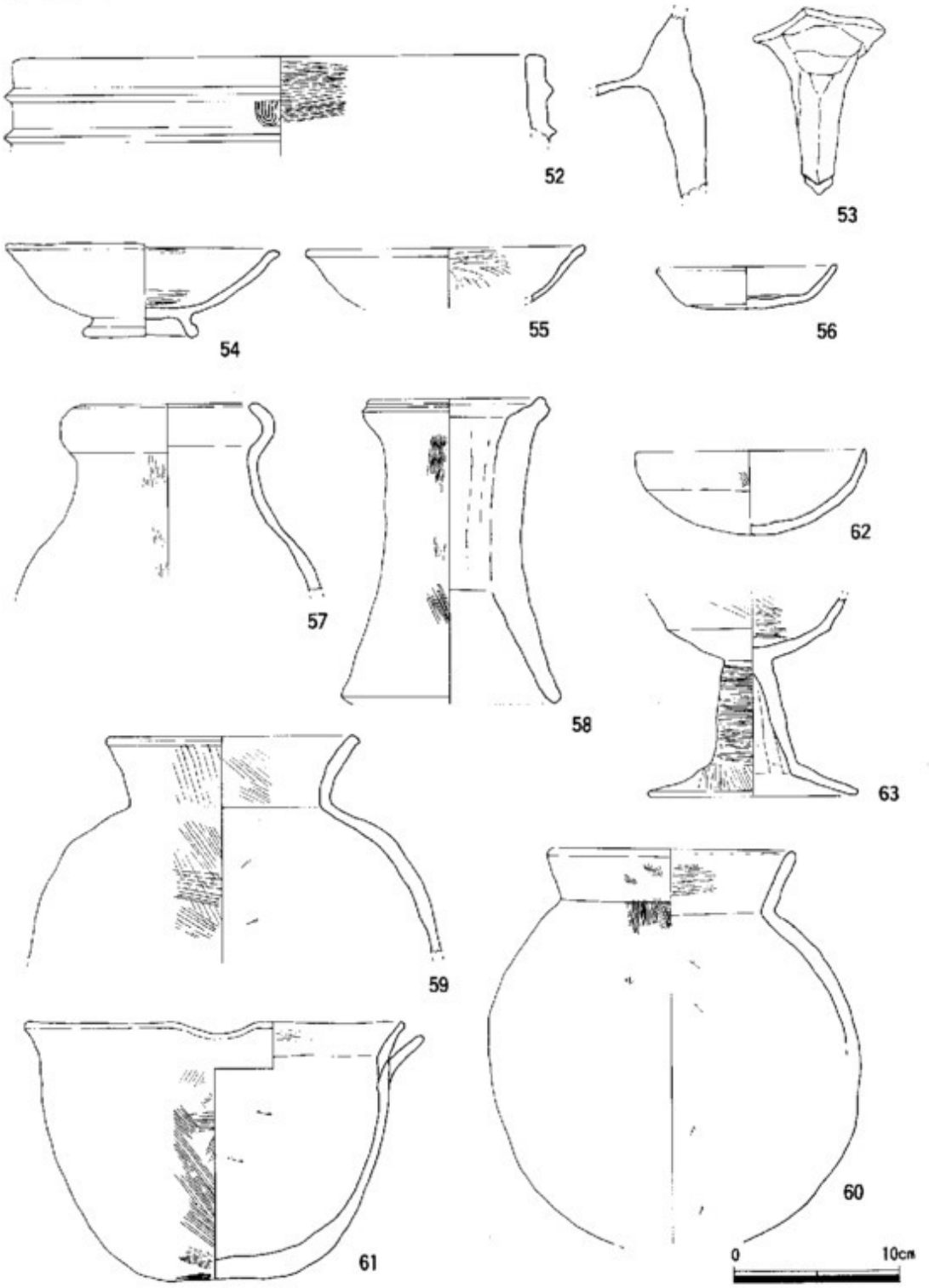


Fig. 29　K区出土遺物(1)（1/4）

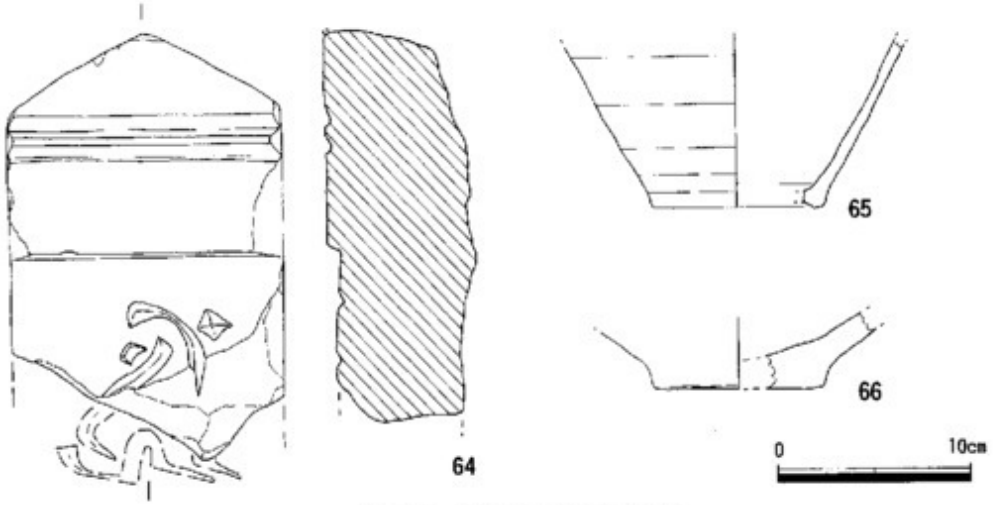


Fig. 30　K区出土遺物(2) (1/4)

K10SK04 (Fig.30　64－65, Pl.16)　64は砂岩製の板碑破片である。残存長21cm, 厚さ8cm弱を測る。梵字が陰刻されており, キリーク（阿弥陀如来）と思われる。この小形板碑は遺構の項でも述べた様に15世紀代に盛行したものの1種である。65は陶器瓶の胴部片である。上半部及び底部は欠失している。復原底部径は9cmを測る。胎土には, 径1mm程の砂粒を若干含む。色調は内面淡褐色, 外面やや緑味のある灰色を呈す。

K11SD17 (Fig.30　66)　66は弥生土器, 壺形土器の底部破片である。底は平底を呈す。復原底径8.6cmを測る。胎土には径1～3mmの石英砂粒を多く含み, 金雲母も多い。焼成は良好であり, 色調は淡褐色を呈す。弥生時代後期前半に属するものであろう。

7) L区の調査

概要　L区は台地南西部に設定された調査区である。現在まで4次にわたって調査が行われている。今回はL区の北半部で118次調査が行われた。全体に遺構は散慢である。溝・土坑・ピットを検出した。L05（Fig.42）は地表下60cmの明褐色ロームで遺構を検出した。上部に暗褐色土が20～30cm程堆積している。L08（Fig.42）は地表下60cm程で遺構を検出する。標高7.5mを測り，ほぼ平坦である。遺構面直上に10cm程の暗褐色土が堆積している。

Fig. 31　L区調査地点配置図（1/2500）

8) M区の調査

概要　M区は有田台地の南端に設定される。現在まで2ヶ所の調査を数える。当区では，西福岡高校地内で，金海式甕棺墓より，細形銅戈が出土している。

M02（Fig.42）は西福岡高校に東接している地表下80cmの黄褐色粘土面で遺構を検出している。上層は全て客土である。土坑・ピットが検出されている。標高7mを測る。その他の調査区では遺構は検出されていない。全体に削平が著しく60～80cm程の盛土がなされている。

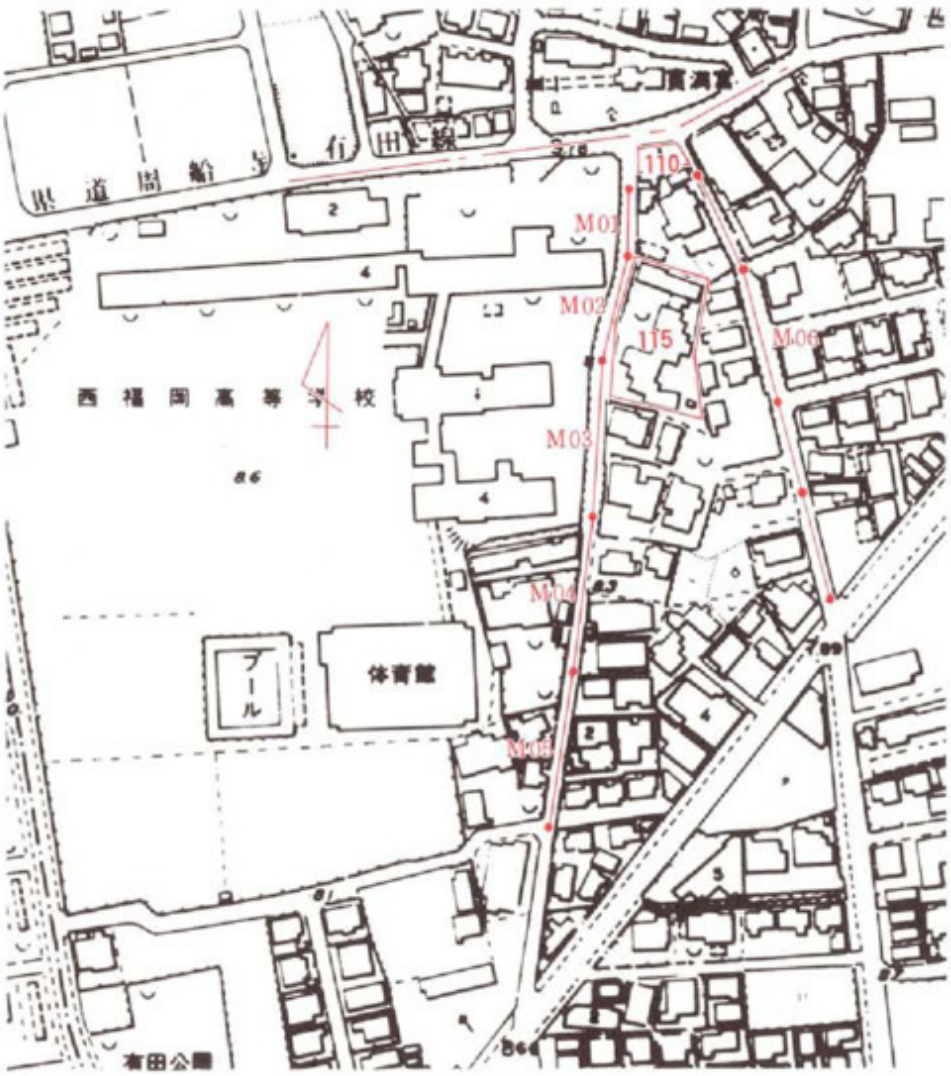


Fig. 32　M区調査地点配置図（1/2500）

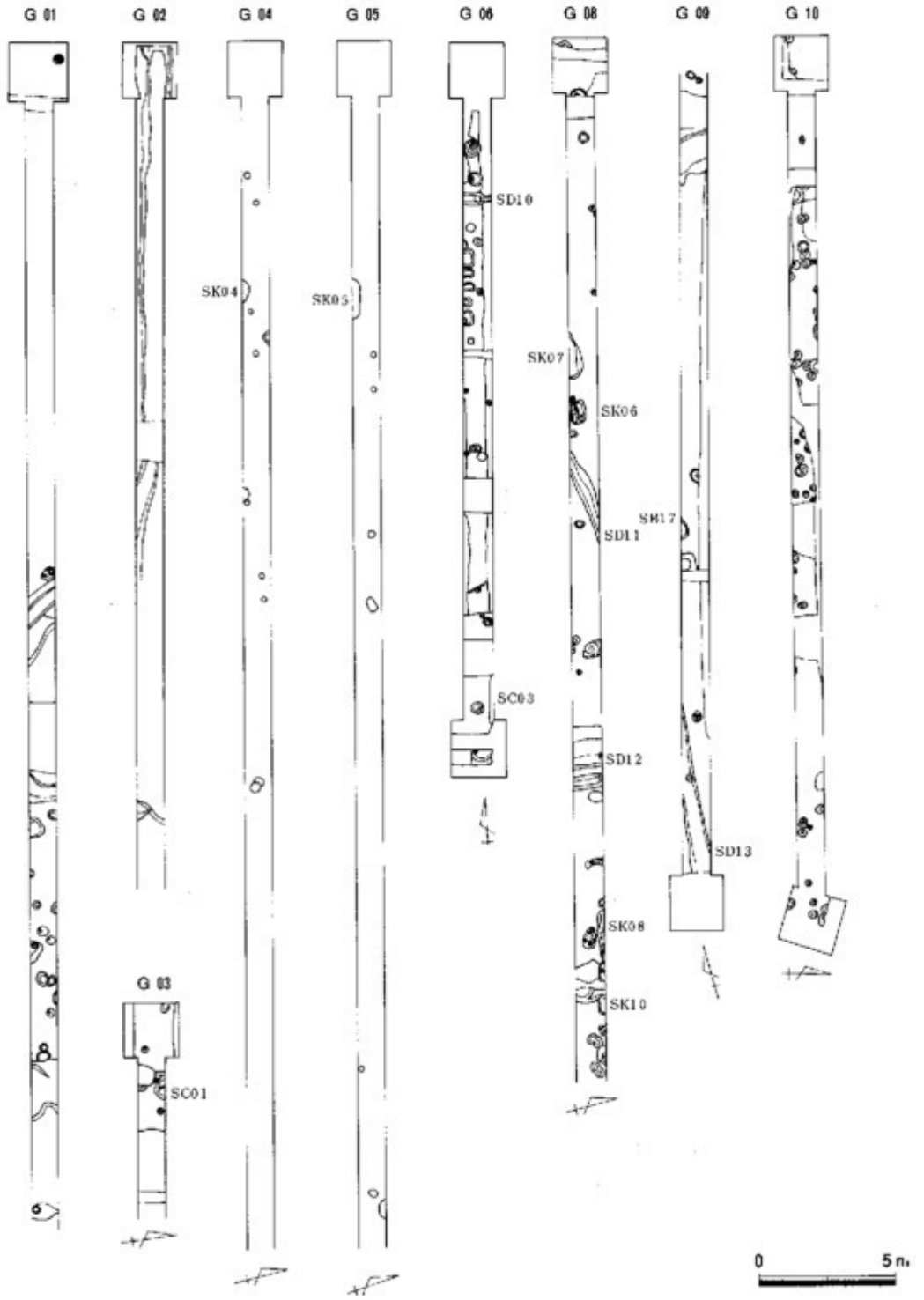


Fig. 33 全体図(1) (1/250)

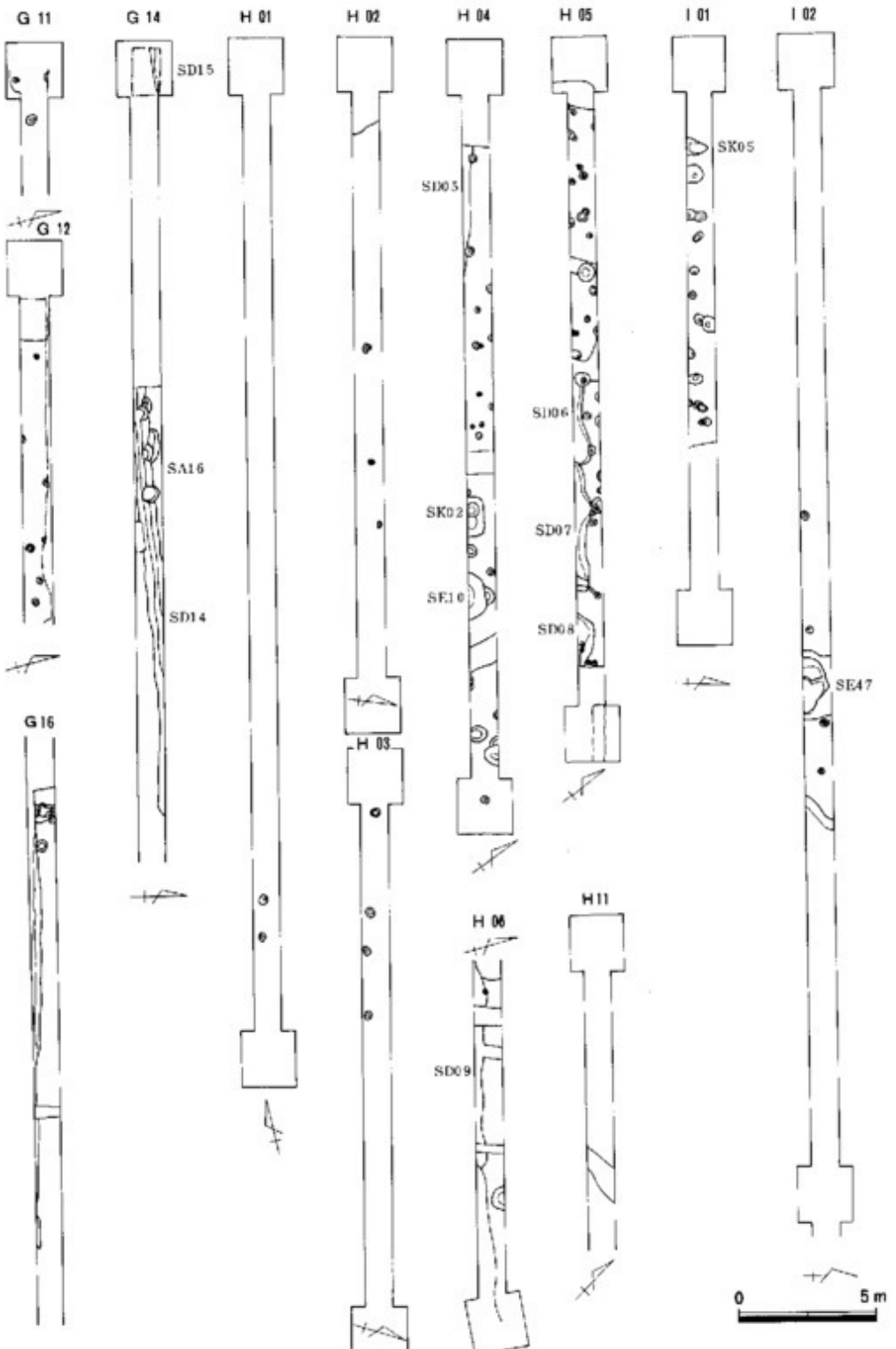


Fig. 34 全体図(2) (1/250)

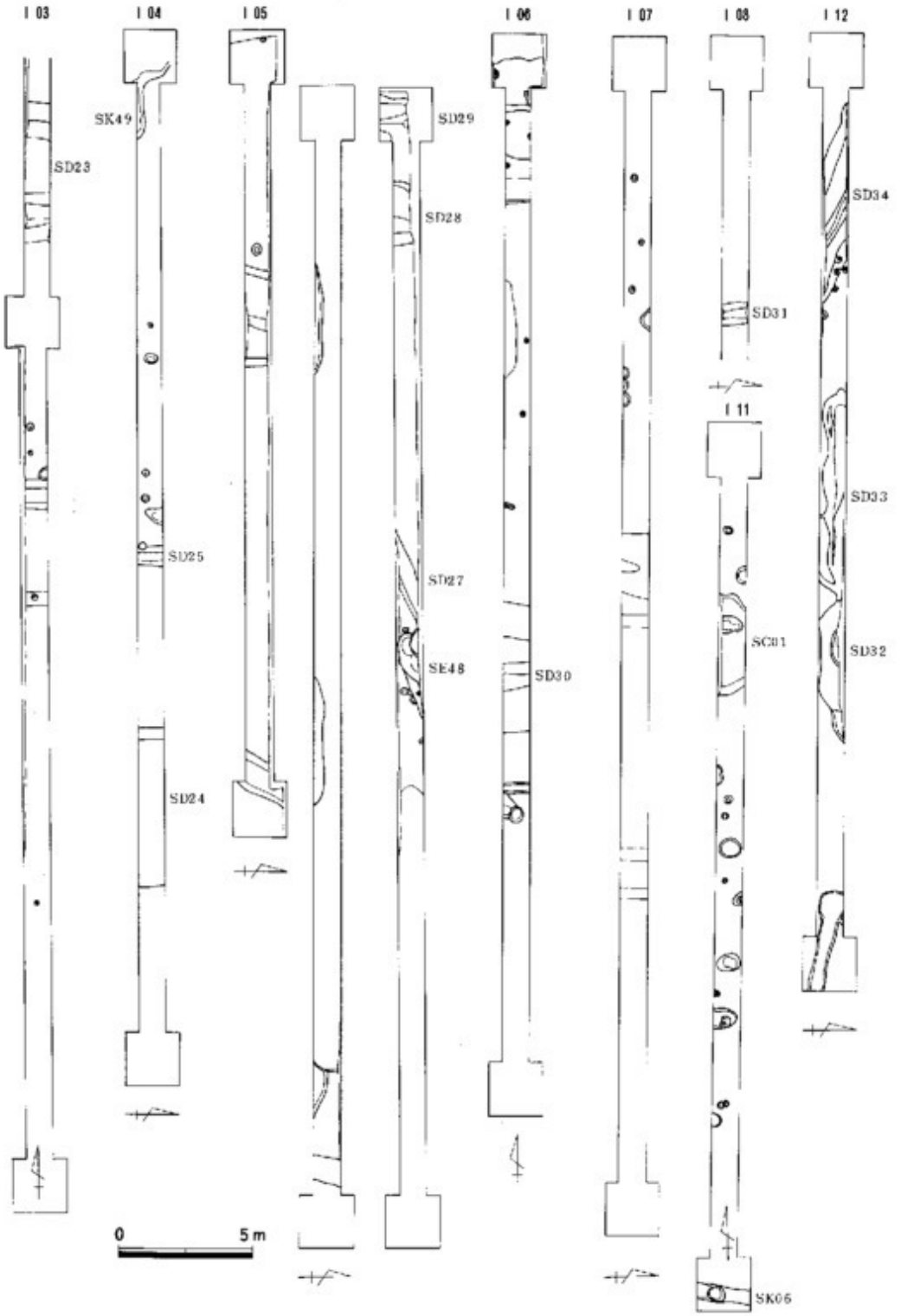


Fig. 35 全体図(3) (1/250)

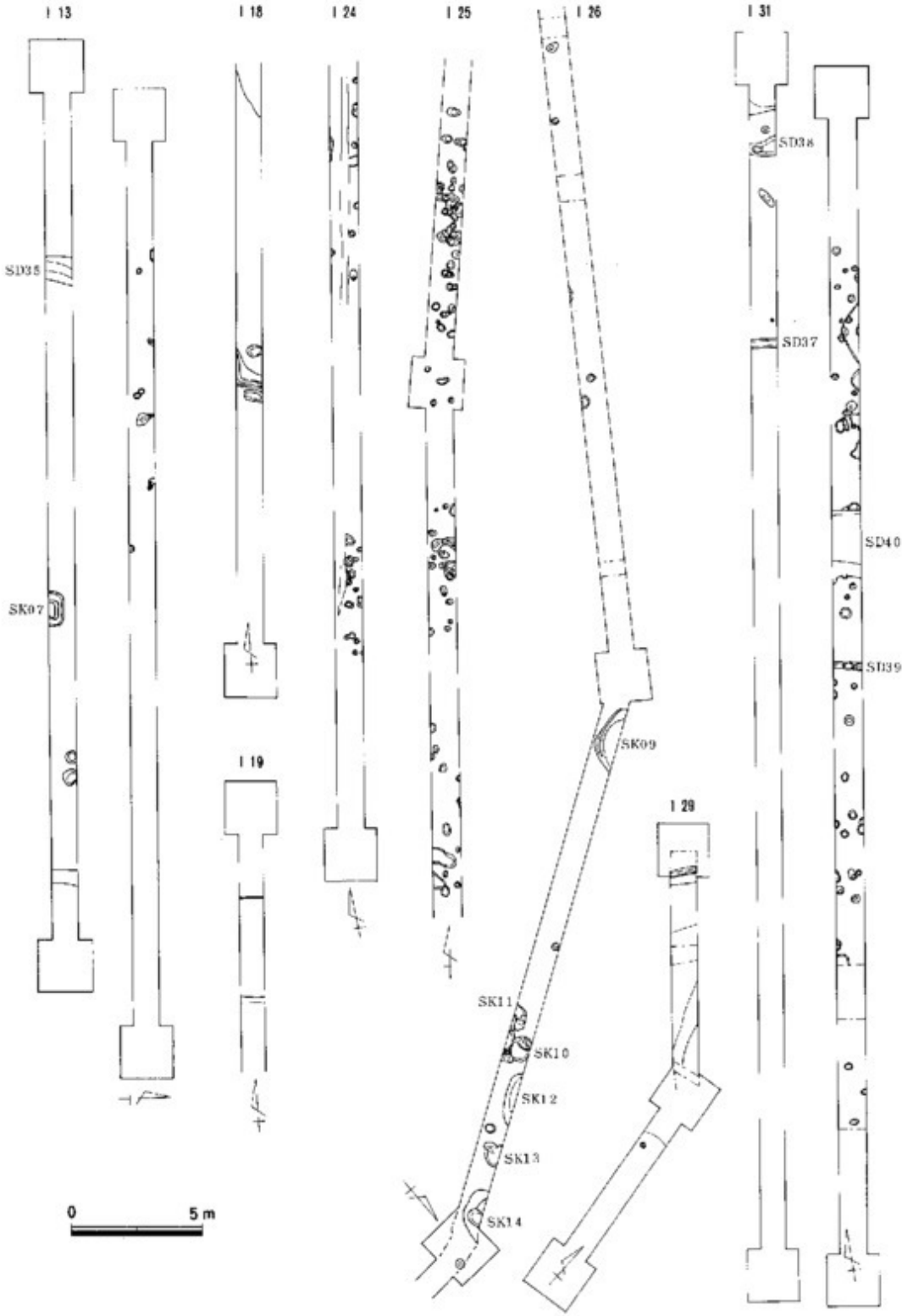


Fig. 36 全体図(4) (1/250)

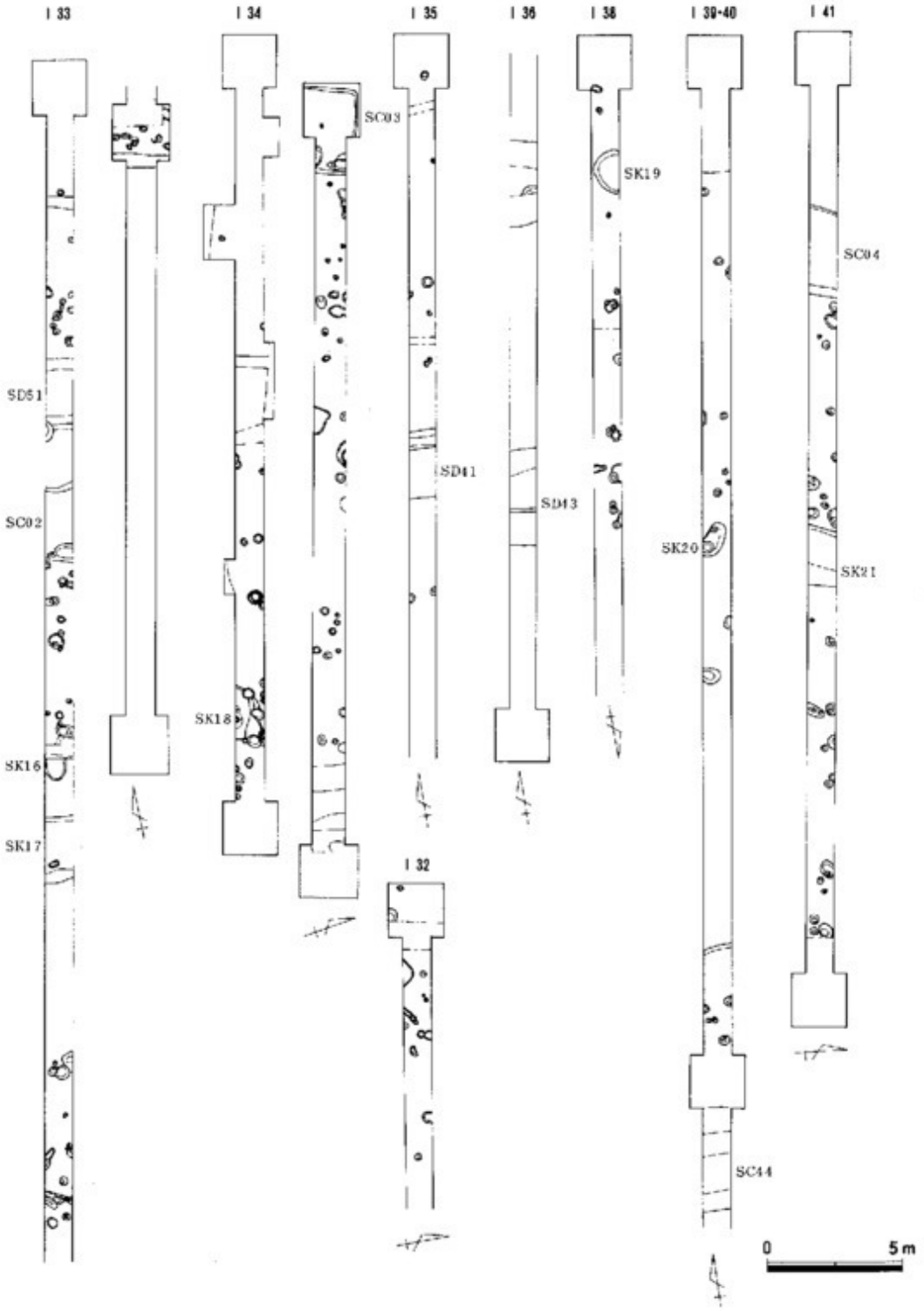


Fig. 37　全体図(5) (1/250)

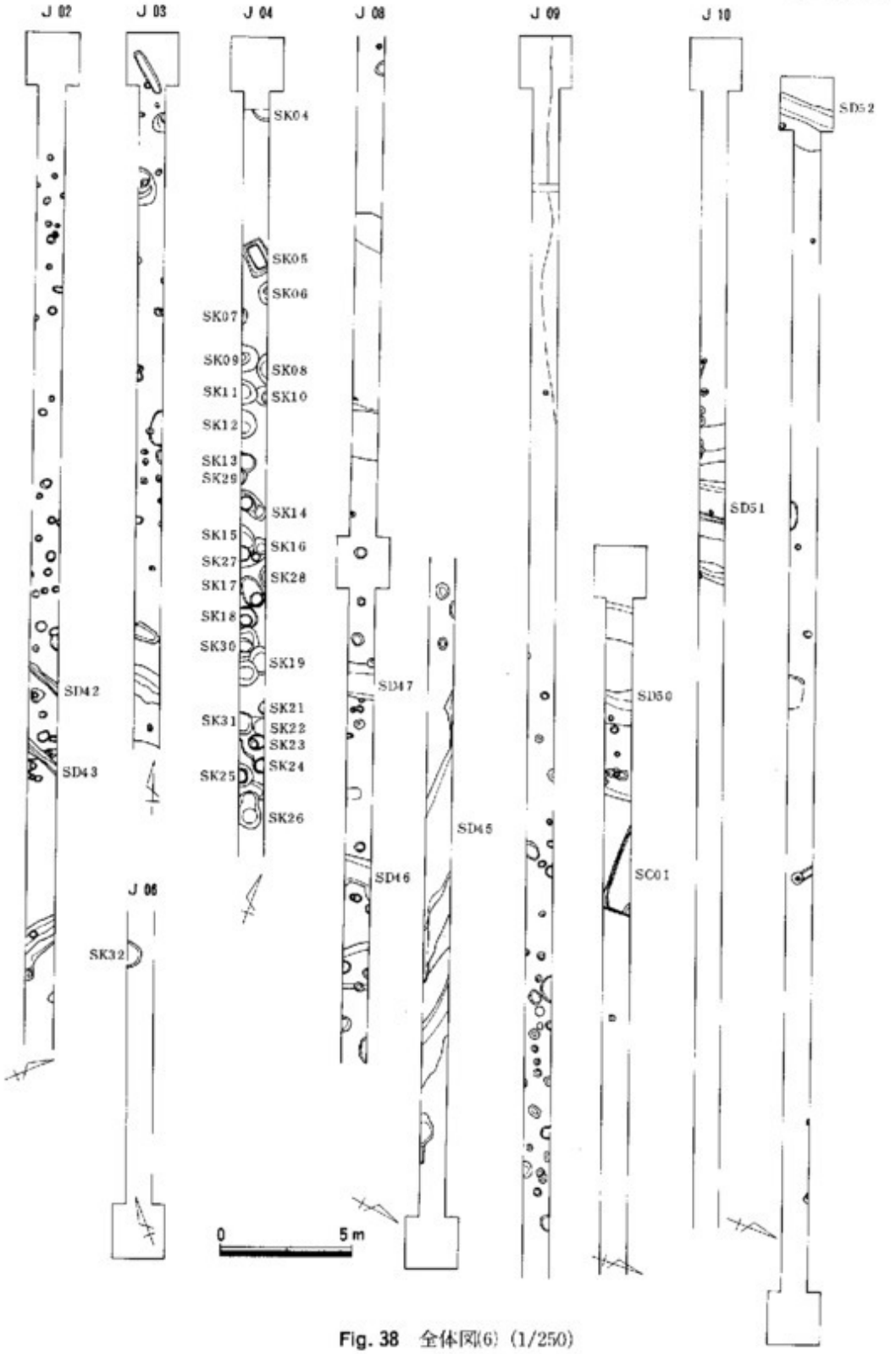


Fig. 38 全体図(6) (1/250)

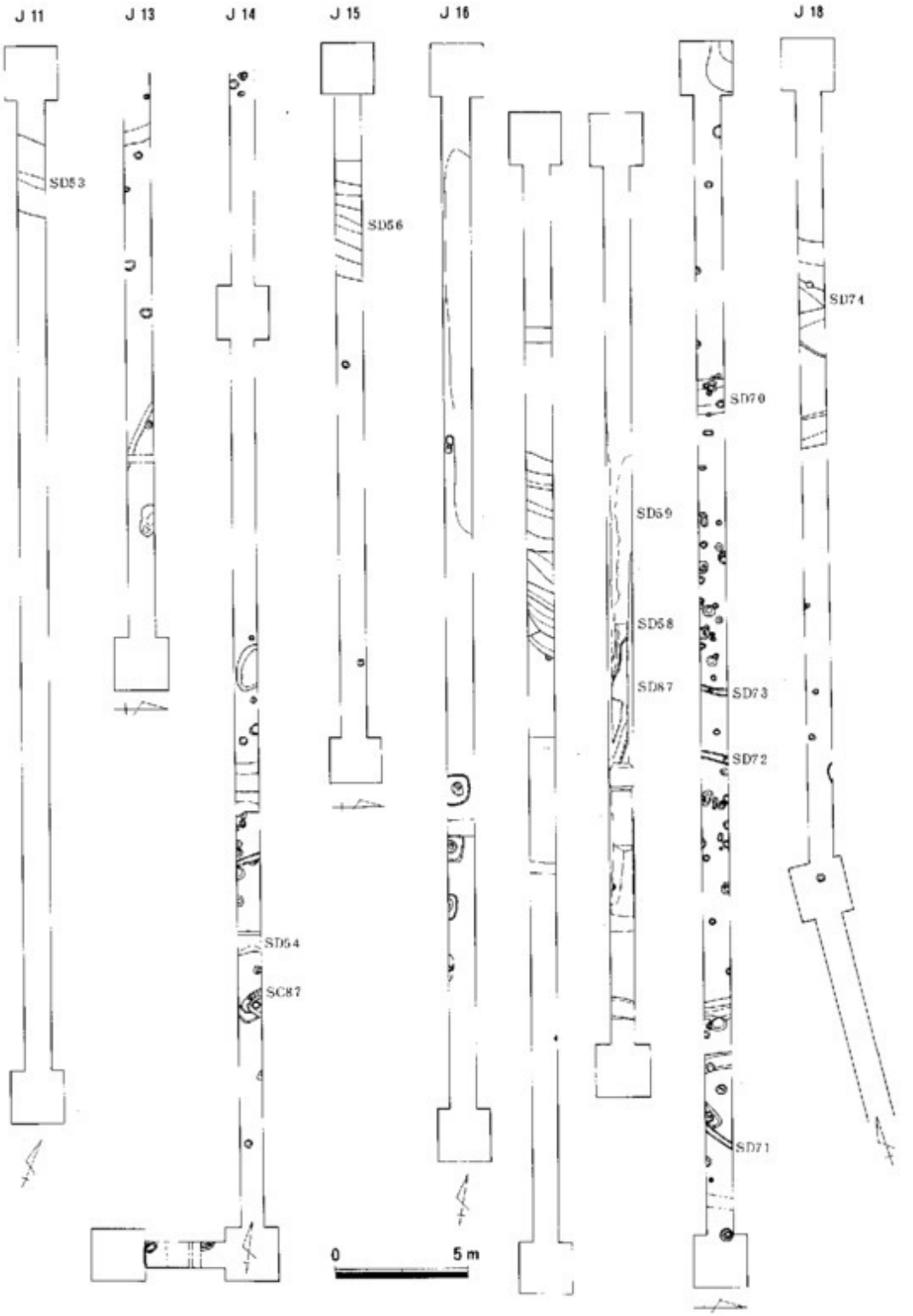


Fig. 39　全体図(7) (1/250)

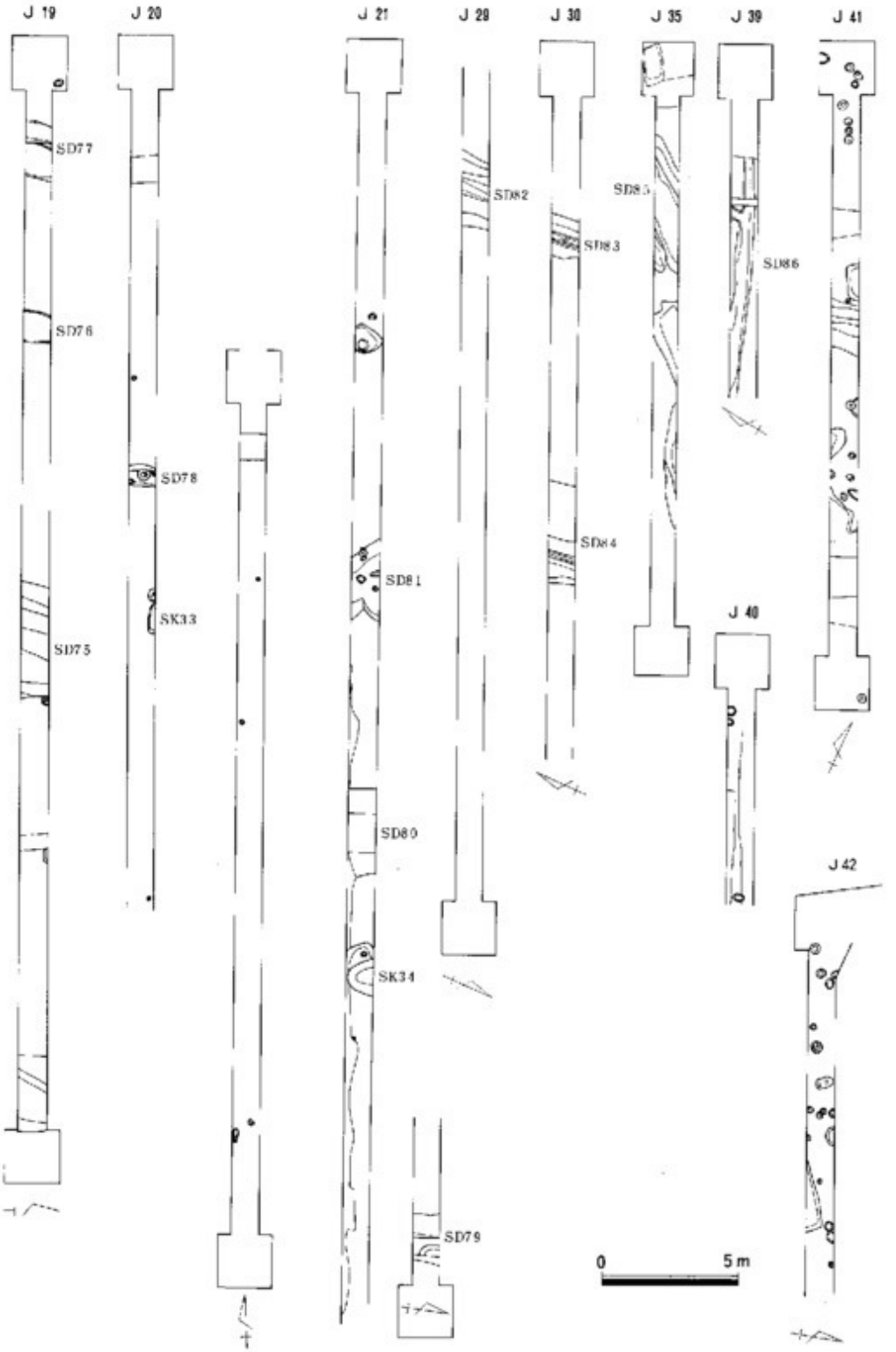


Fig. 40 全体図(8) (1/250)

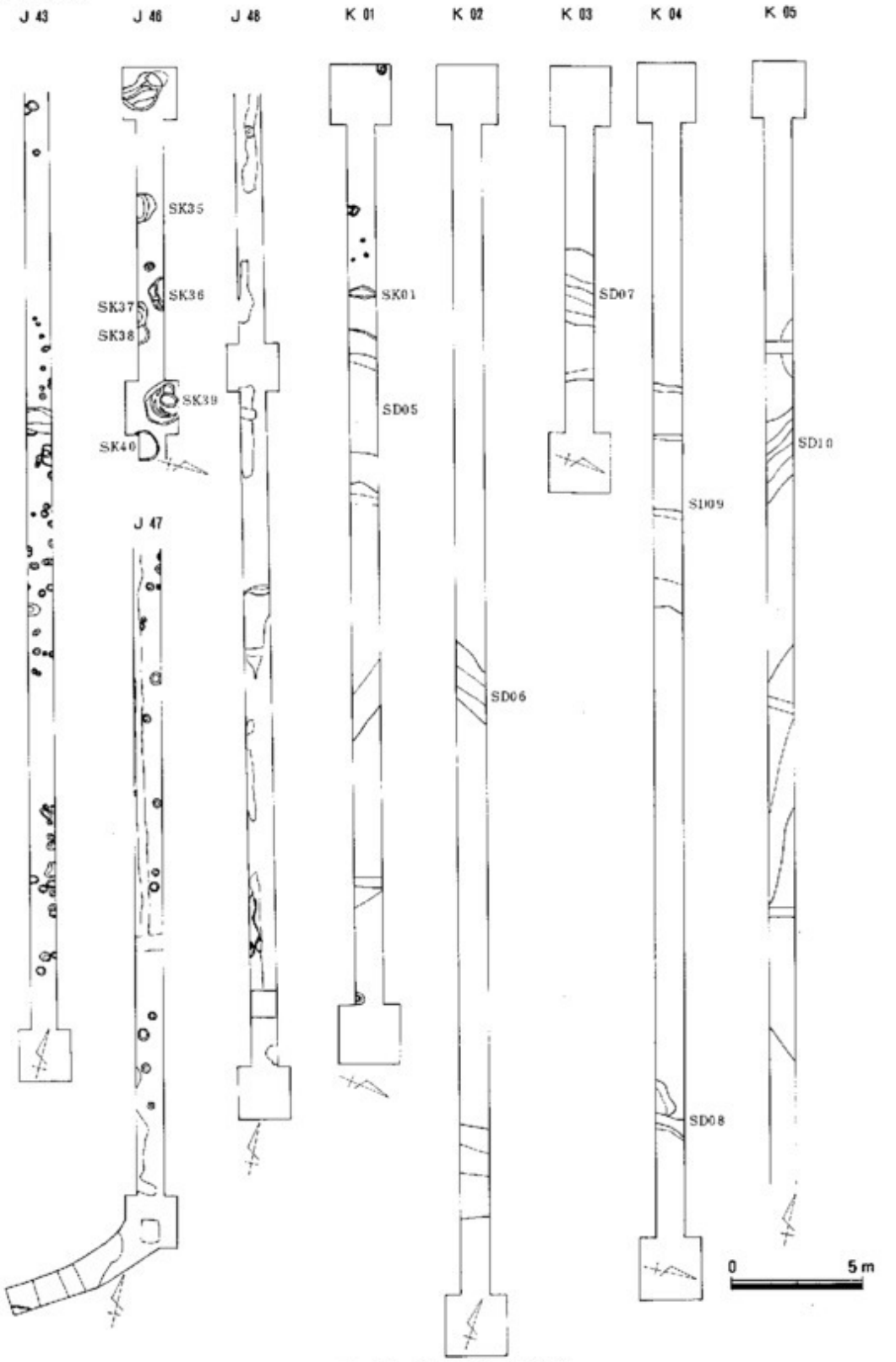


Fig. 41　全体図(9) (1/250)

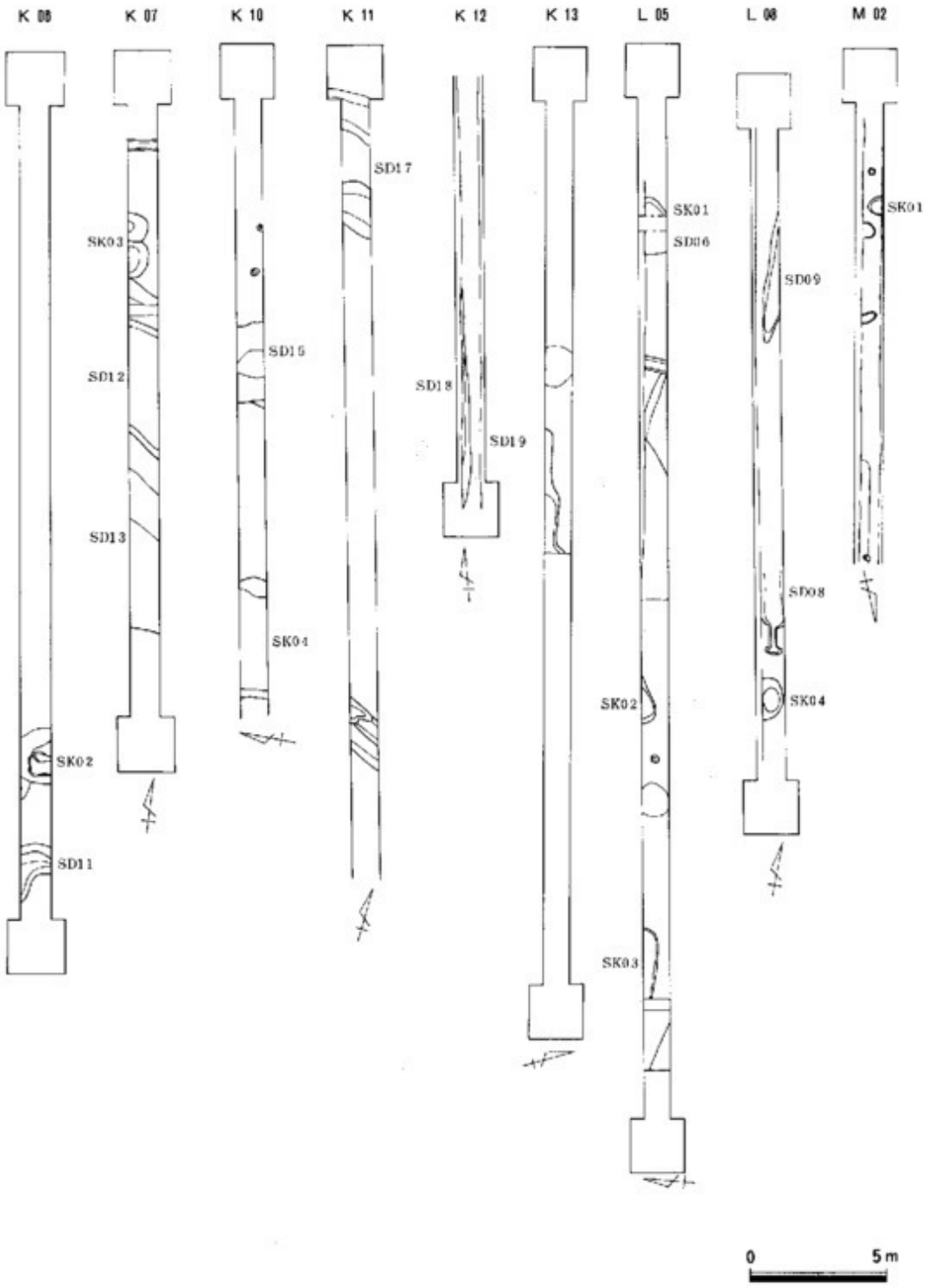


Fig. 42　全体図⑩ (1/250)

2　原遺跡群

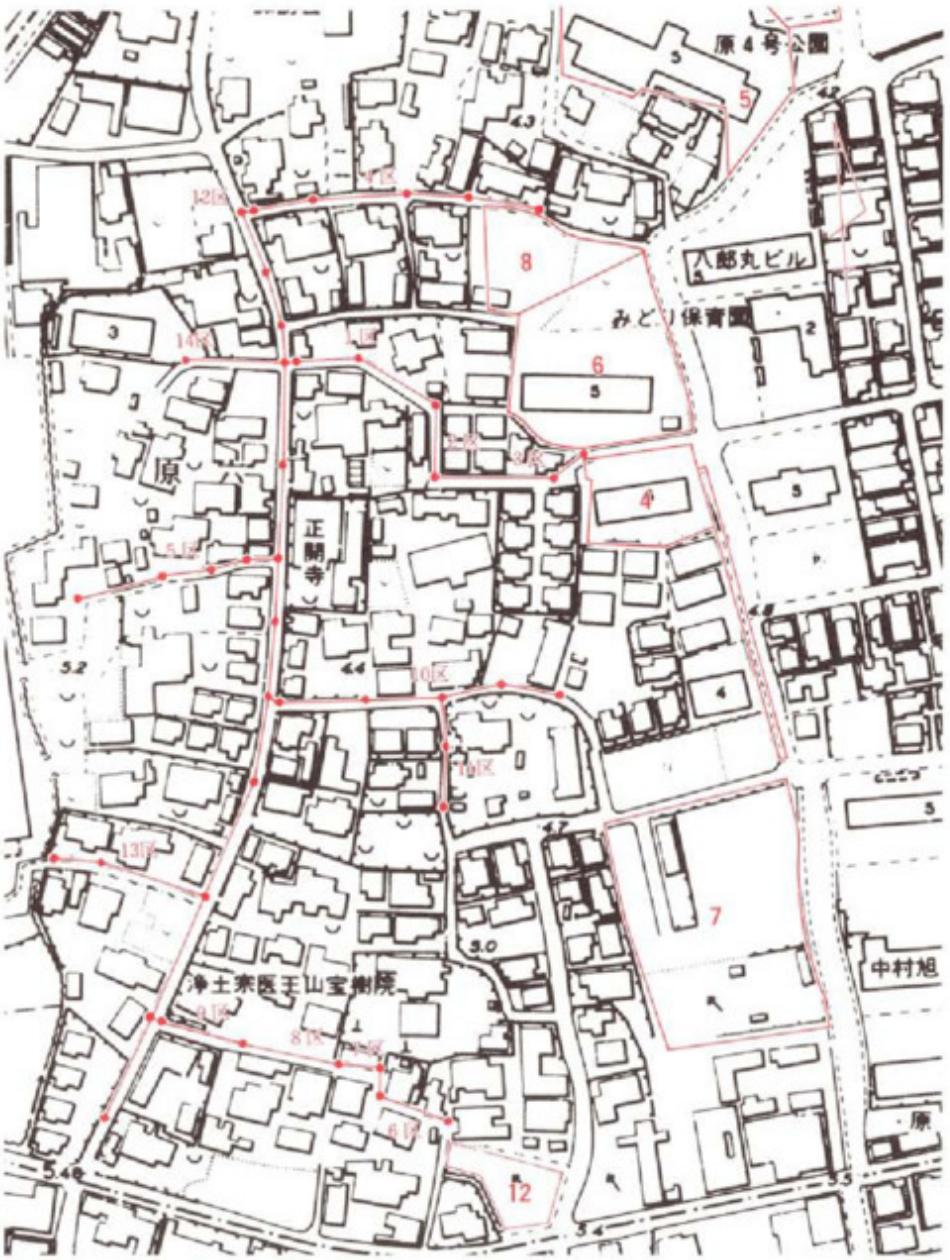


Fig. 43　原地区元年度分調査地点配置図（1/2500）

概要　原遺跡群は有田遺跡群の東側に位置し，室見川支流金屑川と稲塚川にはさまれた低位段丘上に位置している。標高5～6m程の南北に長い微高地である。現在まで原遺跡群内では15次にわたって調査がおこなわれており縄文時代～近世の遺構が検出されている。9・10次調査では従来範囲外と考えられた地点で遺構が検出されており遺跡の範囲が西側及び南側に拡大することが判明する。現在までの調査は，台地の周辺部を中心とした地点が中心であるため全容はいまだ不明確であるが諏訪宮の北側，東側では弥生時代～古墳時代の集落・墓地が検出されている。遺跡群の南側では中世の屋敷地を形成する溝が検出されており徐々に全体像が把握されてきている。

下水道工事に伴う調査は昭和63年度～平成2年度にわたって行った。昭和63年度は台地東側を中心に調査を行ったが遺構は確認されなかった。平成元年～2年度においては，台地の中央部を中心として諏訪宮の南側で調査を行った(Fig.43)。遺構面は，地表下50cm程の黄褐色シルトであるが，上部の包含層は削平をうけている場合が多い。ガス管・水道管の埋設など削平が著しく遺構の確認は散漫であったが，3ヶ所で遺構を確認した。

検出遺構

3区（Fig.44，PL.12）　3区は正覚寺の北側に東西にのびる調査区である。東隣には4次調査・6次調査地点がある。6次調査においては中世を中心とした遺構が調査区西側を中心に検出され，関連の遺構が予想された。地表下0.6mで遺構を検出した。遺構面は黄褐色シルトでその上に30cm程の暗褐色包含層が堆積している。検出遺構はピットのみで遺物は細片のみの出土であり，時期不明であるが，6次調査との関連で考えられるものであろう。

4区（Fig.44）　4区は諏訪宮の南端で東西にのびる調査区である。地表下0.7mで遺構を検出する。西側では40cm程の包含層が堆積するが東側では削られ盛土されている。検出面は黄褐色シルトである。溝1条を検出した。深さ10cm程の浅い溝である。鏑蓮弁の青磁碗口縁部破片が出土する。

7区（Fig.44，Pl.12）　台地の南部に位置する調査区である。周辺には12次調査地点があり，関連遺構の存在も予想された。遺構は地表下40～50cmで検出された。遺構面は黄褐色シルトである。アスファルト・客土の下に30cm程の暗褐色土の包含層が堆積するが遺物はほとんど出土しなかった。遺構面は標高5.5mを測り調査区全体に平坦である。遺構はピット及び土坑が検出された。ピットからは土器細片が出土する。SK01はコーナーの部分が検出された。深さ5cm程の底面が平坦なものである。出土遺物は遺構に伴うものは細片のみであるが，客土中より瓦器碗が出土した。

出土遺物

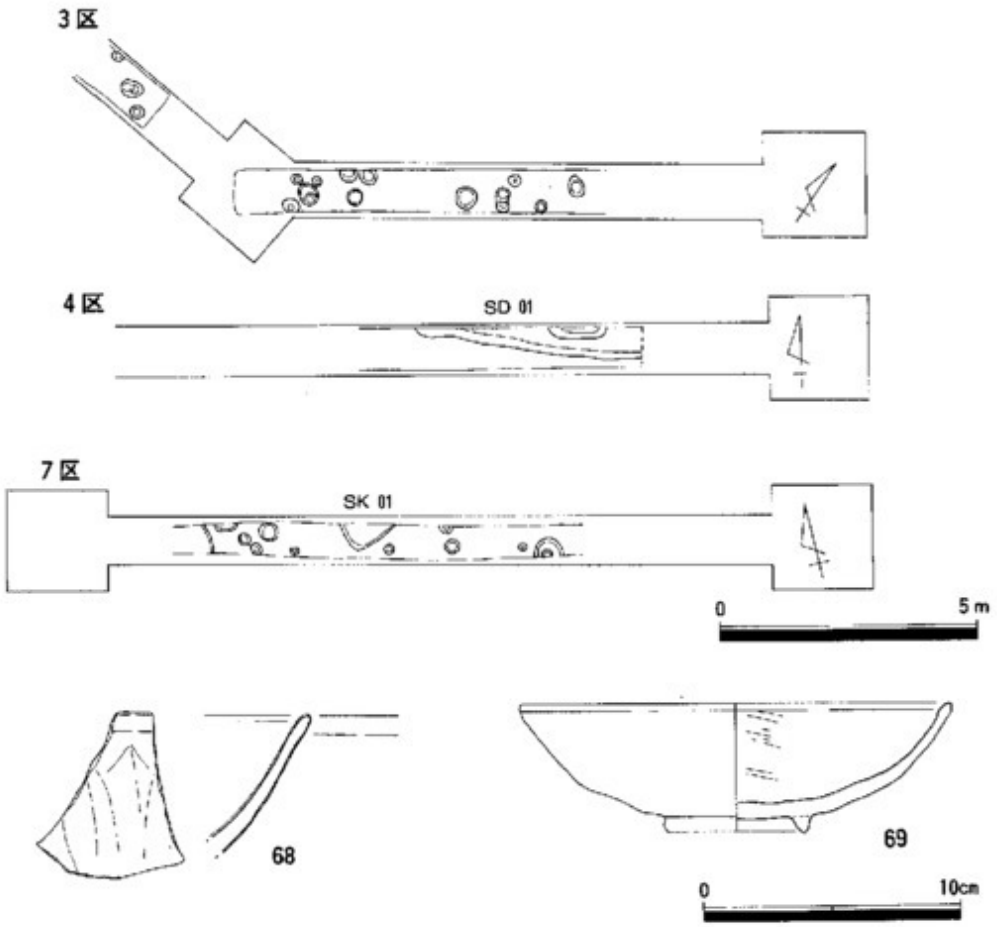


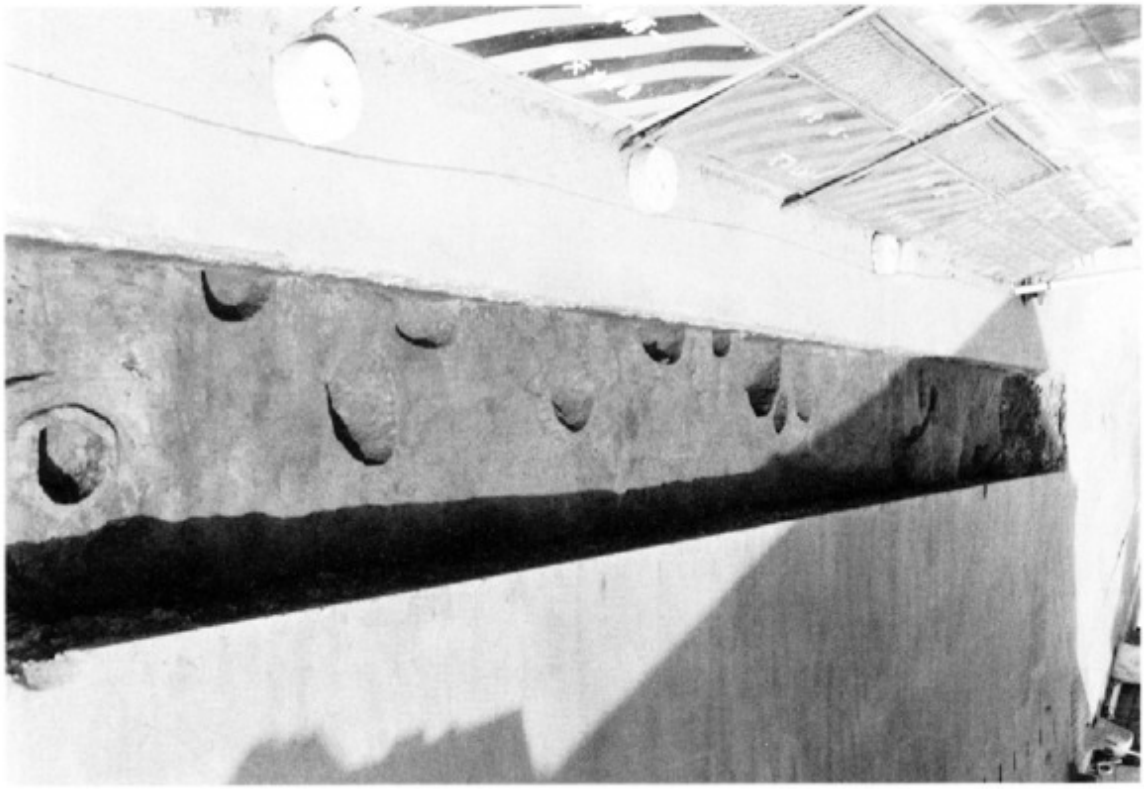
Fig. 44　全体図及び出土遺物 (1/150, 1/3)

4区 SD01 (Fig.44　67, Pl.15)　体部外面に鎬蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。端部は丸くおさめられ外方にのびるものである。胎土は密で，色調は白っぽい緑色を呈する。

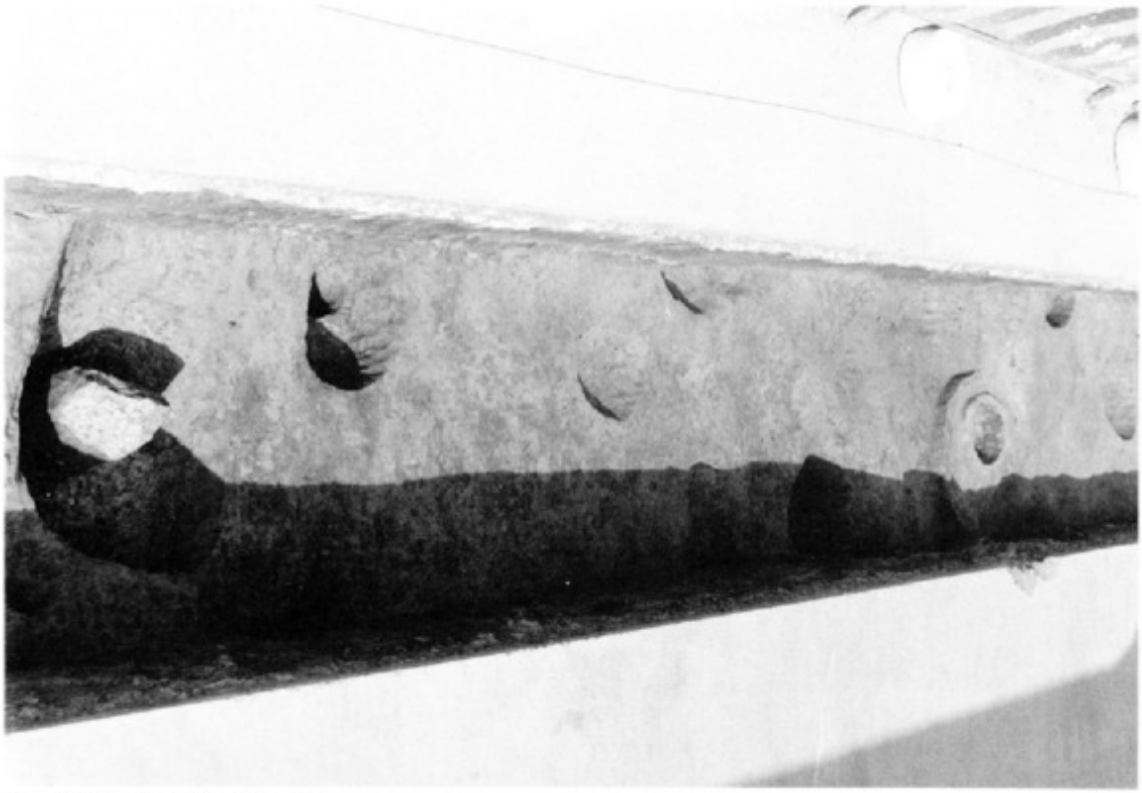
7区 (Fig.44　68, Pl.15)　客土中より出土した瓦器碗である。全体の2/3が残存する。復原口径16.8cm，器高5cm，底径5cmを測る。胴部中位に弱い稜線をもち，内湾気味に立ちあがり，口端部を丸くおさめるものである。高台は貼り付けで，短くまとめている。内面は粗い横位のヘラミガキを施す。口縁内面は淡黒色，内底面・外面は灰味がかった淡茶色を呈す。

図　版

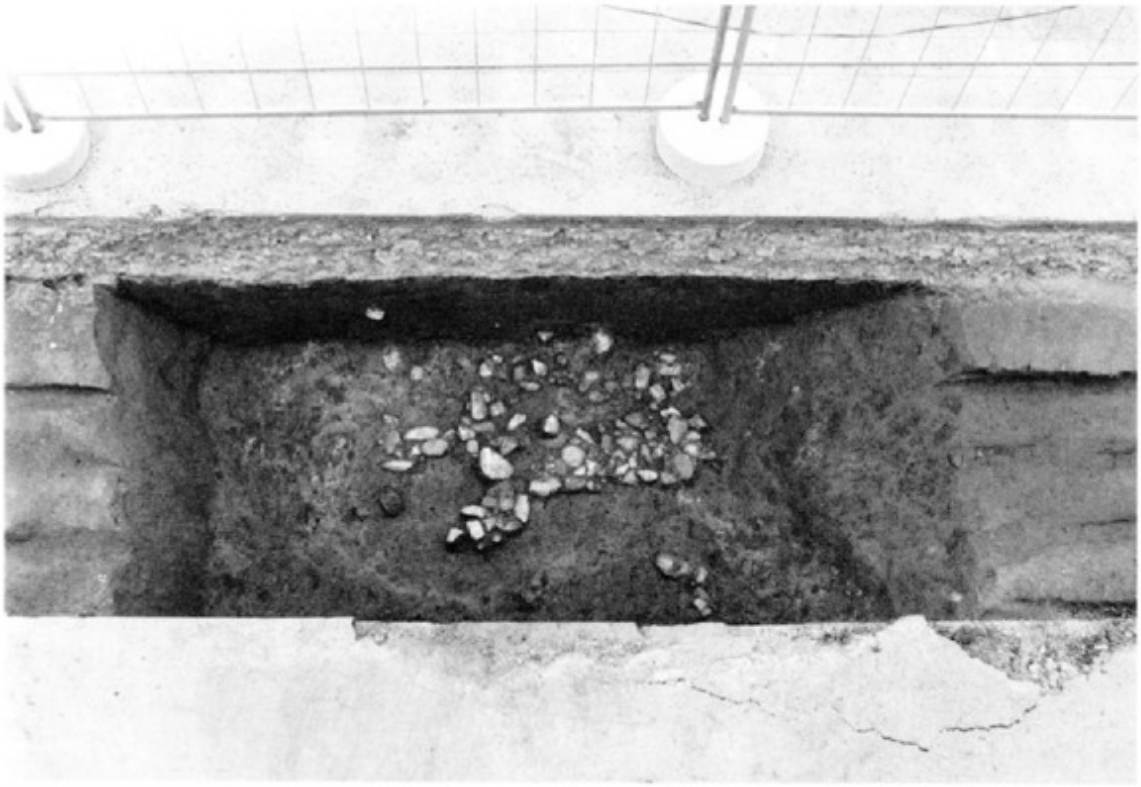
(1)　G10全景（西より）



(2)　H05東半（西より）



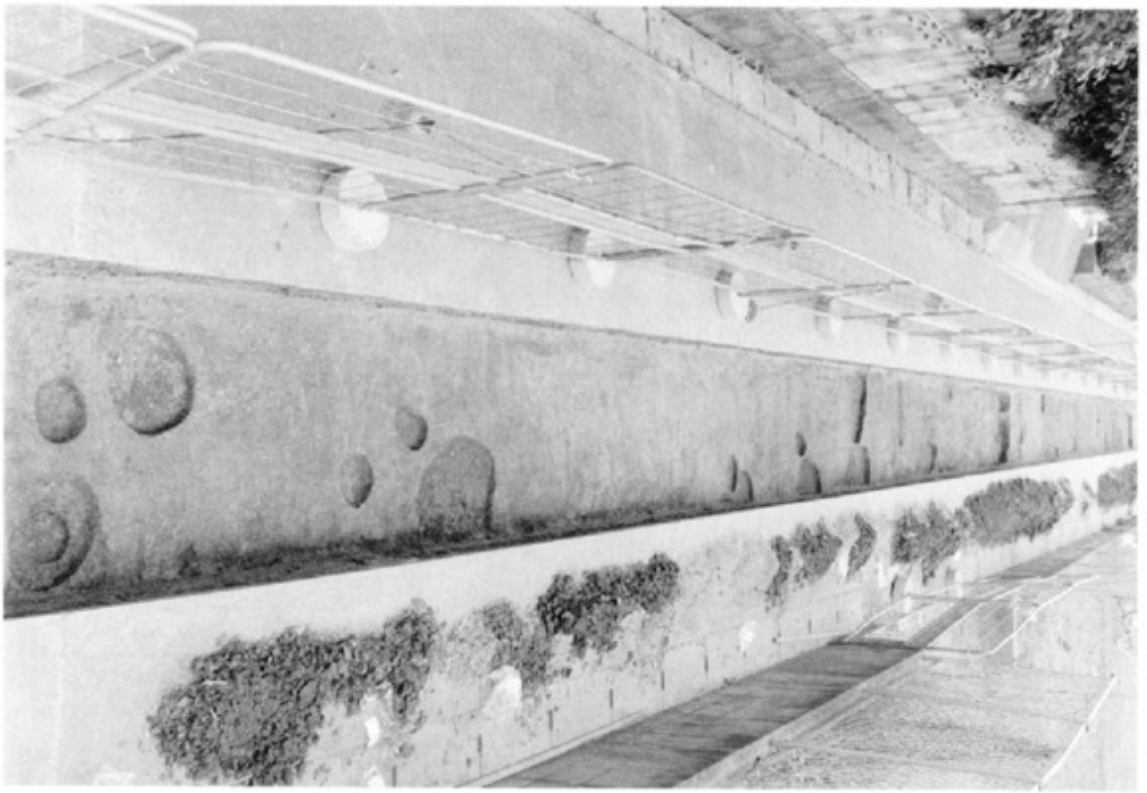
(1) H05 SC01 (西より)



(2) I 35 SD41 (西より)

(1)　I 36　SD42東側土層（西より）

(2)　I 36　SD43（北より）



(1)　I 41全景（東より）

(2)　J 29　S D82（北より）

(1)　J 30　S D83（東より）

(2)　J 30　S D83西側土層（東より）

(1)　J 30　S D84（北より）

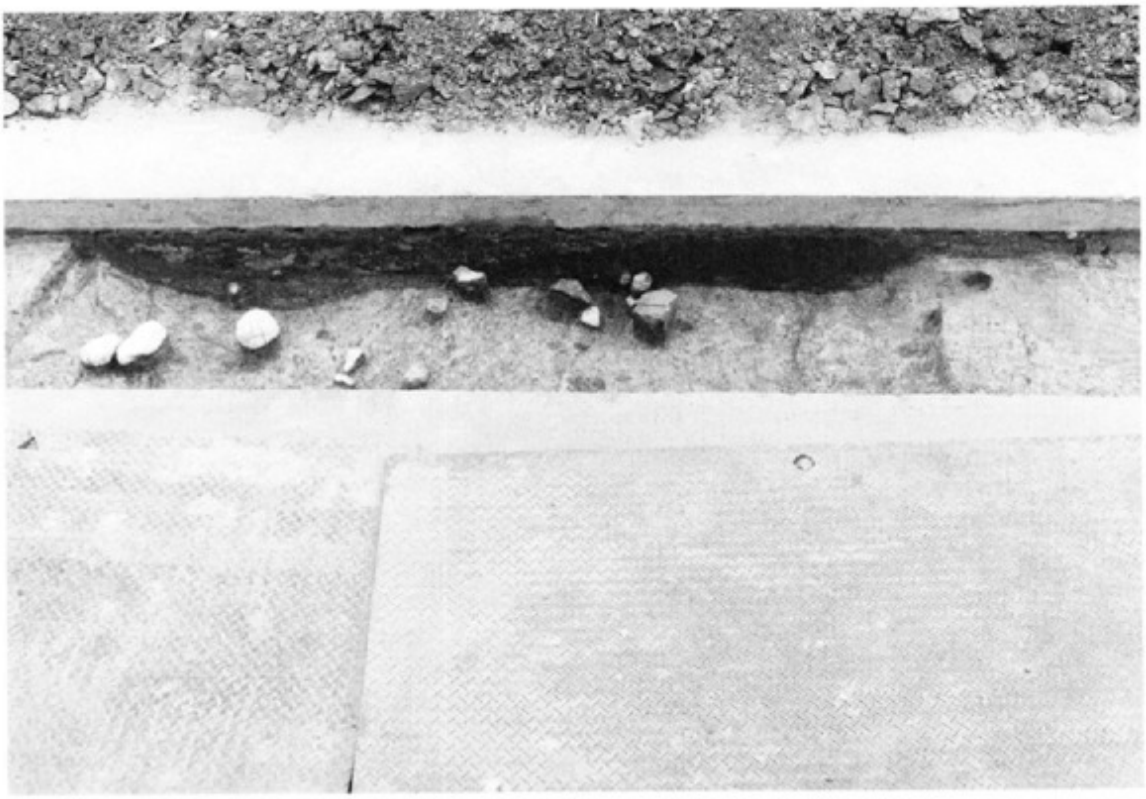
(2)　J 35全景（西より）

(1)　J 43全景（北より）

(2)　J 46全景（東より）

(1) J 46 SK39（南より）

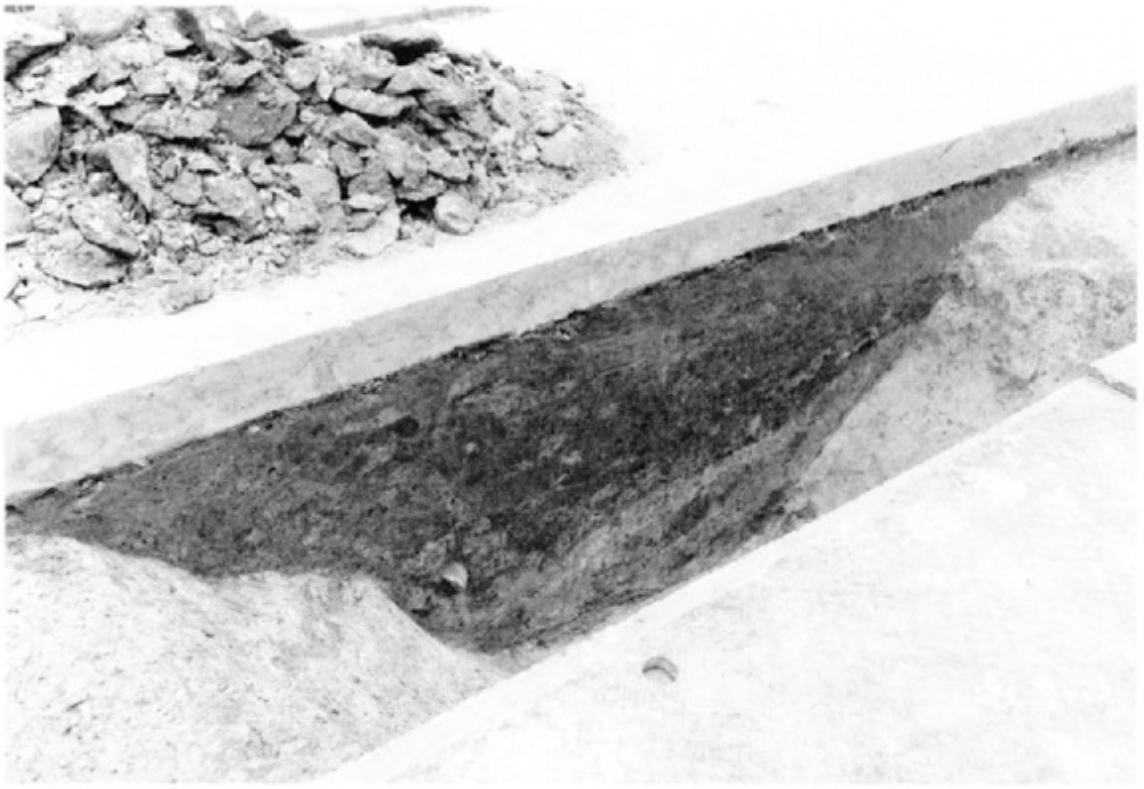
(2) J 46 SK41（東より）



(1)　K10　SK04（北より）

(2)　K10　SK04遺物出土状況（北より）

(1) K10　SD15（東より）



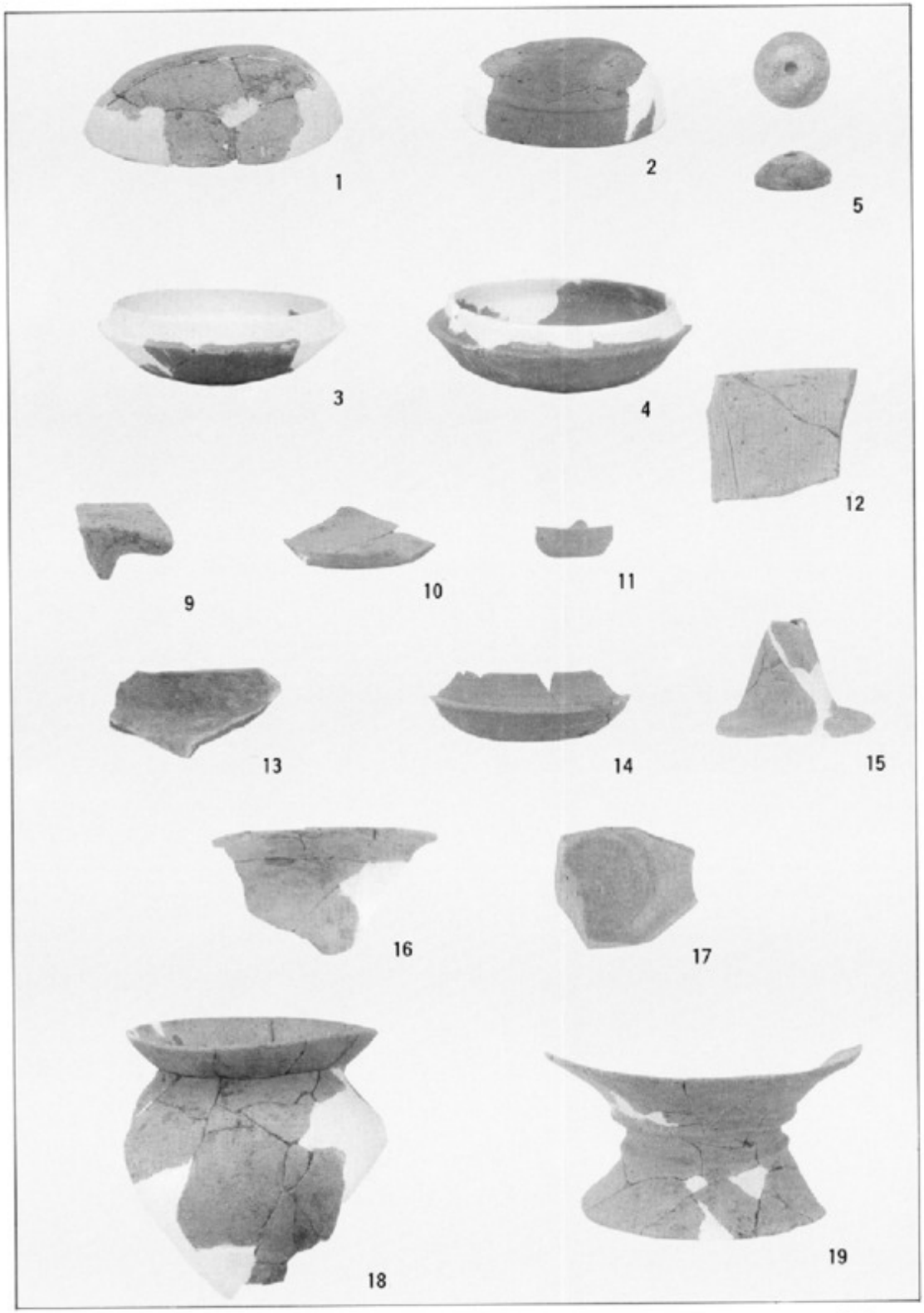
(2) K10　SD15南側土層（北より）

(1) K11　SD16（東より）

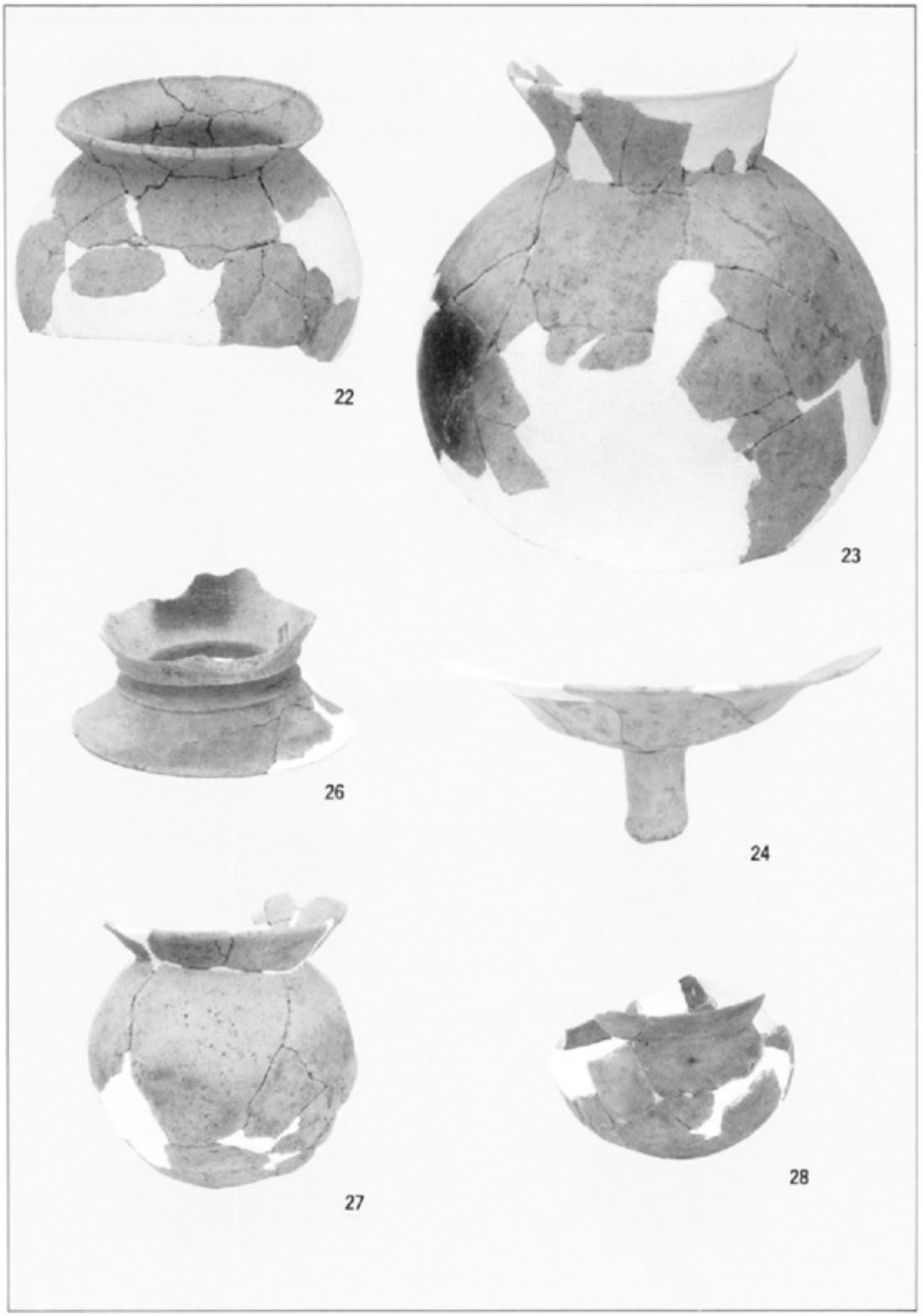
(2) K13全景（東より）

(1) 原地区3区全景（東より）

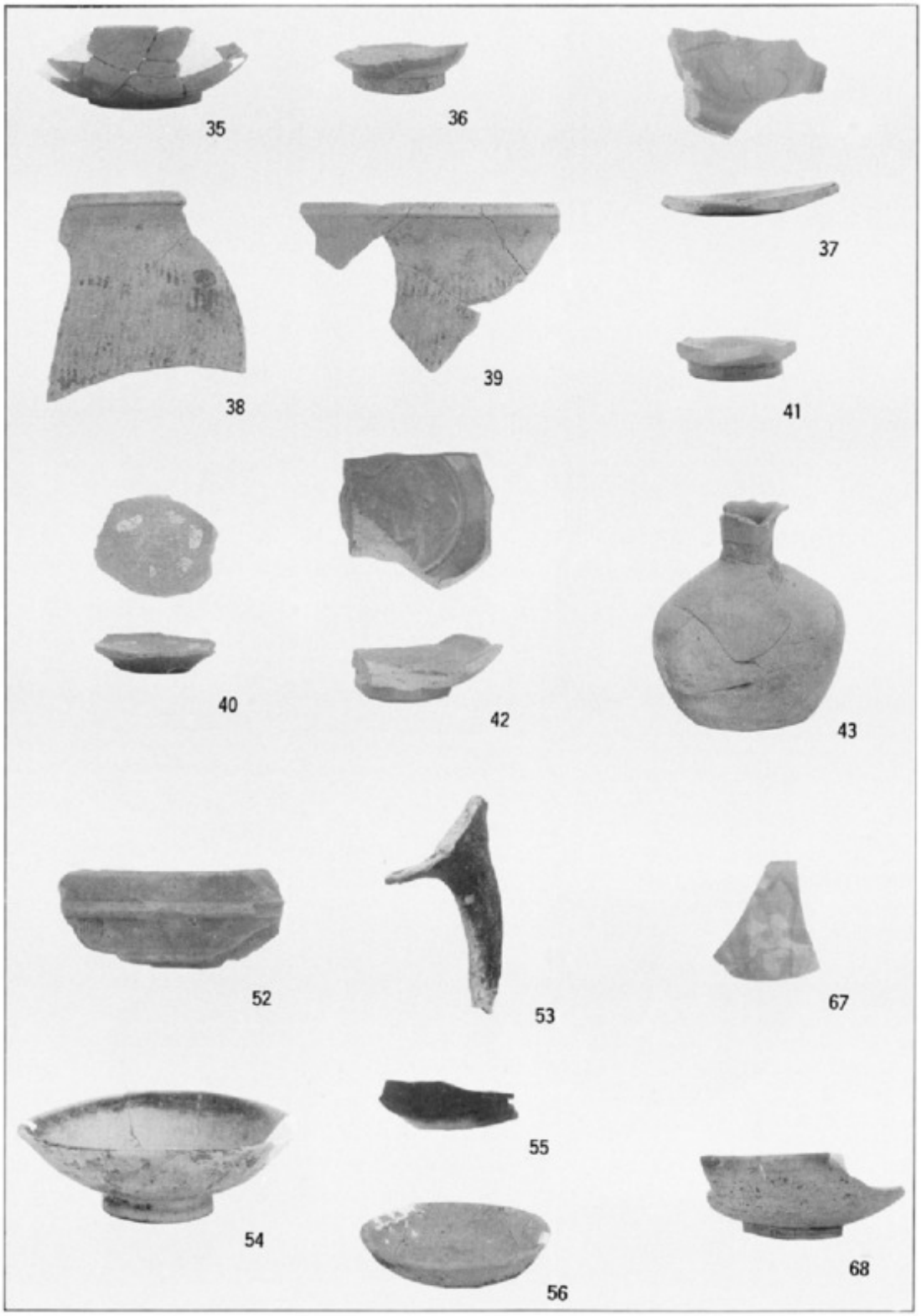
(2) 原地区7区全景（西より）



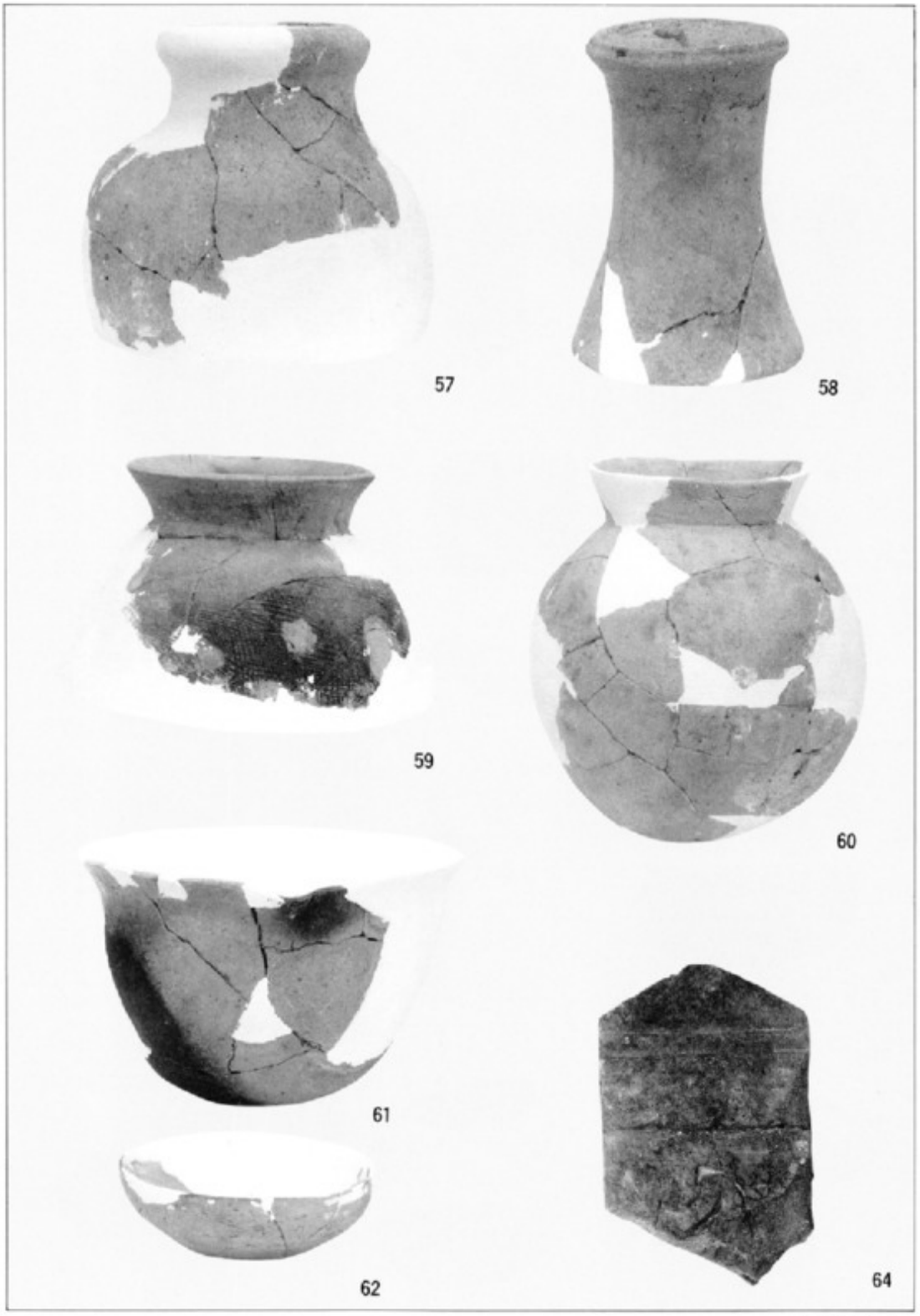
出土遺物（1）



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



出土遺物（4）

有田・小田部　14
原　遺　跡　5

――下水道工事に伴う調査――

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第266集

1991年　(平成３年)　３月15日

発　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
1丁目８の１

印　刷　ダイヤモンド印刷株式会社